
蝶の記憶

高階 桂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶の記憶

【Nコード】

N1561G

【作者名】

高階 桂

【あらすじ】

飛行機が発明されず、飛行船の利用が異常発達したとある世界。リンカンダム王国航空軍団に所属する女性大尉エルダ・フォリーオは、謎めいた空賊の襲撃に悩まされている辺境自治領である藩王国へ部下を率いて赴く。しかしながらそこは、牧歌的な美しい景観とは裏腹に陰謀渦巻く地であった。フォリーオ大尉は藩王国王女システィハルナと共に、正体不明の空賊と戦うことになる。はたして空賊の真の目的はなにか？そして、藩王国内にいる内通者は誰なのか？

1 手紙

— もし蝶が戦争するとしたら……それはとても美しいだろう —

親愛なるエルダ・フォリーオ大尉殿

久しぶりのお便りになります。たしか……あなたに新入り士官に関する愚痴を聞かされて以来じゃなかったかな？ その後、ティリング少尉の扱いは上達しましたか？ それとも、ゴンドラから突き落としたりしたかな？

笑えない冗談はともかく、今回のお便りの本題は……言うまでもありませんね。今ごろあなたは派遣部隊の編成に伴う瑣事に忙殺されていることでしょう。この手紙がそちらに届くのは、おそらく部隊（という正式名称になるのかな？ 遠征部隊？ 派遣集団？ 援助群？ わたしはまだ聞いていません）進発の前日くらいになるはずです。手紙を託した商用飛行船が空賊に喰われなければ、の話ですが。

こちらの被害は深刻です。実際、喰われた商用飛行船はまだないけれど、よほど割増料金を積まないと、どの船長も飛行を渋るほどの状況。この手紙……ほんの短い、青緑切手二枚で届く便りでさえ、危険手当と称して通常の三倍の委託料を吹っかける始末。よっぽど、軍用郵便扱いで送ってやろうかと思ったくらい。

前置きはこのくらいにして……とりあえず、レスペラ派遣部隊隊長就任おめでとう、と言っておきます。たぶんあなたのことだから、この抜擢はレスペラ側の連絡将校にわたしが指名されたから、気心知れた自分にお鉢が回ってきたのだろう、とでも思っていることで

しょう。そしてそれは：：半分は真実なのでしょうね。わたしはレスペラで唯一の航空軍団士官学校卒業生だし、部隊勤務の経験もあるから、今回の一件で連絡将校に選ばれるのは当然と言えます。そして、そちらの連隊長が、送られてきた連絡将校の履歴を見て、自分の連隊に士官学校同期どころか寮が同室だった士官を見つければ、彼女を派遣したくなるのも道理でしょう。難事となることが判りきっている現地軍たるレスペラ警察軍との連絡調整を良好に進めるための好条件と言えるのですから。

でも、あとの半分はあなたの実力です。派遣する以上、有能な士官に率いられた優秀な部隊が選ばれるのは当然。あなたのことだから、多分以前よりも腕をあげていることでしょうね。部隊指揮官としても、艇長としても、砲手としても。（プレッシャーを掛けすぎかな？）レスペラには、胸を張って飛んできて下さい。

それと：：たぶんあなたも最も気になっていることでしょうが、空賊の目的ははまだはっきりしてはいません。少なくとも、これを書いている時点で空賊からの接触は皆無。最近語られている冗談混じりの噂で一番の傑作は、タガレーの某軍閥の頭領が、システイハルナ王女を嫁に所望したのを、藩王が撥ね付けたからその報復だ、というものです。二番目は、二十二年前の内戦で追放されたシャンディエル王子系一族の復讐、って説。これはちよっと、笑えないかな。

わたしの近況は：：どうせすぐに会えるんだから書く必要はないでしょう。でもこれだけは書くべきかな。空賊来襲以後は、市街地の対空砲すべての指揮統制を任されています。たったの四門だけです。他に適任者もないので、連絡将校と兼任になるみたい。まあ、部下になかなかよく出来た中尉がいるから、対空砲は彼に任せちゃってもいいんだけど。（期待しないように。美人の奥さんと三人の娘がいるお堅い中年男だからね）

それでは、一日も早いレスペラ到着をお待ちしております。

レスペラ藩王国警察軍少佐／リンカンドム王国航空軍団少尉（退役）

フィーニア・クロイ

追伸 食糧その他は問題ないけれど、一部日用品に品不足が生じています。洗剤や予備の衣類、紙類やインクなんかは多めに買い込んでいた方がいいわね。それと、化粧品一式買い揃えて持ってきてくれるととてもありがたいです。今こっちで口紅一缶いくらするか知ったら、顎が地面にめり込むわよ。

1 手紙（後書き）

第一話をお届けします。お読みいただきありがとうございます。あまりにも短いので第二話も同時掲載いたしました。ご挨拶などは第二話後書きに書かせていただきます。

2 新聞

予定時刻を過ぎても、『レンゼルブ婦人』は到着しなかった。

わたしはまぶしい朝日に目を細めながら、『レンゼルブ婦人』がやってくるであろう東の空を眺めた。だが、やや霞がかかった春の青空の中に、艇影は認められなかった。

「これだから民間人は……」

やや離れて立つ操舵手のティリング少尉が、ぶつぶつとこぼす。

わたしは臨時係留場となっている車両倉庫前に視線を転じた。われわれの艇番206、『紫の虎』はすでに離陸準備をすべて整え、堅く締まった地面に斜めに打ち込まれた杭に結ばれた六本の係留索で辛うじて地表に繋ぎ留められている。ボイラーからの熱気を注ぎ込まれて最大まで膨らんだ紡錘形の灰青色の気嚢は、青空を背景とするとさながら洋上を漂う海豚の屍骸のようにも見える。その周囲に三々五々突っ立っている整備班の連中は、一様に恨めしそうな表情で東の空を眺めていた。

「いかがいたしましたよう、大尉殿」

整備班長であるテリアー曹長が振り返り、そう訊いてきた。

「……見張り員およびボイラー番各一名を残して屋内待機。『レンゼルブ婦人』が到着次第、事前計画通りに進めます」

わたしは歯切れ悪く答えた。テリアー曹長が敬礼し、部下たちに指示を与え始める。

「あたしたちはどうするのさ、大尉？」

手にした新聞から顔を上げぬまま、サンヌ軍曹が問う。

「このまま待機よ」

わたしは投げやりな口調で応じると、手近にあった雑具箱に腰を下ろした。

「やれやれ」

年寄りじみた口調でこぼしたサンヌが、一瞬だけ新聞から目をそ

らし、自分の足元に工具箱があることを確認すると、そこを目指して慎重に腰を下ろした。ティリング少尉だけは、いまだ視線を東の空に据えたまま、苛立ちを隠せない様子で突っ立っている。わずかな風が、彼女の明るい金色の髪をそよがせるのを眺めながら、わたしはため息をひとつついた。

思えば、今回の任務は最初からつきに恵まれていなかった。第二航空連隊長直々の命令で、空賊の跳梁に悩まされる藩王国救援を目的とした派遣部隊の編成にかかったのが五日前。その翌日にはわが国とアクレ公国との国境で飛行船同士の小競り合い：：お互い数発ずつ『腰だめ』で撃ちあった、いわば『敵対する軍隊同士の強面の挨拶』だけだが：：が勃発し、その対応が優先されたために派遣部隊の規模が一個航空中隊から半分の一個航空小隊：：わずか二艇に削られてしまった。さらに出発直前になってから、頼りにしていた整備班の重鎮コシュト一等軍曹が虫垂炎で緊急入院という始末。

不幸はそれだけに留まらなかった。なんとか事前計画どおりに進発した二艇のうち艇番207が、経由地のワラン市で発動機故障のために立ち往生。指揮と修理を副長のデリグ中尉に委ね、ともかくも先を急ごうと整備班を列車で先行させ、一艇だけでようやく最終目的地の手前、ダルムド市までたどり着いたというのに：：約束の時刻になっても、契約した民間籍輸送飛行船が現れない。

『紫の虎』単独で進発するわけには行かなかった。目的地たるレスペラ藩王領までの距離は約三万二千。軍用飛行船は小型軽量を旨として設計されているので、その航続距離：：主としてゴンドラ搭載の発動機用ガソリンの量に制約される：：は二万前後が普通であり、わがアマツバメ級飛行船『紫の虎』もその航続力はカタログ上でも一万八千に過ぎない。したがって、どこかで給油する必要があるが、そもそも陸路すら通じていない中央山岳地帯に位置するレスペラ藩王国へ至る航路の途中に適当な給油地点などない。鈍重だがペイロードの大きな輸送飛行船に余分なガソリンと灯油を積み込み、適切な個所で着陸し、補給してもらう以外に、解決方法はなかった。

「まったく：：」

相変わらず突っ立ったまま、テイリング少尉が毒づく。軍隊において、遅刻は犯罪的行為と見なされる。近代戦において、戦術的タイミングは勝敗を決しかねない重要なポイントだからだ。テイリングのつぶやきを聞き流しながら、わたしは再びため息を：：今度は小さめに：：ついた。

わたしは、サンヌが真剣に読み込んでいる新聞に目をやった。黄ばんでこそいないが、古新聞であることは一目でわかった。おそらく、車両整備の連中がペンキ塗りや部品洗浄の際に使おうと持ち込んだものだろう。

「暇つぶしにはいいわね。どこにあったの？」

「あんたの尻の下だよ、大尉」

サンヌがぼそりと答える。

わたしは腰を上げると、雑具箱を開けてみた。ぼろ切れや雑多な部品類の上に、一束の新聞が置いてある。わたしはその一部を取ると、ふたたび腰を下ろした。

発行日は、二十日ほど前だった。誰かがテーブルの上に広げてお茶を飲みながら読んだらしく、茶色い環状の染みがついたその新聞を、わたしは斜めに読み飛ばしていった。

社会面にはたいした記事はなかった。いつもどおりの強盗と殺人、窃盗に詐欺といった暗い話ばかりだ。国際欄はまだ読み応えがあった。オルシャ共和国で橋が落下し三十人が死亡、鉄材節約の手抜き工事の疑いで建設業者六人逮捕。大陸環状鉄道設計画国際会議は線路軌間規格をめぐって紛糾、着工予定時期ははまだ未定のまま。イルギス王国で議会選挙、野党愛国行動党躍進。ヴィーカル連合王国でガス式飛行船実験進む：：。

わたしはその記事を丹念に読み込んだ。やはり飛行船乗りとしては、気になる記事である。

通常、飛行船はゴンドラの内部で灯油などを燃焼させ、生じた熱

気を気嚢に送り込むことによって……熱せられた空気は体積が増えるので、周囲の大气に比べ『軽く』なる……浮力を得る。それに対し、最近研究が進められているガス式飛行船は、熱気の代わりに空気よりも軽量なガスを気嚢に詰め込んで浮力を得ようとするやり方だ。今のところ、利用が有力視されているガスは、鉄に強い酸を掛けた場合に生じる水素ガスと、石炭を加熱した時に生じる石炭ガスの二種類である。より軽量なのは前者だが、貴重な鉄材を大量に使用するためにガス生成のコストがあまりにも高く、また引火しやすい危険である。石炭ガスはそれよりも安価だが、それほど軽量ではないので熱式に比べパイロード面でのメリットが少ない。いずれにせよ、ガス式は下降時のコントロールの難しさとコスト……熱式ならば、加熱をやめれば自然に降下を始めるが、ガス式では弁を開いて気嚢内のガスを逃がす……貴重なガスを……必要がある。そのようなわけで、近い将来においても、軍民問わず飛行船の主流は熱式であり、このヴィーカル連合王国での実験も航空開発よりもむしろ科学技術の高さを諸外国に見せつけることのほうが主眼であろう。あるいは、国王の『ペット・プロジェクト』なのかもしれない。わが『紫の虎』の百数十倍はあろうかという大きさの巨大ガス式飛行船の想像図を眺めながら……キャプションにはご大層にも『大陸縦断飛行に出発する巨船の想像図』と書いてあった……わたしは鼻で笑った。

「こいつは永久保存版だね、大尉」

サンヌが言いつつ、自分が読んでいた新聞を渡してくれた。

『王国航空軍団、レスペラ藩王国支援に軍用飛行船を派遣』という見出しが、わたしの目に飛び込んでくる。

わたしは苦笑しながら、自分たちのことが書かれた記事を読み飛ばした。こちらが気恥ずかしくなるほどに、記事の調子が軍礼賛的だったからだ。空賊の跳梁に悩まされる地方自治領に派遣される正義の味方。聡明かつ勇敢な士官らと、済んだ瞳の兵士たち。ぴかぴかに磨かれた徽章と、曇りひとつないブーツ。

わたしは新聞の発行元を確かめた。思ったとおり、この地方の有名な御用新聞であった。

傑作なのは、記事の下の方に添えられた細密画だった。軍用小型飛行船の前には、ぴしりと敬礼を決めた飛行服姿の三人の女性が描かれている。キャプションには、『派遣小隊を率いるエルダ・フォーリオ大尉と、その乗員』とある。

おそらく公刊資料を参考にしたのであろう、アマツバメ級軍用飛行船の描写は細部に至るまで正確であった。だが、乗員の方は多分に想像が混じっているらしく、不正確だった。推測だが、取材記者が送った電信には、わたしたちの詳しい容姿までは記載されていなかったのだろう。絵の中のフォーリオ大尉はきりりと締まった表情の、控えめに見積もってもわたしより五割増しくらいの美人で、飛行服の胸部は異様なまでの盛り上がりを見せていた。その隣に立つサンヌ・アトム軍曹は、三十代半ばという年齢と美人とはお世辞にも言えぬ顔立ちにはほぼ正確に描かれていたものの、わたしと同じくらいの背丈に描かれていた。：：実際は頭ひとつ分低いのだが。

一番曲解して描かれていたのが、ミラーユ・テイリング少尉であった。まるでどこか外国の純真無垢なお姫様、といった体の明るい髪的美少女が、びっくりするくらい大きな眼を見開いて敬礼している。少尉が美人であることに疑いを差し挟む余地はないが：：少なくとも、この細密画に描かれているような、さながら宗教画に見られる女神の背後で意味なく羽ばたいっている天使のような顔立ちではない。

「切り抜いというて」

わたしは新聞をサンヌに返した。サンヌがさっそく、尻の下から取り出した金切り鋏で、慎重に記事を切り抜き始める。

わたしはふたたび自分の新聞を手を取った。このあたりの地方政界に関する解説記事を半ばまで読み進めたところで、変化が生じた。

「来た！ 大尉、来ました！」

テイリング少尉の声に、わたしは弾かれたように立ち上がった。

彼女の指差す方向には……青空しか見えなかった。わたしは眼を凝らした。すると、ごくかすかだが、明るい色彩が認められるようになった。

わたしの手に、金属の塊が押し込まれた。……サンヌが、双眼鏡を渡してくれたのだ。わたしは礼の言葉をつぶやきつつ、使い慣れた双眼鏡を眼に当てた。鏡筒をわずかに動かし、空を探る。円形に切り取られた視界の中に、いくつかの色彩の混じった気囊らしき物体が飛び込んできた。間違いないだろう。

双眼鏡をサンヌに返したわたしは大声で整備員たちを呼ばわり、離陸準備を命じた。駆け足でやってきたテリア曹長がてきぱきと指示を飛ばし、薄茶色の作業服をまとった整備員たちが所定の位置に散り、各々に与えられた作業を再開する。

「やれやれ、やっとお出ましいかい？」

ずんぐりとした指で新聞を丁寧に折りたたみながら、サンヌがわたしの横に立った。

2 新聞（後書き）

同時投稿の第二話です。本作は一人称中篇作品です。まことに静かな始まり方ではありますが、今後空戦シーンや王女様なども出てきますので、続きも読んでいただけるとありがたいです。連載ペー
スですが：：当初は週一回の予定でしたが、あらためて読み直して
みると各話の分量があまりにも少ない（汗）　ですから水曜日と土
曜日の週二回連載を目指すことになりました。よろしくお願いしま
す。では用語解説　ペイロード／有効搭載量。　ペット・プロジ
ェクト／権力者などが自分の権勢を誇示する、あるいは自己満足の
ため行ふ事業のこと。単に趣味に走った場合もある。砂漠の真ん中
に国際空港を作ったり、無意味に高いビルを建てたり、何の役にも
立たない研究所を立ち上げたり、といった類の無駄使い。　では前
作殻竿飛行隊を読んでいただいた読者様向けの後書きを。：：すい
ません、また空ものです。おまけに主役は女性士官で、しかも大尉
です（汗）　たぶん：：年齢的にも瑞樹と同じくらいだろうな（笑）
えーと、本作は数年前に書いたもので、多少は手直ししましたが、
ストーリーその他は全く改変しておりません。ですから、「殻竿」
に似たキャラや描写などが今後出てきたとしても、こちらがオリジ
ナルということになります。ご了承下さい。

3 飛行

自分が失敗すると、やたらと攻撃的に振舞う人々がいる。

ある程度自分の過失を認め、妥協点を見出せばすぐに片がつく事柄も、こういう困った人が絡むと大事になる。謝罪するどころか一切非を認めず、失敗の原因を他人に押し付け、責任を他所に転嫁し、当事者であるにもかかわらず第三者的な立場に身を置こうとする。そして高圧的に振舞うことにより、冷静な議論を行う余地を与えずに、自らの保身を図るのだ。

『レンゼルブ婦人』の船長も、そんな困った人種の一員であった。わたしは怒声交じりの言い訳を聞き流し、遅刻は不問にすると告げた。彼とはこれから長い付き合いになる。明日には整備班と残余の装備を運ぶためにもう一度飛んでもらわねばならないし、207号艇が到着すればその移動の支援も必要となる。臨時に補給品を運んでもらうケースも出てくるだろう。いまここで彼に臍を曲げられてはまずい。

とにかく船長を納得させ、物資積み込みを急ぐように説得したわたしは、精神的に疲れ果てて『紫の虎』のゴンドラに乗り込んだ。

「いやな奴」

装備品の点検を行っていたティリング少尉が、去ってゆく船長を睨みながら、つぶやく。

わたしは同意の唸り声で応じた。

「ありゃ、ホモだね、きつと」

サンヌが断言する。わたしは苦笑した。彼女にかかると、全人類男性の三分の一くらいは同性愛者らしい。

ティリング少尉は、サンヌの断言に対し厳しい視線を投げかけた。：性的な冗談はお好みではないのだ。ティリングの家系は数代前から数多の優秀な軍人を輩出している名門であり、彼女が受けた教育はかなり厳格なものだったらしく、どうやらそのカリキュラムの

中には下品な冗談を飛ばすという項目は含まれていなかったようだ。確かめたわけではないが、ティリング少尉は性に関してはかなり保守的な立場と思われた。

対するサンヌ・アドム軍曹は性的にはなんとも開けっぴろげな人物である。結婚歴二回に離婚歴二回。付き合った男の数は：：本人いわく『大尉のざっと十倍』に及ぶ。出身も貧しい漁村であり、読み書きを覚えたのは海軍に入ってからだという。軍歴はすでに海軍時代を含め二十年を超える。かたやティリング少尉はわずか半年前に士官学校を：：かなり優秀な成績で：：卒業したばかり。むりやり魚に例えれば、少し腐敗臭が漂い始めた干物と水揚げ直後で跳ね回っている小魚くらいの違いがある。

わが艇に配属された当初のティリングは、まことに扱いにくい人物であった。中途半端に頭の良い人物にありがちな、自分の知性を基準にしてしか物事を考えられない狭量さ：：本当に知性ある人物ならば、他人の知力や理解度を慮る対応が出来るはずである：：の持ち主だったのだ。

それを見事に矯正してしまったのが、サンヌだった。いや、矯正という用語は適切ではあるまい。むしろ教化とでも言うべきだろう。固い肉をじっくりと煮込んで柔らかくするがごとく、なにごとにつけても年季の差をさりげなく見せ付けるという実に婉曲的なやり方で、ティリングの尊敬を勝ち取ったのである。それ以来、ティリング少尉は実に扱いやすい人物と化した。もつとも、いまだサンヌのいささか品のないおしゃべりや育ちの悪さには閉口しているようだが。

高度一千で、巡航に入る。

『紫の虎』は、先行する『レンゼルブ婦人』の左斜め後方にぴたりと張り付いた。発動機の出力は約七割。その程度の速度で充分に出力全開の『レンゼルブ婦人』に追隨できる。編隊飛行の場合、より低速な機体を先行させるのが基本である。

『レンゼルブ婦人』の気囊は派手であった。典型的な商用飛行船らしく、左右両面に広告が描かれていたのだ。左舷では、いささか間の抜けた笑顔を浮かべた美人が、とある酒類醸造所製品を愛飲するように誘惑し、一方右舷では、コミカルに描かれた数種の動物が、地方銀行への預金を勧めている。

そういうわけで、わが『紫の虎』艇長兼砲手であるわたしは、編隊飛行の際には対地監視とともに僚機との相対位置観測の役目も課されているので、脳をすっかりアルコールにやられてしまったかのような美人と数十秒おきに顔を合わせる羽目に陥ってしまった。どうせ顔を合わせるならば、裏側の『うさぎさん』や『くまくん』の方がずっと好ましかったのだが。

第一行程は約五時間に及んだ。その間、わたしとサンヌが一回ずつ、テイリング少尉が二回、あれを利用した。：：航空軍団では、『衛生筒状容器』と婉曲に呼称される琺瑯引きの蓋付き容器のことである。当艇乗員がすべて女性で構成されている理由のひとつが、これである。狭いゴンドラの中、プライバシーはないに等しい。

ちなみに、『衛生筒状容器』の中身は、可能な限り速やかに艇外に投棄せよ、とマニュアルには定められている。さすがに納税者の頭上に撒き散らすわけにはいかないので、市街地や農業地帯のみを飛行する任務では『お持ち帰り』となるが、海上や森林、山岳地帯などでは使用者が手ずから投棄するのが原則であり、わたしたちも遠慮なく艇外投棄を行った。どうせ眼下は道すらもない険しい山岳である。付け加えるならば、この艇外投棄にもそれなりのコツがある。バケツで消火活動を行うのと同様に、容器を鋭く振り出して液体を一甌にして放り出すのが肝要である。慣れない者がやると飛び散った液体がゴンドラに付着し、あとあと面倒なことになる。

ほぼ正午頃、われわれ二艇は予定通り燃料補給地点である山間の小盆地に着陸した。『レンゼルブ婦人』乗員の手を借り、熱源用の灯油と発動機用のガソリンを手押しポンプで補給する。二十分足らずで作業は終了し、二艇は再び空へと舞い上がった。

人類が空への切符を手にしてから、すでに百年が過ぎた。

最初に発明された『空飛ぶ』乗り物は、熱気球であった。浮遊の原理は、熱式飛行船と同様である。熱せられた空気の体積が増えることを利用して、球形の気囊に熱気を送り込み、浮遊したのである。いったん飛び上がればあとは風まかせの、なんとも不自由な乗り物であり、好事家や冒険家がわずかに製作する程度であった。

だが、その不自由な乗り物に大いなる利用価値を見出したふたつの組織があった。軍隊と広告業界である。前者は究極の高所偵察の手段としてこれを採用し、後者は宣伝媒体としての利用法に気付いたのだ。こうして、熱気球は単なる発明品から便利な道具へと進化した。いくつかの会戦では、気球部隊の有無が勝敗を分けたし、経済先進諸国の大都市では、企業名や商品名を記した巨大な幟を垂らした無人氣球が空にばかりと浮かんでいる風景が日常と化した。

今からほぼ八十年前に、熱気球は更なる進化を遂げることになる。きっかけは、内燃機関の発明と、その爆発的な普及にあった。熱気球の発明当時から、これに何とか推進力を与えようとする試みは繰り返されてきた。しかし、人力や風力の利用では得られる推進力は微々たるものであり、実用的な推進装置とはならなかった。石炭を燃焼させる内燃機関が発明されると、熱気球の改良に取り組んでいた連中はこぞってそれをゴンドラに搭載し、船のそれに似たスクリューを取り付け、飛ばすようになった。

当時の石炭利用の内燃機関は高出力ながら重く、飛行推進装置として適しているとは言い難かったが、それでも弱い風ならば逆らって飛ぶくらいのことはできた。熱気球は、単なる『乗り物』から、飛行船という『交通機関』へと進化したのである。空気抵抗を受けにくくするために、気囊の形状も変化した。いくつもの形が試されたが、最終的に落ち着いたのは紡錘形だった。

熱気球を積極的に利用していた軍隊は、飛行船に飛びついた。今までの気球では、味方支配地域の上空に索付きで浮かぶ程度が関の

山だったが、自力推進が可能となったことにより、本物の斥候部隊のごとく敵地に侵入したうえでの偵察活動が行えるようになったのだ。

一方民間においては、飛行船の利用は少数に留まった。物資輸送の用に供するには当時の飛行船はあまりにもろく、ペイロード不足だったし、広告手段としても製造コストが高く、無人気球に取って代わるものではなかったからだ。一部の企業は離島間の人員輸送用に定期飛行船航路を開拓したが、船よりも悪天候に弱く、また運行コストがはるかに高かったために長続きしたところは少なかった。かなりの数の冒険家は、長距離仕様の単座型飛行船を製作し、これをもって当時未踏の地であった中央山岳地帯の探検を試みたが、その半数は未帰還となった。当時の技術水準では、いささか無謀な試みであったと言える。

その十数年後、内燃機関の発達で飛行船に更なる進化をもたらす。石油を利用した効率の良い内燃機関の搭載と、重量当たりの熱量が多い精製燃料を使用するボイラーの採用により、出力と速度、ペイロードのいずれもが大幅に増大した飛行船は、高速輸送機関としての地位を確立することとなる。人口密集地帯での大量人員輸送には、その数年前にわがリンカンダム王国で発明され、急速に大陸各国に導入された蒸気機関を利用した鉄道が多用されたが、より遠隔地への人員輸送、島嶼間での人員および一部貨物輸送、そして山岳地帯での全般的な輸送業務は、進化した飛行船が一挙に引き受けることとなった。

もうひとつ飛行船が活用されたのが郵便業務であった。各国は飛行船を利用した国内郵便貨物ネットワークを競って構築、後には、それらを結び合わせた国際郵便業務が発達した。少し遅れて発明された電信の影響で、飛行船利用郵便業務はその高速性に関する優位を失ったが、電信で長文のメッセージを送るのは高コストであり、今でも郵便物の輸送は飛行船の重要な役目となっている……。

4 遭遇

飛行中のゴンドラの中というのは、大変にやかましい。

むろんその元凶は、後部で唸りを上げている発動機にある。人員輸送を主とする大型飛行船では、発動機をブームの先に取り付けたり、ゴンドラの下部に置いたりして騒音の軽減を図っているが、操舵手が人力で発動機そのものの方向を変えることにより操舵を行う軍用小型飛行船の場合、発動機は操舵手の手の届く位置にあるのが普通である。そしてもちろんゴンドラは小さく狭いから、操舵手以外の乗員も否応なしに騒音にさらされ続けることになる。

そういうわけで、アマツバメ級のような小型艇のゴンドラには、耳栓が標準装備されている。むろん騒音すべてを締め出すだけの能力はないが、少なくとも『やかましい』を『わずらわしい』くらいのレベルまで下げることが可能だ。

わたしはその耳栓を外した。サンヌが、肘をぼんと叩いて注意を促した上で、耳を指差す仕草をしたからだ。これは、航空軍団が正式に制定したゴンドラ内ハンドサインで『耳栓を外せ』という意味になる。

「船影一、十時、高！」

騒音に負けぬように、サンヌが叫ぶ。

ゴンドラ側壁に作りつけてある物入れから双眼鏡を掴み取ったわたしは、すぐに十時方向上方の空を探り始めた。ここはすでに中央山岳地帯に深く入り込んだ空域である。民間の航路など、レスペラ藩王国への不定期連絡船以外皆無だ。しかも事前情報では、それすらも空賊の跳梁によって事実上途絶状態にあるという。わたしたち以外に王国軍航空部隊がいるという情報も受け取っていない。となれば、船影の正体は三つしか考えられない。

臨時にレスペラに向かった、あるいはその帰途にある民間籍飛行船。レスペラ藩王国が保有する飛行船。そして、レスペラに攻撃を

仕掛けている空賊。

……いた。

わたしの双眼鏡の視野に、ひよいと黒い影が滑り込んできた。鳥とは明らかに動きが違う。おそらくは比較的小型の飛行船だ。下部のゴンドラはまだ黒い点にしか見えない。距離は二千はあるだろう。よく視認できたものだ。さすがにサンヌである。

「距離二千！ サンヌ、『レンゼルブ夫人』に接触報告を！」

双眼鏡を眼に当てたまま、わたしは早口で怒鳴った。飛行中のゴンドラ内で意思の疎通を行うには、ハンドサインに頼るか、大声を張り上げるしかない。

「了解、大尉！」

サンヌの応じる声を聞きながら、わたしは再び双眼鏡を動かし始めた。船影を中心に渦巻きを描くように動かし、周囲の空を探ってゆく。戦闘任務の場合、二艇一組というのが最小戦術単位である。もしあれが空賊ならば、最低でももう一艇いるはずだ。

やはり。

左方少し遠いところに、ふたつ目の船影があった。おそらく同じクラスの艇であろう。

「新たな船影！ 十時、高！ 距離……二千！」

わたしは双眼鏡をいったん下ろし、肉眼で目標を捉えようとした。手前側の飛行船はすぐに見つかった。明らかに、近づきつつある。自艇の速度と進路を確認したわたしは、双眼鏡を手前の船影に向けた。視野を固定し、相手の速度と進路を読もうと試みる。

「速度……十！ 距離……接近中！ 迎撃進路の公算大！」

迎撃進路というのは、お互いの進路が交差しないし交差し、しかもその時点で双方の未来予想位置が最も至近となる場合をいう。言い換えれば、向こうの艇はこちらを射撃するのに好適な位置へ向けて進んでいるというわけだ。その上、高度は相手の方が高い。飛行船は気囊の下にゴンドラを吊り下げているという構造ゆえに、上方が弱点かつ搭載兵器の死角となる。

やはり、空賊か。

しかし。なぜ？

飛行船同士の交戦というものは、彼我がそれを望んでいる以外の場合には起こりにくいのが普通だ。言うまでもなく空は広大だし、三次元で機動し、なおかつ滞空時間が制限されている飛行船同士であれば、たとえ出沒空域が限定されているとしても、遭遇すること自体がまれである。したがって、戦時における飛行船同士の戦闘は、敵支配地域に攻撃ないし偵察などの任務により進出した戦力に対する迎撃戦闘か、競合空域における戦術的優位を得るためのいわゆる戦闘哨戒中の制空戦闘が主となる。単に移動中の飛行船を空中で捕捉するなど、通常では不可能に近い。

こちらの移動計画が漏れていたのだろうか。今や無線電信の時代である。われわれの出発を見届けた空賊の仲間が、空賊の根拠地に無線電信を送る。待機していた二艇が離陸する。……少なくとも、時間的には間に合うだろう。なにしろこちらは、ガソリン節約のためにレスペラまで一直線の針路を取っているのだ。特定の空域で待ち伏せていれば、当方が勝手に飛び込んでくるという寸法である。

現行の国際条約および慣習法によれば、その所属が標識等の不備によりつまびらかでなく、かつ護身用小火器よりも強力な武器を空中で使用可能な状態で積載している飛行船は、その実効運用者の意図にかかわらず、空賊飛行船と見なしてよいとされている。これは、海賊に関する取り決めを準用したものである。そしてもちろん、いずれかの国家に所属する軍用ないし公安用飛行船は、たとえそこが自国の管轄権のおよばない公海の上空や国境未確定地であったとしても、空賊飛行船の拿捕に務める義務がある。

今回の任務において、わたしが上官から指定された交戦規則では、相手が交戦の意図を見せただけで発砲しても構わないとされている。わたしはとりあえずサンヌに信号旗を掲げるように命じた。『衝突の危険性有り。回避せよ』と『軍用航空機公務中』の二旗だ。これを見無視することは、少なくともリンカンダム王国の国内法上四つば

かりの罪を犯すことになる。

サンヌがずんぐりとした短い指を巧みに使い、ふたつの旗を索に結びつける。遠距離からでも視認しやすい鮮やかな色彩が、風を受けてばたばたとしたためく。

信号旗を充分に視認できる距離にもかかわらず、接近中の二艇は針路を変えなかった。

わたしは近いほうの艇に双眼鏡のピントを合わせた。気嚢は薄いグレイ。空の色に溶け込みやすいために、軍用飛行船によく採用されている色だ。旗や国籍徽章の類はいつさい見えない。ゴンドラの大きさから言って、三座艇か四座艇だろう。

「以後、接近中の二艇を敵性と見なす！ 手前を一番、奥を二番と呼称！ 対飛行船戦闘準備！ ティリング少尉、出力定格！ サンヌ、『レンゼルフ夫人』に高度上昇と回避運動を指示！」

覚悟を決めたわたしは双眼鏡を下ろし、そう命じた。

逃げるわけにはいかなかった。少なくとも、当面は。軽快な『紫の虎』だけであれば逃げ切れるだろうが、鈍重な『レンゼルフ夫人』はさしずめ前足を二本とも傷めた鹿のようなものである。すぐに追いつかれ、屠られてしまうだろう。リンカダム王国航空軍団軍人として、民間人を見殺しにするわけには行かなかったし、『レンゼルフ夫人』なしでは今後のレスペラ藩王国増援計画にも支障をきたす。

『レンゼルフ夫人』に対し信号旗を振り終わったサンヌは、早くも九型旋回砲：：当艇唯一のまともな兵器：：に被せられていた防水布を外し終わっていた。わたしは素早く各部をチェックした。砲口内、薬室、閉鎖機、よし。

「少尉、高度、針路維持！ サンヌ、弾込め！」

わたしの命令を受け、サンヌが旋回砲の弾薬筒を布製の弾薬袋から取り出した。彼女いわく『あたしの最初の男の持ち物と同じ大きさ』という太くて長い紙筒が、薬室に押し込まれる。薬室を閉じたサンヌは、薬室に通じる点火口に雷管キャップをかぶせ、撃鉄を撃

発位置まで起こし、わたしの左肩をぽんと叩いた。発射準備完了の合図である。

「一番距離、千！」

わたしはそう宣しながら、風を読もうと務めた。

世間一般では直接射撃というものに対しかなりの誤解が生じているようだ。そのひとつに、きちんと照準を合わせさえすれば必ず銃砲弾は命中する、というものがある。

それは物理学的に誤った認識である。光は空気中で基本的に直進するのに対し、銃砲弾は発射直後から重力の影響を受けて下方に向けてわずかずつ落下するからだ。通常、遠距離直接射撃というものは射程を稼ぐためにやや上方に向けて行われる。球技でボールを遠くに投げる場合と同様、ある程度放物線を描くように撃てば、遠くまで銃砲弾を届かせることが可能だからだ。

したがって、眼で見た通りに狙って遠距離射撃をした場合、銃砲弾は必ず目標よりもずっと下方を通過することになる。つまりは外れるわけだ。命中させるには、使用する銃砲の弾道性能を熟知し、なおかつ彼我の相対距離を正確に把握し、その射距離において銃砲弾が通過するであろう個所と目標の位置を一致させなければならぬ。……この説明がよく解らない人は、『玉入れ』を思い起こしていただきたい。任意の位置にある籠に放物線を描いて玉を投げ入れるには、籠の口が形作る円内に、落下に入った玉を通過させる必要がある。これは、遠距離射撃と原理的には一緒である。

もうひとつ重要なのは風の影響である。高速で飛翔する銃砲弾に対するその影響ははなはだ小さなものだが、たとえ砲口付近では顕微鏡レベルのわずかなずれであっても、銃砲弾が目標に到達する頃には大きな誤差となる。まして、空中では地上よりも空気の流れは複雑である。

さらには湿度や気温も、弾道に影響を与える。過度の湿り気は空中での抵抗を増やすし、光が分厚いガラスを通過するときにはわずかに屈折するように、銃砲弾も温度差の激しい空気の塊の境界を抜け

るときにわずかにその進路を捻じ曲げられるのだ。

そして最大の問題は……彼我ともに三次元機動をしているという事実である。

固定された射座からの対人狙撃でさえ、目標が動いていれば難しい射撃となる。ある程度の射距離があり、かつ目標が歩行している場合、照準器の中心に目標を捉えた状態で引き金を引けば、それは百パーセント外れるのだ。銃弾が狙った位置を通過するころには、目標は少なくとも一歩先を歩んでいるからである。命中させるには、目標の未来位置を予測し、そこに照準器の中心を合わせて、引き金を引くしかない。

対飛行船射撃も、対人狙撃技術の延長線上にあると言える。むしろ、こちらの方がはるかに難しくなる。人間の移動速度は飛行船とは比較にならぬほど低速だし、上下方向への変化もわずかである。また、対人狙撃は射手が静止状態にあることを前提とするが、今日の空中対飛行船射撃はこちらも機動していることが大半だ。

対人狙撃よりも楽な点はふたつある。ひとつは、目標たる飛行船の気囊が人間の頭部や胴体よりもはるかに大きいことである。したがって、対人狙撃ほどの精度は要求されない。ふたつめは、対人狙撃が即座に人の殺傷に直結するのに対し、飛行船射撃は基本的に敵飛行船の浮力減衰を狙ったものにあるという点だ。今日の軍用飛行船の気囊はいわゆる『細胞構造』になっており、複数の命中弾を満遍なく浴びせられない限り完全に浮力を失うことはない。もちろん戦闘行為である以上、乗員が墜死する可能性はある。だが、少なくとも引き金を引く瞬間に神に向かって許しを乞う必要はないだけ、気は楽だ。もっとも、陸軍の狙撃兵に言わせれば、われわれ航空軍団射手のそのような態度は、崖から人を突き落としておいて、殺したのは地面だと主張するようなものだそうだが。

九型旋回砲はわが航空軍団が誇る最新の対飛行船砲である。その用途は飛行船搭載はもちろん、地上で連装ないし四連装架に装備し、

対空目的での使用も可だ。初速が速く、有効射程は四百。最大射程は七百に達する。

軍用飛行船が登場した頃、その搭載兵器はせいぜい歩兵銃だった。そしてその武装も空中での使用を想定したものではなく、むしろ着陸時の乗員の自衛用に積み込まれたものであった。敵の飛行船と出会うこと自体がまれだったので、飛行船同士の戦闘を考慮する必要がなかったせいだ。だが、飛行船が偵察や爆発物を搭載しての妨害攻撃に頻繁に使用されるようになると、その迎撃専用の飛行船が登場してくる。まあ、兵器ないし軍用システムというものはそういうものである。強力な兵器や有効な戦法が出現すれば、必ずその対抗手段が発達するのだ。

そういうわけで最初に開発された本格的武装飛行船は、戦場上空に滞空するタイプの大形飛行船だった。大型化は長時間飛行と複数の兵器搭載の要求からの必然であった。搭載兵器はさまざまものが考慮されたが、比較的小形の飛行船に命中させねばならない必要性和、重量に制限があった関係上、葡萄弾を発射可能な軽量カノン砲が選定された。

しばらくのあいだ、その空飛ぶ要塞は無敵の存在でありつづけた。だが、発動機の発達は飛行船の高速化を促し、やがてこれらの巨鯨は周囲を高速で飛び回る小型飛行船に容易に撃破されてしまうようになった。防御側も小型飛行船の開発を余儀なくされ、やがて軍用飛行船同士の戦いは高速かつ小型の機動性に優れた艇同士が、お互い有利な射撃ポジションを得ようと動き回るといふ、さながら猫の喧嘩の様相を呈するようになった。

さらに火砲が発達し、施条砲身が一般化し、弾丸と発射薬を一体化させた弾薬筒が発明されると、飛行船は射程の短い葡萄弾を捨て、比較的口径の小さな……気囊を撃ち抜けるだけの性能があれば充分だった……高初速かつ長射程のカノン砲を装備するようになった。いわば、地上部隊の散兵が装備する狙撃用施条銃の空中版と言える兵器である。これらカノン砲にはさらに命中精度を高めるために、

望遠鏡式の光学照準器が取り付けられた。現在に至るまで、これら高精度の小口径カノン砲が、各国軍用飛行船搭載兵器の標準となっている。

先の大戦でも、飛行船部隊は大きな活躍を見せた。とりわけ革新的と言えたのが、ヴィーカル連合王国が先鞭をつけた擲弾積載飛行船の集中運用であった。複数の擲弾を搭載した八から十二艇程度の中型飛行船団に、護衛の小型船数艇を付け、敵集結地や兵站施設の上空で擲弾を投下するという戦術である。これはもともとわがリンカンドム王国陸軍が誇る列車砲に対抗するために生み出された戦術であったが、その長距離進出能力と擲弾投下精度の高さは列車砲をはるかに上回っており、大戦参加各国はこぞってこの戦術を採用、飛行船戦力の拡充に努めた。その結果、開戦当初には両陣営合わせでも百数十しか装備されていなかった軍用飛行船は、終戦時には『東部同盟』だけでも二千を数えたという……。

4 遭遇（後書き）

用語解説 九型旋回砲／本作における銃砲は金属薬莢発明以前の設定。各種銃器および小口径カノンは弾丸と発射薬を一体化させた紙製弾体を薬室に後装、閉鎖の後、点火口にはめ込んだパーカッション（雷管）・キャップを撃鉄が叩くことによって発火、発射にいたる。したがって全ての銃砲は単発式である。金属薬莢がないため、砲尾の閉鎖は不完全であり、飛行船搭載旋回砲は低圧で、口径の割りに反動が少ないという想定。^{ブリーチ} 葡萄弾／散弾の一種。 施条／ライフリング。 砲身や銃身の内部に刻まれた螺旋状の溝。 腔線。

5 戦闘

空賊側の戦術的選択はふたつあった。すなわち、二艇が連携を取りつつ『紫の虎』を襲うか、あるいは一艇ずつに分かれてこちらの二艇を個別に襲撃するかである。

一方のわれわれにも、ふたつの選択肢があった。『レンゼルブ夫人』を援護できる位置で戦うか、あるいはいったん無視して自由な機動を行うかである。

わたしは迷わず後者を選択した。空賊側二艇がこちらへ向かってくるならば、『レンゼルブ夫人』の援護を行わなくても問題はない。一方敵が分散してくれば、わが艇が勝利するチャンスが増大する。『レンゼルブ夫人』は低速のうえ非武装だが、逃げ回ることくらいはできるはずだ。

「少尉、緩上昇開始！ 進路、右三十度！」

わたしは誘うかのように『紫の虎』を機動させた。

「二番、千を切ります！ 一番、約七百！」

裸眼で距離を目測したサンヌが告げる。

どうやら敵は二艇ともわれわれを先に屠ろうと考えたようだった。進路をわずかに変えただけで、あくまで射撃好適位置にこうとしている。

「サンヌ、観測と装弾に専念して！ ティリング少尉、あとは任せたわよ！」

「了解！」

ティリングが声を張り上げる。

わたしは九型旋回砲の照準器を覗き込んだ。倍率は四倍なので、双眼鏡よりも視野は広く、目標を捉えるのは容易だった。一番に指定した空賊艇が、レンズの中に飛び込んでくる。視程も良好だ。

「一番、二番ともに進路一定！」

大きいが冷静な声音で、サンヌが宣する。敵の武装はこちらと同

様、いずれも旋回カノン砲一門ずつらしい。小型艇の標準的な武装である。どうやら、火力の優位を生かして近接した砲撃戦を行いたいらしい。となれば、防勢に立つこちらの取るべき戦術は、敵の意図の阻止しかない。

「一番、約五百！ 交戦開始！」

わたしは充分にリードを取ると、目標の上方に狙いを定め引き金を引いた。発条仕掛けの撃鉄が雷管キャップを叩き、生じた火が薬筒内部の発射薬に至る。一瞬だが、発動機の騒音すら圧倒する轟音を残し、砲弾が砲口から飛び出した。照準器の視野が、衝撃で激しくぶれる。ぱっと広がった火薬の臭いが、流れ込む空気にあつというまに散らされる。発射の反作用で、ゴンドラ全体が揺れる。

煙の尾を引きながら、砲弾が一番艇の左方を飛び去ってゆく。外れだ。

九型旋回砲の有効射程は四百。五百というのは最大射程内だが、まず撃っても当たらない距離である。あくまで近接されなかったための威嚇射撃に近い。

しかし、外れ弾はいくつかの貴重な情報をもたらしてくれる。こちらが推定した目標の速度と進路に関するデータのずれ具合。目標近辺の風の流れ。それら新たな変数を考慮し、狙いを修正して再び撃つ。この繰り返し、空対空射撃の基本である。

わたしは照準器から眼を離さずに、一番艇の動きを見守りつづけた。サンヌが装弾作業を行う音が、発動機の騒音に混じってわずかに聞こえる。砲身を冷ますために濡れタオルを被せる。薬室を開き、内部を確認してから新たな弾薬筒を込める。薬室を閉じ、雷管キャップを被せ、撃鉄を起こし、濡れタオルを取り去る。見えていなくても、生じる音だけで、わたしはサンヌの動きを逐一追うことが出来た。

予測していたのとはほぼ同じタイミングで、わたしの左肩がぽんと叩かれる。訓練と寸分違わぬ時間で、サンヌは装弾をやり終えていた。

射距離はまだ四百を切ってはいない。わたしは狙いを先程よりも右に修正し、二弾目を放った。今度は、やや上方へ外れる。

敵も撃ち返し始めた。一番艇のゴンドラに閃光が走る。進路は変えていない。あくまで正面から撃ち合うつもりらしい。

「至近弾、右下方！」

ティリングの叫び。

「少尉、回避運動準備！ 発砲後！」

わたしは叫び返した。どうやら、敵の砲手の腕は結構高いらしい。向こうのカノンの性能は、こちらと同等かやや下というところであるにもかかわらず、初弾をかなり正確に撃ってきたのだ。油断して進路を一定に保っているのは、一発食らうおそれが強い。敵の照準を甘くするために、こちらの進路や速度、高度を小刻みに変えてやる必要がある。だがそれは、わたしがもう一発放ってからだ。敵も装填には一定の時間が掛かるから、そのあいだは命中弾を食らうおそれはない。

サンヌの手が左肩を叩く。わたしは慎重に狙い、引き金を引いた。砲弾は、なんと一番艇の気囊の真下、ゴンドラの直上を通過した。：対人射撃に例えて言えば、敵兵の股の間を銃弾が通過したようなものだ。いずれにせよ、外れである。

「くそっ」

おもわず悪態が漏れる。

先程発した命令通りに、ティリングが発動機を動かし、『紫の虎』が進路を変えた。もちろんこれで敵の砲弾が当たる確率は減少するが、こちらの射撃も不正確となる。わたしはいったん照準器から眼を離し、肉眼で状況を確認した。

敵の二番艇も、発砲を開始していた。射距離はすでに四百を切っている。一番艇との相対距離は二百五十程度。外れ弾が薄い灰色の尾を引きながら、わが艇の後方を飛び去る。

「少尉、距離を保って！」

わたしはそう命じた。回避運動を続けつつ、適宜発砲するという

消極的戦法を取らざるを得ない。不用意に踏み込めば、火力に勝る敵に圧倒されるおそれが大だ。

わたしはよく狙って三回撃ったが、射弾はいずれもが外れた。その間空賊側は二艇合わせて十発以上を放ったが、これもことごとく外れた。こちらが回避運動を継続している以上、彼我ともに射弾はそうそう当たるものではない。

「『レンゼルブ夫人』は？」

「五時、高！ 一千！」

テイリングが、すかさず答える。とりあえず、敵の射程外へと逃れたようだ。

「二番、進路変更！」

サンヌが叫んだ。

二番艇が、大きく進路を変えていた。発砲も止め、高度を稼ぎに掛かっている。

その先には、よたよたと逃げてゆく『レンゼルブ夫人』の姿があった。

どうやら、敵は逃げ回るわが艇を屠ることをいったん諦めたらしい。一番艇がこちらを抑えているあいだに、二番艇に鈍重な『レンゼルブ夫人』を攻撃させる肚だろう。

「少尉！ 二番艇を追って！」

わたしはすかさず命じた。発動機の向きが変わり、『紫の虎』はぐるりと旋回した。

「一番、旋回中！」

サンヌが報告する。

わたしは双眼鏡を取り、二番艇を暫時観察した。旋回砲は、すでに『レンゼルブ夫人』の方へと向けられている。こちらを無視し、あくまで『レンゼルブ夫人』を仕留めにかかる態勢である。わが艇との距離は三百五十というところか。

「一番詳細！」

わたしは双眼鏡を手放すと、そう叫びながら旋回砲へと取り付い

た。照準器の視野の中に、素早く一番艇を捉える。

「一番七時、水平！ 進路十二時！ 同速！ 約三百！」

サンヌの声を聞きながら、わたしは一番艇に狙いをつけた。すでに旋回を終えた一番艇は、こちらの追尾に掛かっていた。旋回砲がきらめきを発し、一瞬だが黒い影が照準器の視野を過ぎる。

「至近弾、左下方！」

ティリングの叫び。

いまや『紫の虎』は敵弾に対し脆弱な状況にあった。二番艇を阻止するために進路一定、出力全開のために速度も一定。一番艇に対する角度も浅く、敵砲手はリードを大きく取る必要がない。

しかしその条件は敵も同様である。いや、むしろこちらの方がやや有利と言える。敵一番艇の発射した砲弾は逃げる『紫の虎』を追う形になるのに対し、こちらが放った砲弾は近付いてくる一番艇と相対する形になるからだ。同距離で発射したとしても、その飛翔時間はこちらの方が短くて済むし、命中した際の運動エネルギーもこちらの方が大きい。

わたしは慎重に狙いを定めて……撃った。
外れ。

「二番、発砲！ ……僚艇至近！」

サンヌの声。

「こちらも至近弾！ 上方！」

ティリングの声。

わたしは芽生え始めた焦りをむりやり押さえつけた。『レンゼルブ夫人』はいまや射撃訓練用の吹流しとたいして変わらない状況にあると思われた。ぐんぐんと距離を詰めてゆく二番艇を一刻も早く阻止してやらねば、早晚命中弾を喰らうことだろう。そして我々が『レンゼルブ夫人』を救うためには、なんとしても追いつく。一番艇に砲弾を命中させ、その機動力を封じなければならぬ。引き金を引く。

砲弾は、気囊の左方を通過した。

サンヌが無言のまま、てきぱきと装弾作業を行ってくれる。わたしは息を大きく吸い込んだ。火薬の匂いと、熱せられた金属の不快感が、鼻腔を這い登ってくる。

「至近弾！ 左方水平！」

いつもよりトーンの高いティリングの声。よほど近かったのだろう。

サンヌの手が左肩を叩く。わたしは気合を入れなおして、照準器を覗き込んだ。

……おや。

わたしは瞬きを繰り返した。視野の中に、黒い小さな影がある。だが、瞬きしても影は消えなかった。

「サンヌ、一番の後方をチェック！」

狙いを定めながら、わたしはそう命じた。

「船影一！ 七時、水平！ 一番の後方！ 一千！ 三番と呼称します！」

ややあって、サンヌが報告する。

「よろしい！」

それを承認しながら、わたしは内心で首を傾げた。三番の正体は何だ？ 空賊の増援か？ それとも……ひょっとして、味方だろうか？

「信じられないけど、敵じゃないみたいだね！」

双眼鏡を覗き続けているのだろう、サンヌが言う。

わたしの照準器の視野にも変化が生じていた。空賊艇の発砲が止まったうえに、なにやらゴンドラ内の動きが慌しい。

「三番発砲！」

サンヌが叫ぶ。

わたしは緊張して、サンヌの次の言葉を待ち受けた。三番が狙ったのは、わが艇か、それとも空賊艇か。

「大尉、三番を味方と認む！ 一番を射撃した！」

サンヌの弾む声が聞こえる。

「テイリング、急減速！ 高度維持！」

「了解！」

わたしは賭けに出た。一番艇は、こちらの味方出現を知って慌てている。こちらが減速し、それによって急速に相対距離が縮まれば、絶好の射撃のチャンスが生まれるかも知れない。

発動機の唸りが変化する。テイリングが、強引に角度を変えたのだ。照準器の視野の中で、一番艇の見かけの大きさが徐々に膨れてゆく。

空賊が、こちらの減速に気付いた。わたしは引き金を引いた。その頃にはもう、射距離は二百を大きく下回り、百七十程度にまで接近していた。

「気囊命中！」

サンヌが高らかに叫ぶ。わたしも照準器の中で命中を確認した。

煙の尾は、さながら灰色の長大な槍のごとく、確実に一番艇の気囊を貫いていた。

「回避開始！」

わたしが命ずる前に、テイリングは明らかに回避行動を開始していた。ゴンドラが揺れ、『紫の虎』はでたらめな動きを始めた。わたしは顔をあげ、肉眼で一番艇を確認した。高度を落しながら、空賊艇は逃走態勢に入っていた。旋回砲がこちらを撃つが、射弾は外れた。接近する三番艇も発砲する。こちらは五百はあろうかと思える距離だったにもかかわらず、至近弾となった。

サンヌの手が肩を叩く。わたしは照準器を覗き込み、一番艇を捉えた。

「回避中止！」

テイリングが、すかさずゴンドラを安定させる。

わたしはゆっくりと狙って引き金を引いた。

砲弾は至近弾となった。一番艇は、高度を急速に下げることにより速度を上げて……位置エネルギーの運動エネルギーへの変換である……遠ざかってゆく。もう脅威ではあるまい。

「テイリング、『レンゼルブ夫人』へ向けて！」

「了解！」

わたしは双眼鏡をつかむと、前方の空を走査した。

『レンゼルブ夫人』を追尾していた敵二番艇は、すでに空域離脱に掛かっていた。増援の出現と、僚艇の脱落を見て取ったのだ。高度を上げつつ、北方へと向かっている。

「喰らってるね！ 一発だけ！」

『レンゼルブ夫人』を双眼鏡で眺めながら、サンヌが言う。わたしもレンズを『レンゼルブ夫人』に向けた。気囊の右舷側、栗鼠の尻尾のあたりに破口が見える。

「よかった。あの程度で済んで」

わたしは安堵の息をついた。三番艇が出現しなかったら、『レンゼルブ夫人』は何発もの命中弾を喰らい、まず確実に撃墜されていたことだろう。

軍用飛行船ほど細かくはないが、民間籍飛行船も中型以上の艇は事故防止のために気囊に細胞構造を採用している。すでにかなりの量の燃料を自己消費したうえに『紫の虎』に移し変えたから、『レンゼルブ夫人』の総重量は出発時に比べ五分の一程度軽くなっているはずだ。したがって、あの程度の損傷ならばレスペラまでの飛行に大きな問題は生じないだろう。

わたしは救い主となってくれた三番艇に双眼鏡を向けた。……レスペラの艇だ。ゴンドラに、レスペラ藩王国を示す多色の徽章が取り付けてある。

「なんとも芝居がかったタイミングで現われたものですね！」

テイリングが、皮肉めかして言う。

「サンヌ、信号旗！ 『謝意』と『救援』！」

「了解、大尉！」

サンヌが、手早く二旗を掲げる。

ほどなく、レスペラ艇が信号旗を掲げた。『われに続け』だ。

「道案内はあちらに任せましょう！ サンヌ！ 『了解』を！ テ

イリング、レスペラ艇の左後方につけて！」

5 戦闘（後書き）

用語解説 リード／見越し角 目標の未来予想位置に射弾などを送り込むために取られる照準の角度やずれなどのこと。

6 盆地

子供のころ、二百年ほど前に活躍した山岳探検家：：もちろん飛行船発明以前の徒歩探検である：：の回想録を読んだ覚えがある。

全編を通じ、子供心をくすぐる波乱万丈の冒険譚だったが、なかでも圧巻だったのは大失敗に終わった三回目：：だったか四回目だったか、そのあたりはすでに記憶が定かではないが：：の探検であった。予想だになかった大山脈に行く手を阻まれ、引き返す途中でこれまた想定外の豪雨のために装備の大半と仲間の一人を失い、コンパスひとつを頼りに険しい山々をさまよう羽目に陥る。やがて保存食糧も尽き、時折遭遇する野生動物と見慣れぬ植物を糧に、来る日も来る日も出口の見えない迷路のような人跡未踏の山中を踏破する苦行。

その労苦もやがて報われる時が来る。とある尾根を越えたとなん、その麓から平野部が広がっているのを、彼は眼にするのだ。緑や黄色の絵の具で丁寧塗り分けられたかのような耕作地。点在する慎ましい家々。人工的な、一直線に並んで伸びている木々。立ち昇る淡い灰青色の煙。そう、ついに彼らは中央山岳地帯を脱出したのである。人類を寄せ付けぬ荒々しい神の領域から、人間の住む世界へと、生還したのだ。

まあ：：どう考えても彼ほどの感激は味わっていないだろうが、レスペラ藩王国の領域たる細長い盆地が見え出すと、わたしはそれなりに感慨深いものを感じていた。一応は『生還』なのだ。あのレスペラ艇が飛来しなければ、どうなっていたことか。運が悪ければ高度一千から墜落し、この身は岩山の中腹を彩る赤茶色の不定形な染みになっていたかも知れぬし、あるいはあの冒険家同様、人跡未踏の地にわずかな装備だけで放り出されていたかも知れない。そして当然、わたしがそこで生き延びる能力は、ベテラン冒険家の彼よりは数段下であろう。

わたしは地図を取り出すと、眼前の地形と照合を始めた。戦闘空域になる可能性が高い以上、地形は把握しておくべきである。

単に『レスペラ』とだけ呼ばれている……レスペラ盆地でも、レスペラ高原でもない……この平地は、ほぼ東西方向に伸びる小山脈に挟まれた、細長い甘藷を思わせる形状の盆地である。土地には緩やかに傾斜がついており、北東方向が一番高く、南西方向が低い。したがって、周囲の小山脈から流れ出す水で形作られたいくつかの小河川は、みな一様に南西方向に向けて流れており、ほぼ盆地の南西隅でひとつの流れにまとまり、山間を縫うようにしてさらに西へと流れ下っている。レスペラ川と呼ばれるその流れは、つまるところタガレー共和国を流れる大河エジエントの一支流であり、最終的にはヴィーカル連合王国を通じてサンダスン海に流れ込む。ここはすでにリンカンダム王国側から見た大陸分水嶺を越えた土地なのである。地理的に言っても、ほぼ大陸の中央と言って差し支えない。わたしの生まれ故郷は、大陸東部にあるリンカンダム王国の、さらに東方にあるエドレン半島東端にある飛び地の港町である。今わたしは、実に生地から大陸半分の距離を隔てた土地に降り立とうとしているのだ。

レスペラは、上空から見る限り豊かな土地のようであった。まあ、当然だろう。よほど旨味がない限り、こんな隔絶したところに入植地などではしない。平地の樹林に覆われていない部分は、その半分近くが畑地や果樹園と化しており、残りもおそらくは放牧地などに利用されているのであろう、そこかしこに大小様々な家畜の姿が見受けられた。薄茶色のほっそりとした馬、それよりもずんぐりとした肉牛、白地に黒ぶちの乳牛、白っぽい毛玉にしか見えない羊たち。もっと小さな白い群れは、山羊だろうか。

それら緑豊かな平地に引かれた茶色い線としか見えない道は、いずれも定規を用いたかのようにまっすぐで、ぽつりぽつりと現われる小集落のあいだを繋いでいる。東の方、わずかに土地が盛り上がったところには、城のような建造物が見えた。わたしは地図を確か

めた。今は廃城となっているらしく、バツ印が描き添えてある。

先導するレスペラ艇に従い、『紫の虎』も高度を下げつつ盆地上空を西進していった。やがて、われわれの眼下に小規模な街が現れた。リンカンダムの地方都市よりは小さいが、村と呼ぶにはいささか気の毒なくらいの大きさだ。その向こう、小さな丘の上には、よく目立つ高い尖塔を伴う城砦があった。あれが、現レスペラ藩王国藩王、フザロックの居城だろう。

さらに西には、何本もの煙突を連ねた一群の建物があった。地図によれば、原油の精製施設となっている。わたしは心中でその施設にキスを送った。あれがあったからこそ、今回の派遣任務における兵站の問題は実に簡略なものになったのだ。言うまでもなく、軍用飛行船……民間飛行船でも同じことだが……が一番大量に必要とする消費物資は、発動機用ガソリンと熱源用灯油である。この二者の消費量に比べれば、飛行船部隊が日々必要とする食糧や弾薬、補修用品の類の物資などわずかなものだ。もしレスペラが石油製品の自給が不可能な土地であったとしたら、レスペラ派遣群はわずか一個小隊の飛行船部隊を維持するために、連日補給用大型貨物船を飛ばす必要があるだろう。……派遣費用は二倍ないし三倍に膨れ上がったに違いない。

街の外れ、牧草地らしい低い柵に囲まれた一角には、国際標識であるオレンジ色の布で着陸位置を示す三角形が描かれていた。使われている木材の明るい色合いから、ひと目で新築とわかる数件の小屋が周囲に散らばっている。係留塔が三つあり、そのひとつには小型の飛行船が収まっていた。レスペラ警察軍航空部隊の出撃基地、といったところなのだろう。

わたしは着陸準備を下命すると、自ら旋回砲に砲口キャップを被せた。

故障ないし破損した艇に着陸の優先権がある。これが、基本的な空のルールのひとつである。また、護衛を主とする軍事任務の場合、

護衛の艇が最後に着陸するのが常識というものだ。

そういうわけで、三艇のうち最初に着陸したのは『レンゼルブ夫人』となった。それを見届けてから、下からの手旗信号の指示に従って、わが『紫の虎』は高度を下げていった。すでにボイラーは消火され、冷えてきた気嚢は浮力を減じ、地面が急速に近づいてくる。見張り員であるサンヌがゴンドラから身を乗り出し、対地高度を目視で計測し、告げる。テイリング少尉が出力を落とした発動機を小刻みに動かし、地上要員が待ち受ける位置へ正確に艇体を導く。わたしは小さなバラスト……砂を詰めた目の細かい麻袋……をつけた係留索の一本を手に待機していた。サンヌの二十のコールで、それをゴンドラの外に投げ出す。地上要員が係留索を繋ぎ留めたのを確認し、テイリングが発動機を停止した。

地面が近づく。わたしは重いバラストを手にした。もしも降下速度が速すぎた場合には、それをゴンドラ外に投げ捨てることにより全体重量を減少させ、気嚢に残っている浮力を利用して減速するのだ。まあ、そんな事態に陥ることはめったにないが。

今回も、緊急用バラストの出番はなかった。『紫の虎』は一本だけの係留索をたるませながら、しずしずと狙ったとおりの場所に降りてゆく。サンヌが、一本ずつ係留索を投げ始めた。地上要員が受け取り、固縛してゆく。

どしんとゴンドラに衝撃が走る。

「高度ゼロ。着陸しました」

サンヌが告げる。もう発動機が止まっているから、怒鳴る必要はない。

われわれは着陸後点検に入った。ボイラーの消火を確かめ、燃料系統に漏れその他がないかチェックする。続いて発動機の点検。旋回砲の点検……発砲したから念入りに。各種消耗品のチェック。

「ゴンドラ内、異常なし」

そう宣言したわたしは、そこでやっと周囲に眼を向けた。地上要員の一人を呼び、係留索の固縛を再確認させてから、ゴンドラの外

に出る。着陸したからといって、安易に降りてはいけない。飛行船から乗員がいなくなるということは、体重分のバラストを艇外投棄したと同じ効果をもたらすのだ。したがって、まだ気囊内部が熱く、充分に浮力が残っている場合、飛行船は急上昇してしまう。係留作業中ならば、それによって死傷者が出るおそれすらあるのだ。

わたしはテイリング少尉とサンヌに気囊の点検を命じると、あたりを見渡した。

いた。

お目当ての人物は、なぜか犬を足元にはべらせて立っていた。わたしは手袋を取りながら歩み寄った。

「リンカンドム王国航空軍団第二連隊、レスペラ派遣群司令、フォリーオ大尉です」

しごく生真面目な表情で、敬礼してやる。

「ようこそレスペラ藩王国へ。連絡将校に任じられたクロイ少佐です」

おなじく真面目な表情で、フィーニアが答礼する。

実に七年ぶりの再会であった。言うまでもなくレスペラは辺境の地であり、よほどの理由がない限りその市民が域外を訪問することなどない。同様の理由で、普通の市民が観光地でもないレスペラを訪れることなどありえない。そういうわけで、士官学校の寮で一年にわたり同じ部屋で暮らし、親友だったはずのわたしとフィーニアのつながりは、数ヶ月おきに交わされる書簡だけの仲となっていた。

わたしたちは、しばし無言のまま見詰め合っていた。

七年前に比べ、フィーニアの外見はかなり変化していた。比較的長かったきれいな黒髪……飛行訓練の前にはいつも結い上げるのを手伝わされたものだった……は、短い機能的な髪型に変化を遂げていた。いつも笑みを絶やさなかった丸顔も引き締まり、やや物憂げな雰囲気を漂わせている。身長もやや縮んだように思えるのは、気のせいだろうか。あるいは、少し猫背になったのかも知れない。

女という人種は、男ほど動物的ではない。長年音信不通だった幼馴染みと、握手ひとつで友情を復活させるというような芸当はできない。女が友情を維持するには、相手が同性であれ異性であれ、継続した物理的接触が不可欠なのだ。わたしもずっと以前から気付いてはいたが、数ヶ月ごとの短い手紙というのは、どうやら友情を維持するには不足していたようだ。

「とにかく、先に仕事を片付けちゃいましょう」

猫がよくやるように、ふっと視線を逸らしたフィーニアが言い、小脇に挟んだ書類を取り出した。右腕で書類を支えながら、左手でペンを握る。

「それがいいわね」

わたしたちは書類を参照しながら、細目に関し事務的な打ち合わせを行った。『レンゼルブ夫人』で運んだ装備の収納と管理、レスペラで自給できる消耗品の手当てについて、係留中の警備、宿舎の手配などなど。

「じゃあ、問題なしね」

フィーニアが、書類の隅にサインを入れた。

「たぶん、王城に来てもらうことになると思うわ。そのときは、迎えを寄越すから。じゃあ、わたしは仕事が残ってるから、これで。」

今夜、宿舎の方に顔を出すから。積もる話は、そのときにね」

早口で一方的にしゃべる彼女を、わたしは遮った。

「その前に。この犬、何なの？」

「この仔？ 預かりものよ」

フィーニアが言いつつ、左手で犬の頭を撫でた。おとなしい犬だった。オレンジに近いような薄茶色の毛並みで、腹の方だけが白い。ふさふさとした太い尻尾とあいまって、なんだか狐みたいに見える。わたしはしゃがみこむと、犬の顎の裏を撫でてやった。

「じゃあ、また今夜」

書類を小脇に挟んだフィーニアが、首輪をそっとつかむ。犬は逆らわずに立ち上がり、フィーニアにとこと付いていった。

わたしは無言のままそれを見送った。

立ち上がったわたしは自分の右掌を見下ろした。犬の毛が、数本張り付いている。犬には触った。だが、フィーニアとの肉体的接触が皆無だったことに、わたしはふと気付いた。

6 盆地（後書き）

第六話をお届けします。ようやく手紙の差出人、フィーニア登場です。本作は推理ものではありませんが、語り手エルダ・フォリーオが空賊の真の目的や内通者が誰であるかを探り出す経緯が、空賊との戦い以上にメインのストーリーでありますので、推理小説と同様なキャラが出揃うまで時間が掛かっております。事態が本格的に動き出すまでもうしばらくご辛抱下さい。

7 王女

フィーニアが去ると、わたしは拳銃の収まった装備ベルトだけ身につけ、一足先に着陸した『レンゼルフ夫人』を目指した。

『レンゼルフ夫人』の着陸後点検はすでに終わっており、船長の姿もなかった。わたしは委託した装備を脇の小屋に収納している乗員を呼び止めて、船長の所在を尋ねた。

「小屋の裏だよ、大尉さん」

礼を言い裏手に回ると、船長の姿はすぐに見つかった。くせのある茶色い髪、なかなか知的な好ましい風貌の小柄な青年と、なにやら声高に話し合っている。

「だから、今回は軍に借り上げられただけなんだよ、あんた」

船長が、やや苛立ちの混じった声で言う。

「しかし、たった一冊の本ですよ？ 二ヶ月も前に注文したのに」
青年が食い下がる。

「無理だ無理だ。ガソリンと頼まれた貨物でめいっぱいだったんだ。明日も、今度は軍人さんを運んでやらにゃならん。悪いが、しばらくのあいだ諦めるんだな……おっと、借主のご登場だ。文句があるんなら、あの別嬪さんに言うんだな」

わたしが近付くのに気付いた船長が、逃げの一手を打つ。青年が、母親に叱られた少年のようななんとも情けない表情でわたしを見やっていた。わたしは挨拶代わりに軽い微笑を浮かべてから、そっと二人のあいだに割って入り、船長と明日以降の打ち合わせを開始した。

飛行船に損傷があったにもかかわらず、船長はかなりご機嫌だった。おそらく、初めて戦闘行動に『参加』した興奮が、多幸状態を生み出していたのだろう。新兵がよくかかる症状である。わたしは満足して打ち合わせを終えた。

「では、あなたが派遣軍の責任者なんですか？」

船長との話が終わるのを待っていたかのように、青年が話し掛け

てくる。

わたしは苦笑した。『派遣軍』とは、なんとも大げさな呼び名である。

「そうです」

わたしは次なる目的地、レスペラ艇の着陸地点へと歩み出しながら短く答えた。乗員に、助けてもらった礼を申し述べなくてはならない。

「申し遅れました。わたくし、レスペラ藩王国文化事業部嘱託の翻訳官で、フレンス・オウラと申します」

肩を並べて歩き出しながら、青年……オウラが自己紹介する。

嘱託とはいえ、藩王国政府関係者ならば邪険に扱うわけにもいくまい。

「王国軍航空軍団大尉、エルダ・フォリーオです」

「こんな山奥で翻訳屋が何をしているんだろうとお思いでしょうが……」

訊かれもしないのに、オウラがぺらぺらとしゃべり出す。わたしは見た目で彼に好意を抱いた事を後悔した。

「レスペラは文化振興にも熱心なのですよ。セレスタ王女殿下が北方語にも堪能なのはご存知ですか？」

「いいえ」

黙っているのも大人気ないので、わたしは歩みながら短く答えた。セレスタというのは、フザロック藩王の妹である。病弱な人物で、王位継承権上位であるにもかかわらず、公務にはついていないと聞く。

「そうですか。あまり知られていないかもしれませんが、王女殿下は北方語書籍の翻訳も手がけられているのですよ。そんなわけで、わたしのような者が外部より招かれて、正式に国家事業の一環として翻訳業務などを行っているのです。むろん、外交文書の翻訳や外国からのお客様の通訳なども勤めますがね」

やや自慢げな口調で、オウラ。

「それで：：どちらへ向かわれるんですか？」

「レスペラの飛行船のところですよ。助けていただいたので」

わたしは、眼前に見えている飛行船を指差した。レスペラ艇は、すでに係留塔の前に移動させられ、地上要員の手によってしばみ始めた気囊が突き出した梁の中に押し込められているところだった。この光景を見ると、わたしはいつも公立学生だった頃の蛙の解剖実験を思い出してしまう。

その飛行船の前には、乗員と思しき二人の小柄な人物の姿があった。いずれも若い女性だ。黒くまっすぐな髪をちよつと長めに伸ばしている、塵除け眼鏡を掛けたままの細身の人物と、くせのある赤毛を少年のように短く刈っている、細い眼の少女。二人のすぐそばには、警察軍とはまた違ったデザインの、だが公安関係者か軍人とは見えない制服を身に付けた大男が突っ立っている。

「では、システィハルナ王女殿下に会いに行かれるのですな？」

オウラが訊く。わたしは足を止めると、怪訝な表情で彼を見やうた。

「王女殿下？　いいえ、飛行船の乗員に会うだけです」

わたしの返答に、オウラがくすりと笑う。嫌味のない笑い方だったが、わたしは妙に不快に感じた。

「では、ご存知ないのですね」

オウラが、すたすたと三人の方へと歩み寄った。塵除け眼鏡の女性の前に立つと、芝居がかった仕草で深々と一礼する。

「王女殿下。王国航空軍団大尉、エルダ・フォリーオ殿をご紹介申し上げます」

あっけにと取られているわたしを尻目に、オウラが続ける。

「フォリーオ殿。こちらにいらっしゃるお方が、わがレスペラ藩王国藩王ご息女、王位継承権第一位、システィハルナ王女殿下にあらせられます」

少女が、慣れた手付きで塵除け眼鏡を取った。びっくりするくらい大きな灰色の瞳が、わたしを見つめていた。

わがリンカンドムは王国を名乗ってはいるが、国王は形式上の国家元首に過ぎず、その政治上の実権はゼロに等しい。最大の国家権力を有するのは国民議会の多数党であり、その指名を受けた首相もあくまで行政の長としての権限しかもたない。国家の政治的安定を得る為に、権力の分散が徹底しているのである。

その国民議会で、貴族制の廃止法案が可決されたのは二百年も前のことである。だが、その法案には例外規定も存在した。辺境域に限り、貴族領の存在と存続とを認めたのである。当時小規模な常備軍しか持たなかったリンカンドムは、周辺諸国との国境紛争に悩まされており、その対策として辺境貴族に大幅な自治権を認める代わりに自警的兵力を育成させて、国境警備に当たらせようとしたのであった。

その後、常備兵力が充実するに従い、これら辺境貴族領の存在意義は低下し、廃止される傾向が続いたが、島嶼部や中央山岳付近などの人口希薄な地帯では、いわば代官的存在としての貴族領が存続した。直接統治よりも、中央政府の経済的負担が少なかったからだ。さらに飛行船の発達で中央山岳地帯にいくつかの入植地が建設されるようになる、そのほとんどが隔絶性ゆえに自治権を希求し、自治村落ないし貴族領としての道を選択することになった。なかでも、もともと辺境貴族だった一族がその私財を投入して建設された入植地は、その功績ゆえに特別に藩王を名乗ることを許された。レスペラも、そんな藩王国のひとつなのである。

藩王国はリンカンドム王国内の特別自治領の中でも、もっとも獨立性の高い自治体といえる。持つことを許されていないのは外交権だけであり、リンカンドム国内法に抵触しない範囲内での地域法の制定や徴税権はもちろん、治安維持および国境警備目的の自衛戦力である警察軍の保有さえ認められている……。

「堅苦しい挨拶は抜きにしましょう。ようこそレスペラへ。フオリ

「オ大尉」

少女：：システイハルナが革の手袋を取り、右手を差し出す。わたしはちよつとためらってから、その手をそつと握り返した。

システイハルナ王女は美人であった。色気のない飛行帽からはみ出した漆黒の髪はやや長めで、癖はまったくくない。いわゆるオークル系の色白で、丸顔の中で大きな灰色の眼が輝いている。その眼のせいなのか、あるいは不釣り合いな飛行服のせいなのか、わたしは派遣前のブリーフィングで渡された資料で知った十六歳という年齢よりも多少幼いという印象をもった。

しかし、その資料のどこにも王女が飛行船に乗るなどということ記載されていなかった。ましてや、空賊と渡り合って撃退してしまふなどとは。

わたしは当り障りのない、だが丁寧な挨拶を述べてから、本題に入った。

「その：：助けていただいて、どうもありがとうございました」

「実に見事なタイミングで駆けつけられたわね。まあ、あなた方を迎えついでに哨戒していたら、たまたま出くわしたただけなのだけれど」

システイハルナが微笑む。：：ちよつと嫉妬の念さえ覚えるほどの、可愛らしい笑みである。こんな笑顔を見せられたら、たいいていの男はころりと参ってしまふだろう。

「では、殿下がこの艇を？」

「ええ。操舵手をね。けっこう上手に操りますのよ。ところで、あなたの艇の砲手はどなた？」

「わたしが、艇長兼砲手を勤めております」
「やっぱり」

システイハルナが、傍らの赤毛の少女と顔を見合わせた。

「紹介しましょう。わたくしの艇の砲手、リュレアです。今は、警察軍の義勇兵扱いね」

赤毛の少女が、ぺこりと頭を下げた。わたしも礼を返した。

「見事な射撃だったと、彼女が驚嘆していました」

「運が良かっただけです」

実際、空中での射撃を成功させるには運も必要である。完璧な射撃をしたからといって、命中するとは限らないのだ。数多くの、見通せない変数：：局所的な横風、空気の密度、気温による屈折：：などが、わずかに弾道を狂わせてしまう。

「運だけで、あれほど正確な射撃はできないでしょう」

そう言ったシステイハルナの肘を、リュレアがそっとつついた。横を向いた王女に向かい、赤毛の少女が複雑な手振りをする。しばらくその様子をぼんやりと眺めていたわたしは、リュレアが言葉をしゃべれないことによりやく気付いた。

「リュレアはこう訊いています。あなたの仲間：：つまりは、航空軍団という意味でしょうけど：：のなかで、大尉ほどの腕前の砲手が多いのか、と」

システイハルナが通訳する。

「正直、多くはありません。わたしの上官の中には、もっと正確な射撃を行える者はおりますが」

わたしの答えを聞いて、リュレアが嬉しそうにうなづく。：：：少なくとも、耳は正常らしいし、東部標準語を解さないわけでもないらしい。

「では、とりあえず王城に参りましょうか。今日はもう、空賊の襲撃もないでしょうし。ハヴィラン、皆さんの受け入れ準備は整ったのね？」

システイハルナが、控えていた大男に訊く。

「クロイ少佐が万事手筈を整えたはずです、殿下。警備に関してはわたし自らが手配し、万全を期しております」

ハヴィランと呼ばれた大男が、軍人らしい口調できばきと答える。

「では、参りましょう。お父様にも会っていただく必要があるし。フォリーオ殿、よろしいですね？」

艇の方はサンヌに任せておいて問題はあまるまい。どうせ明日整備班が来るまでは待機するしかないのだ。しかし、システイハルナのお父様……現藩王フザロックに引き合わされるのなら、服装は改めねばなるまい。『レンゼルブ夫人』に委託した貨物の中には、わたしの第一種礼装を含む衣類が詰まったトランクがある。急げば化粧直しも含めて半時間で済むとは思うが、いくらなんでもシステイハルナ王女を待たせるわけにはいかない。

「フザロック陛下には、今夜にでも改めてご挨拶に伺いたいと思いますが……」

わたしの返事を聞き、システイハルナがくすりと笑う。

「ご心配なさらずに。お父様も堅苦しいことは苦手なお人ですから。それに、今現在レスペラは事実上の戦時下にあります。飛行服でも問題ありませんわ」

「殿下がそうおっしゃるのでしたら……お供します」

石畳の道を、てくてくと歩く。

王城までの移動手段はなんと徒歩であった。藩王の娘とはいえ王女なのだから、馬車か車両が使われて当然と考えていたわたしはそうとうに面食らった。車両はともかく、上空から見た限りでは馬が不足しているようには見えなかった。おそらく、歩むのはシステイハルナの趣味か習慣なのだろう。実際、彼女の歩みは速くはなかったが一定のペースを保った着実なもので、歩き慣れていることがうかがわれた。

ある意味では、妙な一行であった。赤毛の砲手少女……リュレアが弾むような足取りで先頭を歩き、すぐあとにシステイハルナとわたしが続く。その後ろ、わずかにあいだを置いて、システイハルナが王室警護隊隊長だと紹介してくれた金髪の大男、ハヴィラン・エクスとその部下二名が歩む。翻訳官フレンス・オウラは、いつの間にかいなくなっていた。

わたしは少しでもシステイハルナに敬意を示そうと、彼女の半歩

くらいあとを歩もうと勤めたが、彼女はどうかやらわたしと肩を並べて歩きたいらしく、すぐに歩みを合わせてきてしまう。ついにはわたしも諦めて、システィハルナの歩調に足を合わせた。

レスペラの街の中心部は、上空から見た印象とさほど変らなかった。立ち並ぶ家々は比較的小ぶりだったが、いずれもが丁寧な造りで、明るいグレイの切石を積み上げた土台に、太めの角材と鎧張りにした羽目板で形作られていた。屋根はいずれもかなり傾斜のきつい切妻屋根で、冬季にはかなりの積雪があることをうかがわせた。

どうやら、システィハルナは自らレスペラの案内役を買って出たようだった。わたしと肩を並べて歩きながら方々を指差し、市街の主要な建築物や公官庁の位置を教えてくれる。わたしはいささか恐縮しながらいちいちそれに応えた。まあ、レスペラの職業訓練校や共同屠畜場の場所など覚えても役に立つとは思えないが。

わたしたち一行が市街を抜けるあいだに出会ったレスペラ市民の数は、せいぜい五十人というところであり、その全員がシスティハルナに対し挨拶を行ったが、そのやり方は実にバラエティに富んでいた。深々と頭を下げた老婆。担いでいた農具を立て銃のように体側に付けて、直立不動の姿勢で見送った農夫。こちらが啞然とするほど気さくに、片手をひよいと挙げて挨拶した中年男。人気のある役者に街中で出会ったときのように、王女の名を連呼しながら激しく手を振った青年二人。五人連れの若い少女たちは、夢中になっていた遊戯を中断し、システィハルナにひとしきり群がった。まるで、彼女が久しぶりに帰郷した歳の離れた姉であるかのように。

「何か言いたいことがあるようね？」

市街を抜けたところで、システィハルナがそう訊いてきた。

「失礼な言い方かも知れませんが、市民にだいぶ愛されておいでのようですね、殿下」

「否定はできないわね」

くすりと微笑んだシスティハルナだったが、急に真顔になると、わたしの腕をそっと取った。

「でも、その殿下という呼び方はやめていただけない？ 堅苦しすぎていけませんわ。まあ、公的な場所では仕方ないけど」

「……もちろん構いませんが……では、どのようにお呼びすれば？」

「親しい者には『姫様』と呼んでもらっているのです、できればあなたにもそう呼んでほしいものだわ」

「承知いたしました、姫様」

『姫様』とは、また古めかしい呼び方である。王族の若い女性に対する尊称ではあるが、いまだき時代小説の中でしかお目にかかるまい。

やがて、道は緩やかな登り勾配となった。眼前には、低くなだらかな丘の上に建つ城砦が立ちはだかっている。

「あそこに見えてきたのが王城。一応、レスペラ藩王国政府の所在地ね。まあ、戦争の遺物でもあるけど」

「戦争……二十二年前の、内戦のことですね」

「まあ、きちんと勉強していらしたのね」

システィハルナが、微笑む。……出来のいい生徒を誉める新米女教師の笑みと言ったら、誇張しすぎだろうか。

「勉強だなんて、そんな。概要を読んだだけです」

わたしは正直にそう答えた。実際、レスペラの歴史に関しては、連隊本部の情報班が取りまとめてくれた薄っぺらな書類を、官舎のベッドの上で寝酒をやりながら通読しただけである。しかしながら、それはそれでかなり面白い読み物でもあった。

そもそもレスペラ藩王家には、ふたつの系統があった。初代藩王を祖とする一族と、その従兄弟を祖とする一族である。レスペラに入植が始まったのは、今から六十年近く前のことだ。藩王国として成立したのは、その数年後。初代藩王が亡くなったのち、その後を継いだのは当然のことながら直系の息子であり、従兄弟系の一族はいわば名前だけの王族の地位に甘んじていた。

転機が訪れたのが二十二年前である。二代目藩王が従兄弟系一族の経済力を削ぐと、強引な法律改正を行って、その所有する農地

のかかなりの部分を国有地に編入しようと試みたのである。反発した従兄弟系一族は、武力を持ってこれに抵抗、かくしてレスペラ藩王国は内戦に突入した。

ところがレスペラ唯一の実働戦力と言える警察軍は二代目藩王を支持しており、最初から従兄弟系一族に勝ち目はなかった。内戦はわずか一週間で終結する。従兄弟系一族を武装解除し、思惑通りその領地を削減した藩王だったが、宗主国たるリンカンドム中央政府は彼を許さなかった。統治能力に欠けると見なされた彼は退位を強要され、ターレンザム諸島のとある自治領への移住を余儀なくされる。事実上の追放刑であった。

リンカンドム中央政府は、レスペラで二度と内戦が起ころぬように、藩王家に対し露骨な政治介入を行った。藩王位は前藩王の長男フザロックに継がせたものの、従兄弟系一族の未婚女性との婚姻を強制したのだ。初代藩王系、従兄弟系両族を血縁で結びつけようという思惑であった。フザロックと同様、前藩王の長女セレスタには従兄弟系一族の男性との婚姻を、次男ヤラムにも従兄弟系一族の女性との婚約……当時ヤラムはまだ十四歳であった……を強いる。

いわば両系統の和解の……あるいは強制的血縁統合の象徴として生まれたのが、わたしの隣を歩いているシスティハルナというわけだ。

それ以来、レスペラは平和な状態が続いている。先の大戦の時も、数名の青年が『自発的に』リンカンドム王国陸軍に志願して出征したのみであり、全員が負傷することなく復員したという。その平和を突如破ったのが、今回の空賊来襲であった。

近付くにつれ、城の細部が見て取れるようになった。

なんとも古式ゆかしい城であった。外城壁は、あちこちが野面積みの石で補強されただけの土盛りだ。その奥の切石積みの内城壁は美しさまで感じられるほどに高くそびえている。……砲撃を受けたら、ひとたまりもあるまい。近代築城技術をまるで無視した、百五十年前ならばそこその堅城だったかもしれない時代錯誤の城、と

言わざるを得ない。

「もともと、シンボルの意味合いで建築された建物でしたから」

わたしの考えを読み取ったかのように、言い訳がましくシスティハルナが説明する。

「建国当時の熱気とでも言いましょうか、まったく何もないところから始まった入植地に、国家としての拠り所を求めようとしたのですね。あの塔にしても……」

システィハルナが、例の目立つ細長い塔を指差す。

「実質的に何の役にも立っていないのです。ただ、この地を一望できる場所が欲しかっただけ。ただそれだけのために、当時得られた建築技術の粋を集めて、あんなものを造ってしまったのですから……」

わたしも塔を見上げた。切石積みの円塔で、木製らしい円錐形の屋根がついている。あの細さでは、おそらく塔の内部には螺旋階段しかないであろう。

「まあ、この程度の古臭い城でも、内戦の時には役立ったと聞いております」

システィハルナが、続けた。

「当時の警察軍には重火器などなく、双方とも歩兵銃で撃ち合う程度。一番威力のあった兵器が、改造して爆薬の量を増した擲弾だったそうですから。空から、東の砦をご覧になったと思いますけど……」

「はい。見ました」

「あれが、内戦のもう一方の当事者だったシャンディエル王子系……いわゆる従兄弟系一族が、城館を改造して建設した砦です。あそこは、もう少し近代的な造りになっていますのよ。内戦で破壊された上に、中央政府の命令で取り壊され、今では廃墟と化していますけど」

外城壁に設けられた正門とおぼしき個所は、なんと単なる木戸であった。しかも、その警備に就いていたのは、システィハルナよ

りも若い：：いや、幼い少年であった。腰に吊った拳銃が重そうに見えるくらい小柄だ。

「一応、彼も警察軍義勇兵です。大人は皆重要な仕事に就いているか、義勇兵としてもっと危険な任務についていますから」

システィハルナが説明する。そう、ここはすでに戦場なのだ。

リュレアとはそこで別れ：：一応ここまでは、システィハルナの護衛役としてくっついてきたようだ：：一行は木戸を抜け、城の内
部へと入った。手入れの悪い中庭を抜け、これまた少年が警備についている内城壁の門：：こちらはがっちりとした切石積みの楼門に、
落とし格子まで付属した本格的なものだった：：を抜けたところで、
エクス隊長の二人の部下もいなくなった。ここから先は、安全地帯
ということらしい。わたしたちはシスティハルナを先頭に、内城壁
と一体化している城本体へと足を踏み入れた。

外見と違い、城の内部はなかなか凝った造りであった。石壁が
剥き出しになったところはまれで、ほとんどの壁面は丁寧に板張りが
施されている。装飾も多く、あちこちに絵画が飾られ、また彫刻
の類が置かれていた。わたしは芸術に関しては大して造詣が深くは
ないが、それでもこれらの作品がそれほどレベルの高くないもので
あることは察しがついた。

「初期の入植者の作品です。誤解なきように。芸術品としてではなく、
記念碑的価値で飾られているのです。生まれ故郷を遠く離れ、
文化的中心地からも隔絶したこの地で、それでも芸術的創造心を失
わなかった先祖の心意気を記念しているのです」

「左様ですか」

わたしはその中の一枚の絵に興味を引かれた。丁寧に描かれてい
るが、これといって誉めるべきところのない油彩だった。しかし、
わたしののような職業の者には心引かれる題材が描かれていた。

気がめいるような曇天をバックに、旧式な大型飛行船が飛行して
いる。ゴンドラからは、たいそうな顎鬚を蓄えた大柄な初老の男性
が身を乗り出していた。

「『レスペラ』という名の飛行船と、初代藩王サグシードです。最初の入植に使われた飛行船ですわ。サグシード自身も根っからの飛行船乗りだったのです。昔は、藩王族は皆飛行船を操れましたのよ。最近では、まれですが。まあ、わたくしはある種の先祖返りなのかもしれませんね」

くすくすと、システイハルナが笑う。いかにも少女らしい、屈託のない笑い方だ。わたしもつられて微笑んだ。

「システイハルナ！」

背後からの呼びかけに、わたしは思わず振り向いた。

声を掛けてきたのは、二十歳前後と思われる青年だった。まっすぐな黒髪を男性としてはやや長めに伸ばしており、なかなか整った風貌だ。王女殿下を呼び捨てにできるところを見ると、王族の一員なのだろう。おそらく、藩王フザロックの妹セレスタの息子だろう、とわたしは見当をつけた。名前は忘れたが、たしか二十歳過ぎの王子がいたはずである。

「こちらが、われわれを救いに来てくれた軍の方だね？」

小走りに近寄ってきた青年が、システイハルナに問う。

「そうよ。航空軍団のエルダ・フォリーオ大尉。大尉、彼はサリュシオン王子。わたくしの従兄いとこになります」

「初めまして、殿下」

わたしは丁寧にあいさつし、改めて名乗った。

「いやあ、きれいなひとだね。飛行船乗りってのは、君も含めて美人が多いのかな」

冗談であることが判る程度に微笑んで、サリュシオンがシステイハルナに言う。わたしはお義理程度に微笑を浮かべた。

「それはそれとして……君が帰還したとの報告を受けて、陛下が会議を招集したそうだ。大尉と一緒に緋色の間に行ってくれ」

早口で、サリュシオンが言う。

「判ったわ。じゃあ、あとで」

うなずいたシステイハルナが、わたしの腕を取った。

7 王女（後書き）

第七話をお届けします。やっとサブヒロイン、システイナルナ王女の登場です。

8 会議

『緋色の間』に、緋色の部分は皆無だった。壁は木目の美しさを強調させるために磨き上げた羽目板だったし、天井も白っぽいありきたりの板張りだ。床も板張りで、中央部分だけに鮮やかな青の絨毯が敷かれている。：：おそらく、なんらかの謂れがあって『緋色の間』と呼ばれているのだろうが、わたしにはその名の由来は見当もつかなかった。

青い絨毯の上に置かれた重厚な長方形のテーブルに、わたしを含め八人の出席者が着いていた。上座に座るのは、もちろん藩王フザロックその人だ。その左前方に、フザロックの弟で藩王国警察軍長官にしてリンカンドム王国陸軍予備役大佐でもあるヤラム王子が座る。その正面、フザロックから見て右前方に、いまだ飛行服姿のシスティハルナがいた。その二人から下手へ向けて警察軍幹部らしき四人の男性佐官が並び、もっとも端にわたしの席があった。：：まあ、一介の大尉の定位置はこんなところだろう。

すでに、フザロックとヤラムに対する挨拶は済ませてあった。フザロック藩王は、ちよつと小柄ながらなかなか渋い風貌の壮年男性だった。歳相応の、白髪混じりの黒髪も、彫りの深い顔立ちに実によくマッチしている。：：システィハルナのような美少女が生まれても、なんら不思議はない。

その弟たるヤラム王子は兄ほどハンサムではなかった。背はフザロックより高いものの、頭は半分禿げており：：まだ三十代のはずだが：：、腹もいささか突き出しすぎている。灰色の眼でわたしを値踏みするように睨むところなど、昔嫌っていた教練軍曹を思い起こさせる。

「遅れて申し訳ございません」

女性の声がした。

わたしは首をめぐらせて声の主を探した。フィーニアが、足早に

緋色の間に入ってくるところであつた。彼女は王族三人に対し一回だけお辞儀すると、わたしの向かいの席に座った。椅子の位置を直しながら、フィーニアがわたしに対し微笑みを見せる。わたしも微笑み返したが、内心では別のことを考えていた。フィーニアの声を識別できなかった自分に、ちょっと驚いていたのだ。……寮で同室だったころは、講堂の隅で控えめになされた咳だけで彼女と判ったものだが。七年という歳月は、やはり長い。

「では、会議を開催する」

ヤラム王子が、告げた。

「この会議は、今回の空賊来襲に関し、全般的戦略状況と戦術状況を再確認するとともに、フォリオ大尉に対し状況説明を行い、加えて同大尉と今後の空賊に対する具体的方策を検討し、必要があると認められた場合に基本作戦計画を変更することが目的である。では、エンセング少佐」

指名された軍人が起立し、空賊に襲撃されるようになったいきさを説明し始める。それら詳細はすでにわたしの頭の中に入っていたが、藩王臨席の会議でぼんやりとしているところを見せるわけにはいかない。わたしは表情だけ真剣そうな様子を取り繕いつつ、少佐の言葉を聞き流した。

レスペラ藩王国に空賊が現れたのは、二週間ほど前のことである。単独でいきなり出現した空賊飛行船は、市街地に擲弾を投下し、二名の市民を殺害、十二名に怪我を負わせ、逃走した。もちろんこの時点では敵が空賊であるとの確証はなく……厳密に言えば今でもないのだが……あくまで『所属不明の武装飛行船』という形での対処がなされることになる。レスペラ警察軍は直ちに事態をリンカムダム中央政府に無線電信で報告するとともに、次なる襲撃に備えて藩王国所有の飛行船三艇すべてに武装を施し、周囲の山岳に監視哨を設置した。

翌日、再び空賊が現れる。地上から銃砲撃がなされたものの、空賊飛行船は高高度に上昇しこれを回避、さらに擲弾を投下した。こ

れは狙いが甘かったために人的被害はゼロに終わる。

すぐさまレスペラ側飛行船二艇が離陸、空賊飛行船を追尾する。追うレスペラ飛行船のうち一艇には、自ら志願したシスティハルナ王女が操舵手として乗り込んでいた。彼女の操舵手としての腕が藩王国内でもトップクラスであることは、すべての市民が周知していたらしい。官僚の中には苦い顔をする者も多かったが、大多数の市民はシスティハルナの出撃を拍手と歓声で見送った。

レスペラ側がしばらく追尾したところで、空賊側の増援が出現する。しかも四艇。かなわぬと見たレスペラ側は離脱を図るが、空賊側は巧みな操舵でレスペラ艇の退路を絶ち、砲撃を浴びせて編隊を崩しにかかる。連携を断念したレスペラ艇は二手に分かれ、応射しつつ遁走した。システィハルナが操る一艇は、被弾しつとも見事な操舵で空域離脱に成功するが、もう一艇は集中砲火を浴び、奮戦空しく撃墜される。乗員三名は、いまだもって未帰還であり、戦死したものと見られている。

この事態を受けて、フザロック藩王は非常事態を宣言、警察軍に義勇兵の募集と編成を命じるとともに、中央政府に対し正式に軍事援助を求めた。以来数回空賊の襲撃があり、合計七名の負傷者が出たものの、幸いなことに死者は出ていない。

空賊に関しての情報は少なかった。レスペラの報告を受けたリンカンダム中央政府は隣接各国に照会し、当該武装飛行船は公的機関の所属ではなく、したがってその正体は空賊であるとの判断を下したが、それ以上の明確な情報は得られていないようで、レスペラにもたらされた中央政府の空賊に関する勧告に添えられた資料は、大部分が推測に基づくものであった。

それによれば、空賊の出撃基地はおそらく西方のタガレー共和国内。同国は先の大戦においては『東部同盟』の敵である『西方条約』の一員として、わがリンカンダム王国と交戦した元敵国である。そのうえ、同国はいまだ大戦によって生じた国内の混乱が収まっておらず、特に北部地域ではいくつもの軍閥が跳梁跋扈しているのが現

状である。おそらくその中の一派か、その支援を受けた連中がなんらかの方法で飛行船を手に入れ、空賊となったと推定される。使用する飛行船は外形の特徴から、ヴィーカル連合王国製のやや旧式な軍用艇と思われる。同国は航空先進国であり、ヴィーカル製の飛行船は軍民問わず大陸南部および西部で広く使われていることは、周知のとおりである。乗員の腕前は並程度と推察される。

問題は、空賊の目的である。元来、空賊というものはその長距離進出能力と高速性、それに捕捉しにくさを利用して都市や村落を急襲、武器による脅迫を行って金品を巻き上げるのが通例である。しかしながら、いまだレスペラ藩王領に対し、空賊側からの脅迫、金品要求等の接触は皆無であり、今回の一件に関しては、空賊の意図は不明と言わざるを得ない。

少佐が説明を終え、フザロックに一礼してから着席する。

「では、現在の防衛態勢を。ジュール中佐」

ヤラム王子の指名を受け、やや年配の軍人が立ち上がり、野太い声でしゃべり出す。わたしはこちらは真剣に聞いた。本来ならばメモを取りたいところだが、机上には紙もペンも置かれていない。飛行服のポケットには鉛筆とメモ帳が入っているが、どうやら書き物が許されるような雰囲気ではなかった。わたしは覚悟を決めて、中佐の発言を要約して記憶しようと神経を集中させた。

レスペラ側が所有する武装飛行船は現在二艇。いずれも四座艇で、最新鋭とは言い難いが、運動性は軍用艇に匹敵する。主武装は航空軍団が以前に払い下げた七型旋回砲。アマツバメ級に標準装備されている九型の一世代前の型で、射程がやや短く、精度も劣る。……ということは、あのリュレアとかいう少女は、旧式の七型で有効射程外から至近弾を与えるという射撃をやったと言うわけだ。驚嘆すべき見事な腕である。

これにわが『紫の虎』が加わったため、現在の航空戦力は三艇。一方の空賊が保有する飛行船は、推定で七ないし八艇。最大出撃数は二回目の五艇だが、それ以降は常に二艇しか出撃させていない。

理由は不明。あるいは整備能力ないしガソリンの供給に問題があるのかも知れない。

レスペラ側の地上防空態勢は、不十分である。周囲の山岳に固定監視哨を設け、火箭を利用した早期警戒／通報システムを構築してあるものの、対空火器の不足はいかんともしがたい。唯一まともな兵器は、海軍払い下げの『火龍式』艦載対空砲四門だけ。まともと言っても、払い下げを受けたのはなんと大戦前の話であり、製造は当然もつと古い。……わたしの記憶が確かならば、海軍の制式をとつくに外されているはずである。

あと戦力と言えるのは警察軍と義勇軍兵士だが、武装は歩兵銃と数門の臼砲、擲弾といったところであり、よほど低空飛行しない限り飛行船にとって脅威とはなりえない。

報告を終えた中佐が、フザロックに向け一礼してから着席する。……どうやら、これがこの会議の正式な作法らしい。発言の機会がきたら忘れずに頭を下げようと、わたしは心の中の覚書に太字で書いておいた。

「では、フォリーオ大尉。派遣部隊の現状と今後の展開状況を説明してくれたまえ」

「承知いたしました、殿下」

ヤラム王子の指名に、わたしはゆっくりと立ち上がった。慌てずに、第二航空中隊第一小隊の現状……一艇がワルアンで立ち往生、もう一艇はレスペラに到着したこと、消耗品の現状と『レンゼルブ夫人』による追加補給と整備班輸送の予定などを順序立てて説明してゆく。わたしは忘れずにフザロックに一礼してから、着席した。

「君を責めても仕方ないが、二艇というのは少なすぎるな」
ヤラム王子が、わたしを睨む。

「航空軍団は、事態を正確に把握しておらんのではないですか？」
士官の一人が、嫌味な口調で言う。

「ここも国境防衛の最前線だということを認識して欲しいですな。
アクレやオットスンとの国境ばかり見ずに」

嘆息するような感じで、エンシングだかエンセングだかいう少佐。非難がわたしに集中する。：：まあ、予測できた反応ではあるが。わたしは冷静な表情を保ったまま、眼だけでフィーニアに救いを求めたが、彼女は諦めたような表情でわずかに首を傾けただけだった。彼女はレスペラで唯一、正規に軍事航空を学んだ軍人ではあるが、この場では下っ端である。どうしようもないらしい。

「仕方ありませんわ。今は現状の戦力でどうやって市民を守るかに知恵を絞るべきでしょう」

いままで黙っていたシスティハルナが、不意にそう発言した。：至極まっとうな意見である。ヤラム王子を始めとする連中が、不満顔ながら黙り込む。

：：：ありがとう、姫様。

わたしは冷静さを装った表情のまま、システィハルナに心中で頭を下げた。

「中央政府には改めて追加援助要請の電信を送るつもりだ。システィハルナの言う通り、手元にある戦力で何ができるかを考えるべきだろう」

フザロックが重々しく言う。ヤラム王子が、うなずいた。

「軍用飛行船一艇が増えただけでは、守勢に徹するという方針に変更を加えるわけにはいかん。今日の交戦で、空賊側も航空軍団の増援が飛来したことを察知したと思われる。希望的観測を述べれば、これにより空賊側が被害を恐れて襲撃を手控える可能性もあるが：言うまでもなく、軍事においては常に最悪のケースを想定して動かねばならぬ。更なる増援到着前に、こちらの航空戦力を潰そうと空賊側が大量出撃を行う可能性も指摘しておきたい」

：：：さすがに予備役とはいえ大佐である。言うことは、まともだ。ヤラムの陸軍予備役大佐という肩書きにも、少し注釈を加える必要があるだろう。本来予備役とは退役した軍人で再召集義務が課せられた者のことを指す。だが、ヤラム王子は王国陸軍に所属したことはない。彼に与えられた予備役大佐という地位は、自治領内で治

安維持や国境警備に任ずる軍人に対する、中央政府からの名誉称号に近い。

名誉称号と言っても、あるいは予備役でも、大佐は大佐であり、それなりの特権と便宜、棒給、それに権威が与えられる。しかし、中央政府もお人よしではない。ヤラムのような人物に与えられる予備役佐官の地位には、負の側面もあるのだ。法的には、王国軍の一軍人としての様々な義務も課せられるのである。つまりは、ある種の手綱にもなるのだ。この種の名誉予備役佐官の称号が『銀鎖の首枷』と揶揄される所以である。

「そこで計画だが……」

ヤラムが、懷から紙片を取り出した。

「フォリオ大尉の艇が加わったことで、飛行船の運用に多少の余裕が生じる。過去の空賊の活動パターンからして、今後も夜間の襲撃は考慮外としても差し支えないだろう。そこで、明日から昼間迎撃待機の艇を二艇に増やすこととする。交戦規則は変更なし。空賊と確認次第、あるいはわたししないし当直士官の許可信号を確認後すみやかに、交戦を行うものとする。交戦目的はあくまで対地攻撃の阻止を主眼とする……」

……きた。

わたしは覚悟を決めると、さっと右手を挙げた。

「よろしいでしょうか、殿下」

「なにかね？」

話の腰を折られたヤラムが、わたしをぎろりと睨む。

わたしは立ち上がった。

「今のお話ですと、わたしの艇はレスペラ警察軍の指揮下に組み入れられると解釈してよろしいのでしょうか？」

「不満があるのかね？」

「殿下が陸軍大佐でもあることは十分に承知しておりますが、わたしが第二連隊長から受けた命令は、あくまでレスペラ警察軍に対する援助であり、警察軍の指揮下に入るように命じられてはおりませ

ん。警察軍の指示を受けた上での共同作戦行動は構いませんが、わたしおよびその部下、そして飛行船はあくまで第二連隊の指揮下にあります」

全員が、あっけに取られた表情でわたしを見つめている。いや、ヤラムだけは憎々しげな表情だ。

「大尉。言葉遊びをしている場合ではないのだ。ここは戦場なんぞ」

わたしは内心嘆息した。……予想通りの反応である。

しかし、ここであっさりと引き下がるわけにはいかない。この『指揮権問題』に関しては、連隊長と法務担当の中佐からくどいほどに念を押されてきたのだ。指揮権の所在を曖昧にしたまま戦闘を行ったり、あるいはレスペラ警察軍に勝手に編入されたりしたら、あとときわめて難しい法律問題に発展しかねない。しかも、今回相手となる空賊は隣国タガレー共和国内に策源地を置いている可能性が高いのだ。下手をすれば国際問題も絡んできかねない。

……『これは、航空軍団を護る戦いでもあるのだよ、大尉』

わたしは法務中佐……浅黒い、法律家と言うよりは海老採り専門の漁師と言ったほうが似合いの五十絡みのおじさん……の言葉を思い起こしていた。すでに編成から何年も経ったとはいえ、いまだ陸軍と海軍の保守的な将官のあいだでは、航空軍団は疎んぜべき存在であり、その風当たりは強い。分割して再び陸軍と海軍独自の航空隊を編成すべきだとか、規模の割には予算を喰い過ぎるとか、女性比率が不当に高いとか、士官の昇進が早すぎるとか、さまざまな非難を浴びせ続けられている。いわばベテラン女優を押しつけて主役に抜擢された新進女優のようなものだ。ちょっと台詞を間違えただけで、降板させられかねないのである。もし今回の任務で法的に間違った対応をすれば、たちまち反航空軍団勢力が好餌を見つけた鴉のように群がり、突っつき回し、内臓を引きずり出した上に貪り食ってしまうだろう。

「言葉遊びではありません、殿下」

わたしはきっぱりと言い返した。

「別に指揮権を殿下と争おうというわけではありません。戦闘行動中は警察軍のしかるべき士官の指示に従うことはもちろんですし、それ以外の際に出される要請にも原則として応じます。しかし、編成上警察軍に組み入れられたり、戦闘時以外に警察軍の命令に服したりするわけにはまいりません」

『緋色の間』の空気が、淀んだように感じたのはわたしだけだったろうか。

「大尉。あまり利口なやり方ではないと思うがな」

ヤラム王子が、ゆっくりと言う。こめかみのあたりの血管がひくついて見えたのは、錯覚ではないだろう。士官の一人が、やっていられないとでも言うように首を振る。

「：：筋の通った話ですわね」

今度も場を救ったのは、システィハルナだった。

「おじさま、わがレスペラがどこかの自治領に義勇軍を率いて赴いたと想定してみれば、フォリーオ大尉の立場もお判りいただけるはずですわ。指揮権までは、放棄しないでしょう」

「ちょっと状況が違うな、シス。大尉の指揮権を剥奪しようとしているわけではない。わたしが義勇軍を率いたとしても、その自治領の軍司令官の指揮には従うぞ」

「でも、形の上だけでしょう？ レスペラ派遣軍はあくまでレスペラ派遣軍。忠誠の対象は藩王。その自治領の元首ではないわ。兵士はレスペラのために、その自治領で戦うのです」

「：：まあ、よいだろう」

フザロック藩王が口を開いた。

「大尉。君の主張はわかった。君らはあくまで第二連隊の指揮下にある。そこで要請する。警察軍の指定する方法で待機してくれ。離陸の要請があれば速やかに離陸し、空賊の撃退に協力してくれ。いいな」

「承知いたしました、陛下」

わたしは深々と一礼した。：：第一幕はとりあえずとちらずに幕が下りた。：：拍手はなかったけれども。

『緋色の間』を辞したわたしは、王城の電信室に案内された。

応対してくれた電信員によれば、この王城に電信が導入されたのは、五年前のことだそうだ。むろん、無線電信機である。こんな山中まで有線を引っ張るなど、狂気の沙汰だ。

わたしは頼信紙四枚を手早く書き上げた。第二連隊本部に対する現況報告、ワルアン市に足止めされているデリグ中尉に対する指示、ダルムド市で待機中のテリアー曹長に対する指示、そして第二連隊作戦参謀親展扱いで暗号化された報告書。発信先は、一番近いダルムド市の陸軍駐屯地通信課無線電信班。ここから、有線でそれぞれの送信先へと伝えられるはずである。

当直の電信員は、文字がでたらめに並んでいる四枚目の頼信紙を見て眼を剥いたが、文句もいわずに電鍵を叩いてくれた。他に仕事もなさそうだったので、わたしは一仕事終えた電信員としばらくおしゃべりに興じた。これから毎日のように世話になるのだ。好印象を与えておくに越したことはない。

彼によれば、この王城電信室の係員は彼を含めて二人しかいないという。勤務は一日交代で、日の出から日の入りまで詰めっぱなし。「まあ、給金は安いですけど、忙しいこともないですし」

頭は良さそうだが、いまひとつ意志薄弱といった体の青年が、ふやけた笑みを見せる。

「ここ以外に、無線電信機ってあるのかしら？」

「レスペラ国内ですか？ 聞いた事はありませんね。だいいち、持っていても仕方ないでしょう。陛下はこの回線を市民にも開放していますからね。所定の手続きさえ踏めば、手数料負担のみでダルムド市の通信業者や役所に発信できるのですから」

青年が、断言する。

わたしは改めて礼を言うと、穴倉じみた電信室をあとにした。

9 酒宴

警察軍義勇兵の腕章をつけた少女……せいぜい十二、三だろう……の案内で、歩いて宿舎に向かう。

すでに日はとっぷりと暮れていた。だが、真っ暗だと思われた市街地は、あきれるくらいに明るかった。街路の両側に、数多くの街灯が設置されていたからだ。もっとも、街灯といっても王都の目抜き通りにあるような青銅製の瀟洒なものではなく、家々の外壁や粗雑な仕上げの丸太でしかない柱の上で、ガラスに囲われた炎が踊っているに過ぎなかったが。

「灯油ランプです。原油精製の副産物で、使いきれないほど作られますから。もっとも、設置されているのは市街の中心部だけです」

はにかむように、少女が説明してくれる。

彼女によれば、藩王国政府はわれわれ『第二連隊レスペラ派遣群』のために、二軒の民家を借り上げたそうだ。搭乗員と整備班の下士官はその民家を宿舎とし、残る兵士たちは係留場に急遽建てられた小屋に泊まることになる。

わたしが家を接収された人たちのことを気遣うと、案内の少女はくすくすと笑った。なにしろこの山の中である。街に宿屋の類があるとは思えないし、隣町の親戚や友人のところに厄介になる、というわけにも行くまい。

「大丈夫です。セレスタ様が、お部屋を提供して下さいましたから」
「藩王陛下の妹君のセレスタ王女が？」

「はい」

少女によれば、フザロック以外の前藩王の子供……長女のセレスタ王女と次男のヤラム王子はそれぞれ市街からかなり離れた場所に広い邸宅を持っているのだという。家を借り上げられた二家族は、いずれもがセレスタの招きに応じ、その邸宅に泊まっているのだそ

うだ。

「みなさん大喜びでしたわ。セレスタ様のお屋敷に泊めていただけ
るから」

「ふうん。人気があるのね、セレスタ様は」

どうもこの娘は口が軽いらしい。：：というより、十二、三歳で
明るい性格の少女で、口の堅い人物はこの世に存在しないかもしれ
ないが。わたしは情報収集のつもりで色々と訊いてみた。

「市民はみんなセレスタ様が大好きですわ。お美しくて、おやさし
くて。聡明で」

「ご病気なんですよ？」

「いえ、お体がすこし弱いだけですわ。ほとんどお屋敷にこもりつ
きりですが、臥せているわけではありません」

「ヤラム王子は人気ある？」

「：：ええ。ありますよ」

少女がそう答えるまでに、わずかな間が生じた。：：ということ
は、セレスタほどの人気者ではないようだ。：：わたしはちよつと
嬉しくなった。

「フザロック陛下の奥方はもう亡くなられたのよね。セレスタ王女
の夫も亡くなっている。ヤラム王子の奥方はご健在よね」

「はい」

「あと王族は：：フザロック陛下のご息女システィハルナ王女と、
セレスタ王女のご子息サリュシオン王子と：：ヤラム王子にお子様
は？」

「三人いらっしゃいます。可愛い双子の女の子。まだ三つですわ。
それと、去年生まれたばかりの男の子」

「ふうん。システィハルナ王女は？ やっぱり人気者かしら」

「はい。みんなに好かれていますわ」

少女の声に、誇らしげな色があつた。まあ、当然か。あれほどの
美少女で気さくな性格の王女となれば、同性からも人気は出るだろ
う。

「サリュシオン王子は怎なの？」

「サリュシオン王子殿下も、好かれていますわ。特に、若い女性のあいだでは」

今度はくすくすと笑いながら、少女。

「その笑い方を見る限り、あなたの好みじゃないようね」

「大きな声じゃ言えないけど……」

少女が急にわたしに身を寄せ、耳にそっとささやいた。

「王子はマザコンだって、みんな言ってますわ」

……なるほど。

わたしは妙に納得した。市民の敬愛を集めるほどの美貌の持ち主、セレスタ王女の一人息子で、しかももう父親が死んでいるとなれば、マザコンでもおかしくはない。もっとも、サンヌに言わせれば、人類男性の三分の一はマザコンだそうだが。サンヌ学説によれば、もう三分の一は同性愛者で、残る三分の一はロリコンだとのこと。理想的な結婚生活とは、若いうちにロリコンの男と結婚し、しかる後にマザコンの年下男と再婚することだそうだ。……いやはや。

宿舎は臨時飛行船係留場に程近い、路地の突き当たりにあった。

このあたりも一応市街中心部らしく、街灯のおかげでかなり明るい。ごくありきたりだが、結構新しそうに見える民家だった。一階に二部屋と広めの台所、二階に小さ目の部屋が四つ。離れにトイレと風呂場。案内の少女によれば、整備班の下士官用に借り上げた家はすぐ近くで、ここよりも若干狭いという。わたしは少女にいつか機会があったら甘いものでも奢ると約束してやった。……初めての土地では、わずかな人脈でも役立つことが往々にしてあるものだ。それに、どこの土地でもおしゃべりな明るい性格の少女というのは、かなりの情報通であることが多い。

「お帰り、大尉」

台所では、サンヌがちょうどお茶の支度をしているところであった。

「テイリング少尉は？」

「上で休息中」

サンヌが、ティースプーンで天井を指す。

わたしはサンヌが蓋を締めたばかりの茶葉の缶を取り上げると、中身の匂いを嗅いだ。次いで指先を突っ込み、ほんの少しだけ茶葉をはさみ、舌の上に載せてみる。

「上物じゃない」

「待遇は悪くないよ」

ポットから湯気の立つ液体をカップに注ぎ入れながら、サンヌが説明する。

「生活必需品は、ほとんど揃ってる。この家の住人が使っていたものだろうけど。寝具、食器、タオルに石鹸、当座の食糧。砂糖も。食事に関しては、一日三回運んできてくれるってさ。近所の腕自慢の主婦が交代で作るらしい」

「ありがとう」

わたしはサンヌからカップを受け取った。

「ま、遠慮なくやりましょうや」

その言葉どおり、サンヌが砂糖壺から呆れるくらいの量の薄茶色の粒を、自分のカップ放り込んだ。

「たまには甘いのもどうだい？」

サンヌが砂糖壺をこちらに押しやったが、わたしは首を振った。少女時代、ちょっと体重がつき過ぎたことがあり、その時に砂糖抜きのお茶を試して以来、プレーンで飲むのが習慣と化している。：いや、習慣というよりも一種の強迫観念かも知れない。わずかな量の砂糖で太るはずはないのだから。

「で、どうだった？」

わたしは、会議の様子やフザロックの印象をかなり端折って話した。サンヌのことは心底信用しているが、下士官に伝えるべきではない情報は伏せておく。

「だいたい予想通りだね」

サンヌがお代わりを注いだ。

「問題は、システイハルナ王女ね」

わたしはカップを置くと、顎を掻いた。

「どうして？ あんたの口ぶりじゃ、いい子なんだろう？ 腕もいいし」

「たしかにシステイハルナはいい子だと……思う。でも、今後も飛行船に乗り込むでしょう」

「なるほど。言われてみりゃそうだね」

事の次第を理解したサンヌが苦笑した。

「共同戦闘行動中にもし王女様がおっ死^ちんだりしたら、警察軍は責任をすべてあたしたちになすりつけかねないというわけか」

「その通り」

わたしは嘆息をお茶とともに飲み下した。

フィーニア・クロイが宿舎を訪ねてきたのは、夕食後になった。

わたしはとりあえずテイリング少尉とサンヌを紹介した。フィーニアが、土産だと言って抱えてきたワインの瓶を、二人に押し付ける。

「一応、特産品だから。飛行船運賃を上乘せしても利益の出る、レスペラの事実上唯一の産物よ。味は保証するわ」

「では、遠慮なくいただきます、クロイ少佐殿」

どうやらフィーニアがわたしと二人きりになりたいらしいと見て取ったサンヌが：：やはり勘は鋭い：：、瓶を受け取るとテイリング少尉を引っ張るようにして二階にあがって行った。

「わたしたちはこれ」

フィーニアが、もう一本瓶を引っ張り出した。こちらは、小ぶりなブランデーの瓶だ。

「お酒の趣味は変わってないでしょ？」

「まあ、ね」

わたしは曖昧に答えた。士官学校の寮にいた頃よりも、酒量は明らかに減っている。

もともと、わたしに飲酒の習慣はなかった。酒の味を覚えさせたのは、実はフィーニアである。寮で彼女の晩酌に付き合わされたのが、そのきっかけであった。

フィーニアが、ふたつのグラスにブランデーを注ぐ。その慎重な手付きは、寮で同室だった頃と変わらないことに、わたしは気付いて微笑んだ。ただし、使っているのは右手ではなく、左手である。

「こんなもんだっけ」

フィーニアが、わたしのグラスにだけ水を注ぎ足した。彼女のグラスは、ストレートのままだ。……同室時代と変わらない。

わたしは灯油ランプを片手に、台所の戸棚を探ってつまみになりそうな干し肉やチーズを引っ張り出した。夕食直後で腹は減っていないが、フィーニアは食べながら飲むのが好きだったことを思い出したのだ。

「まずは、再会を祝して乾杯ね」

フィーニアが、グラスを掲げる。

「戦場での再会というのが引っかかるけどね」

わたしもグラスを掲げた。

「まずは言い訳させてもらうわ」

ぐいっとひと飲みしたフィーニアが、言う。

「システィハルナ王女のことでしょ？」

「そう。飛行船に乗って出撃していることは内緒だったのよ。空賊側を、不用意に刺激しないためにね」

「まあ、そういうことなら、理解できるけど」

「びっくりしたでしょ？ おそらく、昔のわたしと同じくらいの腕前じゃないかしら」

寂しげに、フィーニアが笑う。

わたしたちは、しばらくのあいだ近況を交換しながらグラスを傾けた。酔いが静かに回るうちに、わたしは時計の針が七年ほど巻戻っていったように感じ始めた。次々と、七年前のフィーニアのことを思い出す。ブランデーを慎重に注ぐ手付き、干し肉を下品に噛み

千切る食べ方、受けない冗談を言った後で照れ隠しのためにうなだれる仕草、五分に一回くらいの頻度で行われる、前髪いじり……。脇腹を掻く仕草まで、七年前とそっくりだった。……右手をいっさい使っていないことを除けば。

直接会った以上、訊かないわけにはいかなかった。わたしは、意を決してグラスをぐっと空けると、口を開いた。

「……で、その後右手はどう？」

「動かないよ、相変わらず」

フィーニアが、右腕を顔の前にかざした。表情がわずかに強張り、力を込めたのだと知れる。しかし、指先はわずかに震えただけだった。

「四年……かな」

「そうね。今度の夏で、丸四年ね」

その時のことは、送られてきた長文の手紙を何度も読み返したので、まるでその場に居合わせたかのように、わたしの頭の中では鮮やかに映像として記憶されていた。

レスペラ警察軍では領土巡回と称し、定期的に保有する飛行船で訓練を兼ねた哨戒飛行を行っていた。艇長クロイ中尉以下三名の部下が乗り込んだその日の飛行は天候にも恵まれ、順調に進んだ。四時間を越える哨戒を済ませた艇は無事にレスペラ上空へと帰還し、係留場へと高度を下げていった。いつもと変らぬ任務は、何事もなく終わろうとしていた。

原因は、いまだもって不明である。おそらく、中古の発動機に問題が生じたに違いない。

突然、発動機が火を噴いた。ガソリンに引火し、爆発する。

フィーニアは、たまたま発動機から一番遠いところにいた。ゴンドラから身を乗り出し、双眼鏡で係留場の目視点検を行おうとした矢先だった。背中に熱さと痛みを感じた次の瞬間、その身体は宙に放り出されていた。

結果的に、ゴンドラから落下したことが、彼女の命を救った。火

は予備のガソリンと灯油に引火し、ゴンドラはすぐに炎に包まれたからだ。のちに黒焦げとなった乗員の死体を検分した医師は、三人とも空中で焼死したと判定した。

フィーニアは落ちた。幸いなことに、落下したのは樹林の上であった。密集した葉群としなやかな小枝が、衝撃を吸収する。ばきばきと枝を折りながらフィーニアは木々のあいだを落ちてゆき、最終的に密生する下生えに抱き止められた。

診察した医者は叫んだ。神のご加護だと。

骨は一本も折れていなかった。無数の浅い切り傷と、重度の打撲。背中の火傷は、革の飛行服のおかげでごく軽いもので済んだ。若く健康な女性ならば、いずれもすぐに回復する負傷だ。

だが、回復不可能な部分もあった。フィーニアは医者に訴えた。右手が動かない、と。

肘から先の感覚が、失われていた。医者は診察を繰り返したが、対処法はなかった。おそらく、神経を傷めたのだろう。

フィーニアは打撲の治療に専念しながら、右手を回復させる努力を続けた。だが、感覚はさして戻らなかった。血流は問題ないし、力を込めればわずかに筋肉が動かせるようにはなった。だが、手首を動かしたり、指先に細かい動きをさせたりすることは無理だった。事実上、利き腕であった右手の肘から先は、失われたも同然だった。打撲から回復したフィーニアは、軍務に復帰した。だが、片腕の女に飛行船操舵手や艇長は勤まらない。フィーニア・クロイ中尉は調査の結果事故に関する責任は不問とされ、フザロック藩王の温情で大尉に昇進したが、飛行任務からは外された。

わたしはフィーニアの手紙を思い起こした。突然届いた、あまりにも長い手紙。慣れぬ左手で書いたせいなのか、あるいは心が乱れているせいなのか、とにかく読みにくい字でつづられていた。読み始めた時のショック。読み終わったときの悲しみ。あとにも先にも、一通の手紙であんなに感情を揺さぶられたことはない。

「ねえ、飛んでる？」

「いや」

フィーニアが、首を振る。

「今度の一件が終わったら、飛ばせてあげようか？」

わたしの提案に、グラスを持ち上げかけたフィーニアの手が止まった。

「悪くないね」

ややあってそう言ったフィーニアが、グラスをぐっと叩いた。三分の一ほど入っていた琥珀色の液体が、あっという間に喉に注ぎ込まれる。

：：あまり乗り気ではないらしい。

わたしは話題を切り替えた。話すネタなら、たくさんあった。笑える話。友人だから話せる恥ずかしい話。愚痴。上品な猥談。

「もっと頻繁に会えばよかった。あんたと飲むのが、こんなに楽しいとはね」

七杯目だか八杯目だかをすすりながら、わたしは思わずそう口走っていた。

「航空軍団辞めて、こっちに来る？」

「あはは。それもいいかもね」

「藩王陛下もシステイハルナ王女も飛行船には理解があるわ。正規に軍用飛行船乗員として訓練を受けた者は、レスペラにはわたし以外にはいないから、あなたの経験と実力があれば、大尉待遇で警察軍に採用してもらえるわよ」

チーズの塊に喰らいつきながら、フィーニアが言う。

「あんたの部下はいやよ。少佐にしてくれるんなら、考えてもいいわ……。あ、でもやだ。ヤラム王子の部下にはなりたくないもん」

「：：あの人はねえ」

フィーニアが、急に深刻な表情になった。

「あ。やっぱり、あんたもヤラム王子が苦手なんだ」

わたしはフィーニアの顔を指差し、笑った。酔いは、心地いいほどに回っていた。

「軍人としては優秀だけどね。保守的と言うか、融通が利かないんだよね。フザロック陛下も、ヤラム王子の意見を取り入れすぎるし」
「そのへん、どうなってるの、王族の皆さんは？ フザロック陛下が全権力を掌握しているわけじゃないんでしょ？」

「いまいち気弱なのよ、陛下は。王妃が亡くなったのは知ってるでしょ？ それ以降は、内政に関しては常にヤラム王子にお伺いを立てているそうよ。セレスト様は、もう隠居同然だし」

「若い二人はどうなの？」

「システィハルナ王女は：：頭は悪くないわ。藩王位を継げるだけの人徳の持ち主だし。陛下に対してもそれなりの影響力を持ち始めているわね。サリュシオン王子は切れ者だけど、ちょっと単純かな」
「ほほう。かなり辛辣ね」

「内緒よ、内緒」

同室時代と同様、二人とも自分の酒量の限界というものは充分に心得ていた。フィーニアが、瓶の底に残ったわずかなブランデーの三分の二ばかりを、自分のグラスに注ぎ入れる。あとの三分の一は、同量の水とともにわたしのグラスに納まった。

「では、最後の乾杯を。第二連隊レスペラ派遣群の任務成功を祈って」

フィーニアが、グラスを掲げた。

「空賊撃退と、フィーニア・クロイ少佐の昇進を願って」

わたしもグラスを掲げた。

「乾杯」

9 酒宴（後書き）

第九話をお届けします。これでキャラも舞台も設定もほぼ出揃いました。次回より、ようやく話が動き始めます。

10 工作

翌朝食事を済ませたわたしは、ひとりで係留場に赴いた。

すでに『レンゼルブ夫人』には作業員が取り付き、ダルムド市に戻るための出発準備に掛かっていた。気囊の穴は、昨日のうちに塞がれている。わたしはそれを横目で見ながら『紫の虎』に向かった。夜通し警備についていたらしい警察軍兵士二人……こちらは義勇兵でなく、正規の兵士だった……が、眠そうな顔で出迎えてくれる。わたしは劳いの言葉を掛けてから、手早く『紫の虎』の状態をチェックした。問題はないようだ。気囊に充分な熱気が入りさえすれば、いつでも飛び立てる状態である。

満足したわたしは、『レンゼルブ夫人』に向かった。船長に、テリアー曹長宛の手紙を差し出す。あとで思いついた、レスペラでは手に入りにくい物品のリストである。

「一応、軍事郵便扱いですから」

「商売にはならない、ってことだな」

いやそうな顔で、船長が応じる。法律上、軍事郵便は切手なしでも届くし、それを託された事業者は特に理由がない限り、無報酬で最寄りの郵政当局ないし軍の出先機関に届けなければならないのだ。

「開封もしないように。最悪の場合、間諜の罪で死刑よ」

冗談だとはつきり判るように、歯をむき出す笑顔を見せながら、わたしは手紙を船長に手渡した。

一仕事終えたわたしは、散歩を兼ねて周囲の放牧場をぶらぶらと歩き回った。さすがに中央山岳地帯だ。空気はひんやりとしている。昨晚も思ったより冷え込み、わたしは消灯してからごそごそと起き出して、戸棚から予備の毛布を引っ張り出したほどだ。

歩くことに飽きたわたしは、放牧場を仕切る柵に腰掛け、『レンゼルブ夫人』の出発準備の様子を眺めた。気囊はすでにほぼ一杯に膨らみ、乗員が最終点検に忙しい。見送りなのか、あるいは急に貨

物を託したくなつたのだろうか、ひよつとすると単なる野次馬か、十数人の市民がそれを取り巻いている。

眺めているうちに、わたしはその中に見知った顔があることに気付いた。あの多弁な翻訳官、フレンス・オウラだ。郵便物の運搬でも頼みに来たのだろうか。

わたしはしばし思案した。彼も一応人脈である。好みのタイプではないが、今現在警察軍幹部とわれわれの関係は冷ややかである。囑託とはいえ形の上では政府の人間なのだから、警察軍の裏事情などに通じているかもしれない。それとなく訊いてみるくらいなら害はなからう。

わたしは柵から腰をあげ、歩みだした。だが、十数歩進んだところで足が止まる。

放牧場に、車両が二台滑り込んで来たのだ。両方とも黒塗りの有蓋で、六輪の人員輸送タイプだ。

いぶかしみながら見守るうちに、停止した車両からぞろぞろと人が降り立った。総勢八名ばかり。ほとんどが、王室警護隊の灰色の制服に身を包んでいる。ひととき大きな金髪の男は、どう見てもハヴィラン・エクス隊長だった。その巨体の陰に半ば隠れている小柄な女性は、明らかにシステイハルナ王女だ。今朝は飛行服ではなく、婦人用の乗馬服のようなものをまとっている。

わたしは足を止めたまま、成り行きを見守った。どうやら、システイハルナとエクス隊長が、『レンゼルブ夫人』の船長になにやら強い調子で申し入れを行っているようだ。遠目に見るとそれは、運賃を値切っているところに見えないこともなかった。：：むろん、便乗しようとしているわけではないだろうが。

話し合いは、長くは続かなかった。結局、システイハルナが折れたらしく、あからさまに不満の色を浮かべながら、歩み去ってゆく。わたしは早足で、そのあとを追った。

護衛の一人がわたしの接近に気付き、エクス隊長に身振りで知らせる。エクスがわたしを確認し、システイハルナに耳打ちした。王

女が足を止め、わたしを見て破顔する。

わたしは足を緩めた。

「おはようございます、殿下」

「おはようございます、大尉」

エクスがわずかな身振りを見せると、部下たちが静かに周囲に散った。むろん、警護のためである。護衛対象が移動中の場合と、停止中の場合では、その警護方法もおのずから異なるのだ。前者ならば主な警戒対象は前方と側面だが、後者ならば全周が警戒対象となる。

「船長と、なにかあったのですか？」

わたしがそう尋ねると、システィハルナが『レンゼルフ夫人』の方を見やった。すでに、地上作業員が係留索を外し始めている。飛行船の場合、ゴンドラが地上を離れていなくても、船長が離陸を宣言し、係留索を解くように指示を出した時点で出発と見なすのが普通である。したがって、法規の上ではすでに『レンゼルフ夫人』は飛行中ということになる。

「……いえ、ちょっと気になることがあったものですから」

視線をわたしに戻したシスティハルナが言う。煮え切らない口調だ。彼女らしくない。

「そうですか」

わたしは深く突っ込むこともできずに、そう曖昧な返答をした。

「ところでフォリーオ殿」

「何でしょう、姫様」

「あなたの艇に異常がないか確認して欲しいのです」

「異常ですか？ 今朝、一応点検はいたしましたか……」

「妙な点はありませんでしたか？」

「気付きませんでした」

わたしはいぶかしみながらも、正直にそう答えた。

「警備の者は？ 何も言っていないませんでしたか？」

「別段なにも聞いてはおりませんが……」

「そうですか。念のために、部下の方々と共にもう一度念入りに艇の点検を行ってみてください」

「殿下……いえ、姫様がそうおっしゃるのならば、やりますが……何かあったのですか？」

「実は……」

システイハルナが細い眉をわずかにひそめた。それとほぼ同時に、異変が生じた。

わたしは『レンゼルブ夫人』に体側を向けていた。だから、直接『レンゼルブ夫人』は見えていなかった。なんとなく視界の端に、巨大な影のようなものを捉えていただけだ。それが上昇する『レンゼルブ夫人』だと言うことは判っていた。

その影が、いきなり強い光にかき消された。

反射的に光の方に顔を向ける。砲口閃光のごときまぶしい光は一瞬で収まり、空中には濃い煙の球のようなものが生じていた。その上には、ゆがんだ形の気囊。煙の球が、『レンゼルブ夫人』のゴンドラがあるべき個所にあることは、ひと目で判った。

その頃になってようやく、わたしの耳に爆発音が届いた。大口径の海岸砲の射撃音のような、重々しい音響だった。

『レンゼルブ夫人』のゴンドラが、爆発したのだ。

煙の球は急速に膨らんでいった。爆風と共に、種々雑多なゴンドラの断片が、あるものは煙の尾を引きながら、あるいは炎をまとわりつかせながら、四方八方に飛び散り始めた。

わたしはとっさにシステイハルナの細い身体を抱いて、地面にしゃがみこんだ。王女は抵抗しなかったが、そのまなざしは『レンゼルブ夫人』のなれの果ての方を見つめていた。

飛び散った断片が、地面に撒き散らされる騒々しい音があたりを包む。

「うっ」

わたしは思わず唸った。一片が、わたしの背中を直撃したのだ。幸い、硬い金属片などではなかったらしい。誰かが手加減して蹴っ

た蹴球が当たった程度の衝撃だった。

「殿下！」

いきなり、わたしとシスティハルナの上に巨体が覆い被さった。

エクス隊長だろう。

しばらくしてエクスが身を起こし、わたしも顔をあげた。すでに、『レンゼルフ夫人』の爆発に伴う破片の撒布は収まっていた。代わりに、悲鳴と怒号があたりを包んでいる。

「立たせてください、フォリーオ殿」

冷静な口調で、システィハルナ。

わたしは、彼女に手を貸すようにして立ち上がった。

『レンゼルフ夫人』のゴンドラの姿はどこにもなかった。ただ、地面に無数のがらくたが撒き散らされているだけだ。支えるべき対象を失った気囊は、飛び散った破片に無数の穴を開けられた惨めな姿にもかかわらず、なおもけなげに空中に浮かんでいる。……ピンク色の兎の笑顔が、どことなく寂しげに見えたのは、気のせいだろうか。

直下の牧草地は見事なまでに黒く焼け焦げていた。爆発で撒き散らされた燃料類に引火したのか、あちこちで炎が踊っている。

「お怪我はありませんか、殿下」

エクス隊長が、やや青ざめた顔で問う。

「わたしは大丈夫です。誰かを連絡に走らせて。残りの者は負傷者の救護を」

システィハルナが指差す先には、ほんの一分ほど前には『レンゼルフ夫人』のゴンドラであったはずの破片の中に倒れ伏すいくつかの人影があった。巻き込まれた地上作業員だろう。……あるいは、落下してきた『レンゼルフ夫人』乗員の死体かも知れないが。

「承知いたしました、殿下」

エクスが命令を怒鳴る。部下たちが、一斉に走り去った。エクス本人は、あくまでシスティハルナの護衛にこだわるようだ。

「可能性を予見できていたのに、阻止できなかった……」

システイハルナがぷつくりとした愛らしい唇を噛む。

元来、飛行船というものは剣呑な乗り物である。狭いゴンドラ内に、大量の可燃物を積載した上に、それらを燃焼させながら飛行するのだ。しかも、発動機用ガソリンはたいへん揮発性が高く、したがって発火しやすい上に、爆燃といっていいほどの激しい燃焼をする。フィーニアが巻き込まれた事故も、こんな感じだったに違いない。

……だがこれは事故ではない。破壊工作だ。

システイハルナの言動から、わたしはそう確信していた。彼女はなんらかの事情で『レンゼルブ夫人』に破壊工作が行われるとの情報をつかみ、それを阻止しようとしたに違いない。そしておそらく船長に異常はないと告げられたのだ。『紫の虎』の異常の有無をわたしにしつこく尋ねたのも、それで納得がいく。

「とにかく、あなたの治療をしましょう」

そう言ったシステイハルナが、わたしの上着に手を掛けた。

「な、なにをなさるんですか、姫様」

わたしは慌てた。だが、システイハルナは有無を言わせずわたしの上着を脱がせてしまう。その背中の部分がわずかに朱に染まっているのに気付いたわたしは、硬直した。

「いけません。触らないで」

背中に手を回そうとしたわたしを、システイハルナがたしなめる。「待ってください、姫様」

システイハルナの手が、わたしのシャツを脱がせにかかる。わたしは目顔でエクス存在を指摘した。まあ、男に下着姿をさらすのを大いに恥じるほど初心ではないが、この地ではしたない女だという評判を広めるのも具合が悪い。

「こちらへ」

了解したシステイハルナが、わたしを手近の小屋に押し込めた。明り取りのために扉を開け放ったまま、わたしを脱がせにかかる。

小屋の中とはいえ、素肌をさらすとさすがに寒かった。わたしは

両膝を床に着き、両腕を組んで胸部を抱きかかえるようにして、少しでも体温が失われるのを防ごうとした。

「打撲と浅い裂傷ですね。尖ったものがぶつかったけど、刺さりはしなかったみたい。うまい具合に、背骨も逸れているわ。出血はかなりしているけど、きれいな傷よ」

傷を調べながら、システイハルナ。冷たい指先が、わたしの背中に触れている。

「ハヴィラン！」

彼女が一声叫ぶと、いきなり戸口から手のひらサイズの白っぽい物体が投げ込まれた。システイハルナが、それを器用に空中で受け止める。

すぐに、わたしの背中に柔らかいものが押し当てられた。システイハルナの手がわたしの腹の方に回ってくる。包帯だ。どうやらエクスが投げ込んだのは、軍用の戦場応急具だったようだ。脱脂綿を布で包んだ止血帯と包帯が入っている軽量の包みで、陸軍の歩兵や海軍狙撃兵ならばみな持たされている。わが『紫の虎』にも、非常用品として人数分は積み込まれていた。

システイハルナの手際は良かった。見習衛生兵よりも上手に、くるくると包帯を巻いてゆく。

「お上手ですね」

わたしは心底感心してそう言った。

「山の民ですからね。女は皆簡単な外科的治療くらい心得ているものですよ」

こともなげに、システイハルナ。

「とりあえず、これでいいでしょう」

「ありがとうございます、姫様」

わたしは礼を言いつつシャツに袖を通した。

「礼を言いたいのはこちらです、フォリーオ殿」

指先に付着した血液を余った包帯で拭きながら、システイハルナがわたしを見つめた。

「わたくしを、身を挺して護ってくれましたね。レスペラの市民でもないのに」

「当然のことをしたまですわ」

わたしは微笑みながらそう答えた。彼女を庇ったのは半ば本能的なものであった。危機的な状況に置かれた際に、とっさに自分よりもか弱そうな存在を庇ってやったに過ぎない。おそらく、あの場に仔犬や仔猫がいたとしても、同じように庇ったに違いない。

「ともかく、ありがとう。このことは生涯忘れることはないでしょう」

システイハルナが、厳かな調子で手を差し出す。わたしはその手をしっかりと握り返した。

わたしとシステイハルナが小屋を出る頃には、もう多くの人々が係留場に駆けつけていた。警察軍兵士が随所に立ち、市民らの手により負傷者が次々に運び出されてゆく。

エクスが、わたしの上着を腕に掛けて待っていた。

「ありがとう、フォーリオ大尉」

少し照れたような色を見せながら、エクスがわたしに上着を手渡してくれる。……とっさにシステイハルナを庇ったおかげで、彼にも好印象を持たれたようだ。わたしはその印象を長続きさせようと、取って置きの笑顔を見せながら上着を受け取った。

「姫様……いえ、殿下」

わたしは上着を着込むと、システイハルナに向き直った。

「殿下はこれを単なる事故とお考えですか？」

「いえ。断じて事故ではありません」

「では、破壊工作が行われることを予見なさっていたのですね？」

わたしの断定的な問いかけに、システイハルナが一瞬口ごもる。

「……そうですね」

「それでは……」

さらなるわたしの問いを、彼女は身振りで制した。

「その話はあとにしましょう。……そうね、昼食を一緒にしましょう。昼前に王城に来て下さい。よろしいですね」

「喜んで、姫様」

「あなたは、部下の方々ともう一度あなたの艇を調べて下さい。十分分に気を付けて。いいですね。それと、背中を医者に見せるように」

「承知いたしました、姫様」

10 工作（後書き）

第十話をお届けします。ようやく策謀がその姿を現し始めました。次話以降、推理ものやスパイ小説がお好きな方は、内通者や空賊の目的や真の黒幕がどこか、など推測しながら読んでいただくより楽しめるかもしれません。：：内通者に関しては、キャラの数をセーブしているのですでにばればれ（汗）かもしれませんが。

11 昼食

「こちらへどうぞ、フォリーオ様」

執事：：王族に仕える人の場合、この用語で正しいのだろうか：
：が、わたしを一室へといざなった。第一種礼装に身を包んだわたしは、ちよつと緊張気味に執事が開けてくれた戸口から中へと足を踏み入れた。

そこはさして広くない食堂だった。中央に、純白のテーブルクロスが掛かった正方形のテーブル。天窓から差し込む光が、並べられた金属の食器類を照らしている。

「どうぞ」

執事が椅子を引いてくれる。わたしは礼の言葉をつぶやきつつ腰を下ろした。すぐに給仕係：：たぶん：：の小柄な女性が現われ、食前の飲み物を注いでくれた。執事が下がり、給仕係も引っ込んだところで、わたしは背の高いグラスに半分ほど入った見た目は工場廃液にそっくりな飲み物をすすってみた。何種類かの果汁やすりおろした果肉を混ぜたものらしく、柔らかな甘味とよい香りがした。悪くない。

ほどなく、システイハルナが現われた。

「立たなくて結構」

立ち上がりかけたわたしを、そう言って制する。

今回のシステイハルナのいでたちはなんとも可愛らしかった。濃淡二色の水色を基調にしたドレスで、裾は膝下までしかない。髪には少女趣味な大きなリボン。こちらも水色である。飛行服や乗馬服など色気のない装いばかり見せられていたので、ドレス姿は鮮烈とあっていいほど新鮮かつ刺激的：：むろん、性的な意味合いではない：：と言えた。それと同時に、わたしは彼女がまだ十六歳の少女だということを改めて思い起こした。

「背中の具合はどうです？」

「医者は問題ないと言いました。傷口はすぐに塞がるそうです。打撲もせいぜい全治三日とのことです」

「それはよかった」

システィハルナが、心からと思われる安堵の笑みを浮かべる。

「車両をどうもありがとうございました。お心遣い、痛み入ります」
わたしは座ったまま一礼した。システィハルナはわざわざ、わたしたちの宿舎まで迎えの無蓋車両を寄越してくれたのだ。しかも、無蓋車両の中には背中への傷を気遣って、特別に柔らかい羽毛クッションをいくつも用意させてあった。運転手にそれとなく尋ねたところ、システィハルナ自らが侍女の一人とともに運び入れたという。
：若いくせに、気が利く。これならば、人望を集めるはずである。
「お気になさらずに。招待したのは、わたくしですから。それと：艇の方には異常ありませんでしたか？」

「はい」

わたしとサンヌ、テイリング少尉の三人で、『紫の虎』内外を徹底的に調べたが、破壊工作の痕跡とおぼしき事象は何ひとつ発見できなかった。

「いずれにしても、『レンゼルブ夫人』を失ったことは痛手ですわね」

飲み物をすすったシスティハルナが、嘆息する。

わたしはうなずいた。すでに今回の一件については、詳しい電信報告が警察軍から航空軍団の方へ送られている。いずれ民間籍飛行船が雇用されるだろうが、それまでレスペラは孤立状態となる。ガソリンや灯油は自給できるし、弾薬筒のストックも余裕があるが、整備班が来れないのは痛い。

「『レンゼルブ夫人』は、あなたの艇の身代わりになったのかも知れませんか」

「やはり姫様もそうお思いですか」

わたしはわずかに唇を噛んだ。警察軍は、『紫の虎』にも『レンゼルブ夫人』にも警備の者を張り付かせていた。その能力が高かつ

たことは、『紫の虎』に破壊工作が行われなかったことから推察できる。そこで、作業員はおそらく『レンゼルブ夫人』に積み込まれる貨物になんらかの仕掛け……たぶん焼夷物質を付属させた爆薬……を施したのだ。ほんのわずかな爆発と燃焼でも、それがゴンドラ内で生じたものならば、たちまちガソリンに引火して、大爆発を起こしてしまう。

「では、姫様はレスペラ内に空賊に通じている者がいるとお考えなのですか？」

システイハルナはそれには答えなかった。代わりに、給仕係を呼ぶ。

「始めてください」

スープは小麦粉でたっぷりとろみをつけた、具の多いものだった。魚の切り身……むろん淡水魚である……はやや泥臭く、港町育ちのわたしの口には合わなかったので、ソースをたっぷりと絡めた上に付け合せのソテーした野菜を載せ、むりやり口に押し込んだ。ステーキはちょっと拍子抜けするくらい小さかったが、味は上々だった。全体としてやはり薄味であり、山中ゆえに塩や香辛料を多用する習慣がないことをうかがわせた。上質な食事ではあったが、幼い頃から塩辛い干し魚や塩蔵鱈などを食べつけていたわたしにとっては、なんとなく物足りないような気もした。

「デザートはケーキか果物か果実のパイ。どれがよろしいですか？」システイハルナが訊く。わたしの腹具合からすれば、全部平らげられそうだったが、そんなはしたない真似はできない。瞬時迷ったが、果物ならばいつでも食べられるだろうし、ケーキもどうせ素朴なものだろうとわたしは判断した。ここはやはり、丁寧に作られているであろうパイを味わってみたい。

「では、パイをいただきます」

「では、わたくしはケーキを」

システイハルナが、給仕係に注文を出す。運ばれてきた皿を一目

見て、わたしは自分の決断の正しさを知った。

システイハルナの前の皿には、きれいに焼き上げられ、粉砂糖をまぶされた、そこそこ美味しそうだったが、ありふれたケーキが載っていた。

対するわたしのパイは見事なものだった。扇形にカットされた大きな一片には、砂糖漬けにされた色とりどりの果実と砕いた堅果、それに生焼けの数種のフルーツが乗せられ、幾重にも折り重ねられたパイ生地自体もふんわりと焼き上げられている。

だが、わたしはそのおいしそうなパイを食べそこねた。

わたしはパイにそっとナイフを入れた。さくっという小気味良い音とともに、つやのある生地に刃が沈み込む。わたしは丁寧に作業を進め、正方形に近い形に一片を切り取った。ナイフを置き、フォークでその一切れを持ち上げようとしたその瞬間、かすかにぽーんという音が鳴り響いた。

システイハルナが、弾かれたように立ち上がる。

「なんですか？」

「監視哨からの警報です。空賊ですわ。たぶん、西」

システイハルナが窓を開け放つ。わたしもフォークを置くと、窓に駆け寄った。

山並みの向こうに、一筋の煙の柱が上がっていた。火箭だ。

「北西監視哨ですね。色は赤。とすると、視認したのは第十二監視哨。：：真西だわ」

システイハルナが振り返り、わたしの腕をつかんだ。

「行きますよ！」

有蓋車両に押し込められ、一気に丘を駆け下る。

「手伝ってください」

そうわたしに頼んだシステイハルナが、あの可愛らしいドレスを脱ぎだし始める。いささか戸惑ったが、ここは手を貸さないわけに

はいくまい。わたしは広いとは言えぬ有蓋車両の中でシステイハルナの脱衣を手助けした。

ドレスの下から現われた肉体は、いかにも少女らしい体つきながらもそこそこ鍛えられた見事なものであった。太腿などは常に身体を動かしている者特有の引き締まったものだ。腕は細く、白く、柔らかかったが、華奢な感じは微塵もなかった。

車内の隅に置いてあった布袋から飛行服を取り出したシステイハルナは、それを着け始めた。わたしはそれをぎこちない手付きで手伝った。

着替え終わってすぐに、車両が止まった。文字通り車両から飛び出したシステイハルナの後から、わたしも飛び降りた。係留場では、すでにレスペラ艇のうち一艇の離陸準備が進んでいた。気囊は八割程度膨らんでいる。システイハルナは、その艇めがけて疾走していた。誰かが、ゴンドラの中で手を振っている。赤毛だ。おそらく、あのリュレアとかいう砲手少女だろう。

わたしも『紫の虎』めがけて走り出した。こちらも気囊はかなり膨らんでいる。ゴンドラの中にはすでに、サンヌとティリング少尉の姿があった。

ゴンドラに転がり込むと同時に、わたしの手に飛行眼鏡と飛行帽が押し付けられた。それらを手早く着けながら、問う。

「状況は？」

「敵さんは複数。西から中高度を接近中。伝令いわく、『警察軍航空部隊は迎撃に出動するので、レスペラ派遣群も共同行動を取っていただきたい』だって」

サンヌがにやにやしながら言う。：：昨日警察軍にきっちり刺しておいた釘がしっかりと効いているらしい。

「各部状況報告」

「発動機異常なし。定格保証します。気囊、索、ゴンドラ正常。ガソリン戦闘定量二分の一」

早口で、ティリング少尉。

「ボイラー燃焼中。灯油戦闘定量三分の一。砲門異常なし、未装填。弾薬筒定量。非常用品定量」

生真面目な口調で報告したサンヌが、急にくだけた口調になって、付け加える。

「：：ただし、若干一名、飛行時の軍装規定に抵触」

わたしは自分の第一種礼装を見下ろした。むろん、着替えている暇などない。

「レスペラ艇、離陸します」

テイリング少尉が叫んだ。

システイハルナの乗り組んだ艇が、するすると上昇を始めていた。発動機に火が入り、唸りが係留場に響き渡る。

わたしはサンヌを見やった。サンヌが、うなづく。機動性を重視するために、ガソリンも灯油も最大積載量どころか戦闘定量よりも大幅に少なくしてある。まだ気囊の浮力は充分とは言えないが、離陸は可能だろう。飛行船は地上にいる状態が最も脆弱である。また、離陸直後、低空を低速で飛行している状態も脆弱となる。なるべく早く高度と速度を稼ぎたい。

「緊急離陸準備！」

わたしは地上作業員たちに命じた。すぐに、係留索が外され始める。最後の三本は、一斉に斧で断ち切るという方法が取られた。乱暴なようだが、これが一番安全なのだ。

縛めから解き放たれた『紫の虎』は、ふわりと宙に浮かんだ。

「少尉、発動機始動」

「了解！」

どうん、という唸りをあげて、発動機に火が入った。サンヌはすでに対空搜索に入っている。わたしも双眼鏡を取ると、西の空を探った。

いた。

「十一時、高！」

「視認した！ 大尉、四艇もいる！」

サンヌが珍しく興奮した声をあげる。

わたしは双眼鏡を下ろした。……たしかに、四つの気囊が確認できた。そしてその空賊艇隊とわたしたちのあいだに、レスペラ艇の姿があった。

「少尉、速度維持しつつ高度上昇！ サンヌ、戦闘準備！」

「了解！」

叩きつけるような返答が二ヶ所から返ってくる。わたしは旋回砲に取り付いた。サンヌが、手早く装弾する。

……なにをするつもりだろう。

わたしはレスペラ艇の動きに不審を持った。ぐんぐんと、空賊との距離を詰めているのだ。通常、数で劣る場合には最大射程近くを保ちつつ砲撃を行うのが妥当な戦術である。接近すれば、数で勝る方が優位な機動を行い、絶好の射撃位置を確保する可能性が高い。やがて、空賊が発砲を始めた。レスペラ艇が、激しい動きで狙いを外そうとする。

「王女様は囹になる気かい？」

サンヌが、怒鳴る。

……無茶な。

そう思ったが、レスペラ艇の行動により、空賊艇はすべてそちらに引き付けられていた。むろん敵も、わが艇の動きについて承知しているはずだが、まずは一艇ずつ潰そうという魂胆なのだろう。いずれにせよまだ距離があり、『紫の虎』は空賊に対して脅威とはなっていないかった。

「少尉！ 距離を詰めて！」

システィハルナの操舵……わたしは、彼女がレスペラ艇を操っていることを疑わなかった……は見事だった。空賊砲手の機先を制するような奇抜な動きで、相手を翻弄している。撃ち返してもいるようだ、あの機動ではさすがのリュレアでもろくに狙いを付けられないだろう。威嚇射撃にしかない。

空賊が、むきになってレスペラ艇を追いまわす。多勢に無勢、さ

すがのシステイハルナも追い詰められてきていた。高度が落ち、機動する余地も少なくなつてゆく。

だが、空賊の方もレスペラ艇を追うあまり高度が下がっていた。システイハルナは、ただ闇雲に逃げ回っていたわけではなかった。効果的に、空賊艇を任意の場所に誘い込んだのだ。そしてそこは、わが『紫の虎』の射程内だった。

わたしは初弾を放った。ちょっと遠いが、相手はこちらに尾部を向ける形で飛行中なのに対し、当方はそれにまっすぐ向かっているところであつた。絶好の射撃条件だ。

砲弾は、わずかに気囊の左を通過した。サンヌが装弾するあいだ、わたしは旋回砲をしっかりと保持し、照準器の中に気囊を捉え続けた。サンヌの手が、わたしの左肩を叩く。目標の空賊艇は、ようやく進路変更を開始したところだった。距離は三百を切っている。わたしは、慎重に狙いを修正し、二発目を発射した。

命中。

わたしが放った一弾は、空賊艇気囊の下部右側を辛うじて貫いた。

「回避機動！」

テイリングにそう命ずると、わたしは他の空賊の位置を確認した。二艇はまだシステイハルナを追いまわしているが、一艇はこちらを迎え撃つために上昇を始めている。わたしが命中させた艇は、慌ててバラストを落とし始めた。ゴンドラから、砲口炎がきらめく。こちらに向けて放たれた砲弾は、大きく外れた。

わたしは次の目標を接近中の艇に決めた。被弾させた艇はしばらく脅威にはなるまい。システイハルナには悪いが、もう少し二艇を引き付けておいてもらおう。

「少尉、回避しつつ接近中の艇の側方を通過して！」

「了解！」

かなり無茶な要求であるが、テイリングの腕ならば可能なはずだ。わたしは再び旋回砲に取り付いた。空賊艇は、接近を続けながら時折発砲してくる。わたしは撃ち返さずに、じっと機会をうかがつ

た。お互い行き違う時、しかも最も近付いたときに狙うつもりだった。

相互の距離が、ぐんぐんと近づく。向こうも同じチャンスを狙おうと言うのだろう、接近しているにもかかわらず、発砲を止めた。

……ならば。

「サンヌ、バラスト投棄準備！ 下に留意して！」

「あいよ！」

わたしは作戦を変更した。今度はお互いの距離が近いから、こちらが被弾する可能性も高い。そこで、命中率は落ちるがより安全な策をとったのだ。

わたしはいったん照準器から眼を離した。今度は咄嗟射撃となる。一瞬のうちに空賊艇の未来位置を予測し、そこに砲弾を撃ちこまなくてはならない。

最接近の数秒前に、わたしは叫んだ。

「投棄！」

がくんと、ゴンドラが揺れる。……サンヌが、砂袋を投げ捨てたのだ。

すると、『紫の虎』の高度が上がった。わたしは照準器に眼を当て、空賊艇の未来位置に向け砲弾を放った。距離は百もない。ほぼ同時に、空賊艇も発砲する。

敵弾は大きく外れた。こちらの予想外の急上昇に、照準を狂わされたのだ。そしてこちらの砲弾も……外れた。

「くそっ」

わたしは毒づいた。サンヌが冷静に、次弾を装填する。

「追って！」

わたしの命令に、ティリングが素早く反応する。空賊艇は、針路そのまま高度を稼ぎつつあった。有利な位置を占めてから、射撃しようという手だろう。

「状況報告！」

空賊艇を注視しつつ、わたしは問うた。サンヌが、早口で報告す

る。

「被弾した艇は離脱中の模様！ レスペラ艇は無傷！ 一艇に命中させた可能性大！」

：：おめでとう、リュレア。

わたしは心中で赤毛の少女に拍手を送った。

「大尉、市街地に接近しつつあります！」

テイリングが、注意を促す。

「了解！」

これで、迂闊にバラストを捨てられなくなった。落下する砂袋の直撃を受ければ、人はほぼ即死である。

「大尉！」

サンヌが叫ぶ。わたしもほぼ同時に、市街の向こう側からひよっこりと浮き上がってきた気囊を視認していた。二艇目のレスペラ艇が、ようやく離陸したのだ。ちょうど、わが艇とのあいだに空賊艇を挟むような格好の位置だった。

そのレスペラ艇がさっそく発砲した。砲弾は大きく逸れたが、空賊艇を慌てさせることはできたようだ。大きく弧を描き、市街地上空を抜けて北方へと離脱しようとする。

「少尉、追隨して！」

わたしは照準器に眼を当てた。逃げる空賊艇を捉える。その視野の中を一筋の煙が伸びてゆく。レスペラ艇の放った外れ弾である。空賊艇が撃ち返す。生じた砲煙の流れ方から、わたしはおおよそその風の流れを読み取った。半ば無意識のうちに計算し、狙いをやや下方に修正する。

発射。

濃灰色の煙の槍が、気囊を貫いた。

「命中！」

宣言しつつも、眼は照準器に当てたままだ。サンヌが装弾し、視野がぐらぐらと揺れる。

空賊艇が、高度を維持するためにバラストを落とし始めた。

：：まずい。市街上空だ。

わたしは撃った。諸元は射距離が詰まった以外、先程と同じだ。命中。

「このまま近接します！」

ティリングが叫ぶ。わたしは異を唱えないことによって承認を与えた。

再びサンヌが装弾する。と、別方向からの砲弾が空賊艇の気嚢を貫通した。レスペラ艇の射撃だ。

空賊艇の機動力は格段に落ちていた。外気よりも熱い気嚢内の空気が膨張しているから当然圧力が高く、被弾した破口から勢いよく噴出してゆく。高度を維持しようと発動機を下向きにすれば、当然速度は落ちる。

わたしは次弾も気嚢に当てた。三発連続命中である。われながら、凄い。

「これ以上近づけないで！」

わたしは命じた。まだ、空賊艇の旋回砲は生きている。下手に近付けば、起死回生の一発を喰らうことにもなりかねない。

空賊艇の高度は、もはやゴンドラの底部が市街の屋根に触れそうなくらいに下がっていた。発動機はほとんど浮くために使われている。わたしはもう一発、気嚢に撃ちこんだ。これがとどめとなった。ゴンドラが、一軒の商家の二階部分に激突する。ゴンドラがひしゃげ、割れた壁板の破片が街路に降り注ぐ。

「少尉、高度を上げて！ 奴らは警察軍に任せて、システihalナを：：いえ、殿下の艇を支援に行くわよ！」

わたしは高らかにそう宣言した。

戦果：：撃墜一艇、被弾二艇。捕虜三名。損害：：被弾艇なし。負傷者なし。要修理家屋一軒。

完勝であった。他のレスペラ艇とともに残る空賊艇を追い散らし、帰還したわれわれを待っていたのは、どこにこれほどの人々がいた

のかと思えるほどの大勢の市民であった。

静々と着地した『紫の虎』を、どっと人々が取り囲んだ。警備の警察軍義勇兵が、押し寄せる人々を規制する。あちこちから、歓声がある。

「ここはひとつ、格好つけようかね」

サンヌが言い、飛行帽を着けたままゴンドラから身を乗り出し、手を振った。歓声が、わっと高まる。

「これも給料のうちね」

わたしは飛行帽を取り、手を振りつづけているサンヌの傍らで身を乗り出した。作り笑顔を浮かべ、集まった人々に手を振る。歓声が、さらに大きくなった。

「ティリング少尉。あんたもやりなさい。命令よ」

市民に対し笑顔を振りまきながら、わたしはそう言った。

「仕方ありませんね」

肩をすくめたティリングが、手を振り出す。

「飛行帽を取りなさい」

わたしはすかさず命じた。

「了解、大尉」

ティリングが、飛行帽を脱ぎ捨てる。とたんに、あちこちから口笛が飛んだ。若い男どもを中心に、歓声がさらに高まる。

と、人垣が割れた。

現われたのは、システイハルナ王女とその護衛たちだった。今回は、エクス姿は見えない。

歓声が、一斉に拍手に変わった。歩んでくるシステイハルナに向かい、集ったすべての市民が割れんばかりの拍手を浴びせる。

「降りてください！ 係留は、終わりました！」

地上作業員のチーフが、わたしに向かって怒鳴ったが、その声はすさまじい拍手の音に半ばかき消されてしまう。

システイハルナが立ち止まった。笑みを湛えたまま、視線はわたしを見つめている。事の次第を理解したわたしは、ゆっくりとゴン

ドラを降りた。どうやらシステイハルナは、この場を利用して市民受けるパフォーマンスをやりたいらしい。

わたしは笑みを浮かべたままシステイハルナに歩み寄った。三歩ほど離れたところで立ち止まり、彼女に向かい恭しく一礼してやる。その間にも、拍手は鳴り続けていた。

システイハルナが、わたしに向け歩み寄った。彼女の左手が、わたしの右手首をつかむ。

次の瞬間、わたしの右手はシステイハルナによって上へと差し上げられた。身長差があるから、高々とはいかないが、それは明らかに勝者を布告するポーズであった。

そのとき巻き起こった歓声を、わたしは生涯忘れることはないだろう。

「こんなに待遇が変わるとはねえ」

差し入れの果物をつまみながら、サンヌ。

「ちょっとした名士あつかいですね」

同じく上機嫌で、テイリング。

空賊艇を叩き落した：：しかも全市民が注視する中で：：おかげで、われわれの評判は一気に高騰した。昨日冷ややかな視線と辛辣な言葉を投げつけた警察軍の幹部連中まで、手のひらを返したかのようになつた。わたしや部下の腕前を褒め称えた。いままで警察軍は空賊に損害を与えたことはあったが、飛行船を撃墜したことはなかったのだ。わたしは藩王臨席の事後報告の席で、今回の戦果はシステイハルナの艇が空賊の半数を引き付けてくれたおかげであり、またもう一艇のレスペラ艇も撃墜に貢献していることを強調しておいた。：今後とも警察軍との良好な関係を維持したいのであれば、これくらいの謙虚さは必要だろう。

わたしたちは王城に長居することなく宿舎に戻ったが、そこへも市民がひっきりなしに訪れ、礼の言葉やら差し入れやらを次々と置いていった。わたしはテイリング少尉と交代でその相手をしたが、

途中で疲れ果ててしまい、あとの処理は警護の義勇兵少女に任せることにした。かくして、宿舎の一室は差し入れ専門の倉庫と相成った。

「また現金置いてったやつがいる」

わたしは、礼状のひとつから紙幣をつまみ出した。……新兵の棒給の半月分くらいに相当する高額紙幣である。食糧や消耗品ならば市民の自発的物資提供ということで受け取ることになんら問題は無いが、現金や装身具の類は収賄の疑いを招きかねない。警察軍を通じて、藩王国政府にまとめて返却するしかなかった。

「他に使うとこないんだろうね。遊ぶところもないし、気の利いた店もないし」

小ぶりのオレンジを剥きながら、サンヌ。

「せいぜい酒場くらいね」

ティリングが、応ずる。

「行ってみようか、酒場に」

オレンジを剥く手を止めて、サンヌがそう提案した。……わたしではなく、ティリングに。

「わたし、飲めないわよ」

「飲むのが目的じゃないよ、少尉」

オレンジの皮の一片を振りたてながら、サンヌ。

「あたしたちは人気者なんだ。今日なら、きっと男どもにもてもてだよ」

「まあ、サンヌったら」

ティリングが、艶やかな笑みを見せた。

……少尉が、サンヌの品のない冗談を聞いて笑った。

わたしは内心で眼を剥いた。わたしの知る限り、初めてのことであろう。首尾よく行った実戦のおかげでティリングの精神が高揚したせいかな、あるいは戦闘経験が両者の結びつきをさらに強めたというのか。

いずれにせよ、良い兆候である。わたしは眼を細めて、ふたりの

やり取りを見守った。

12 回想

その翌日、わたしとサンヌ、ティリング少尉の三人は、朝早くから係留場へと赴いた。

むろん、『紫の虎』点検のためである。夜間の警備状況：：不審者を見かけなかったかどうか：：を警備の者に確認してから、慎重にゴンドラ内外を調べる。

「：：怪しい物は、ないね」

備品を一通りチェックし終わったサンヌが、言った。

「こちらも大丈夫です」

主にゴンドラの周囲：：地面や係留塔になにか仕掛けられている可能性もある：：を調べたティリング少尉が、そう報告する。

「結構」

旋回砲やボイラーなどのゴンドラ内設備を精査したわたしは、朝だというのにかなりの疲労を覚えてへたり込んだ。：：むろん、精神的な疲れである。その可能性は低いとは言え、仕掛けられているかも知れぬ爆発物の搜索というのは、恐ろしく気疲れする作業なのだ。

「こりゃ、爆発物処理手当でもつけてもらわなきゃ、合わないね」

わたしの傍らにへたり込みながら、サンヌ。

「へばっている場合じゃないみたいですよ、大尉」

ゴンドラの外から、ティリングがそう声を掛けてくる。

「どうしたの？」

わたしは立ち上がり、ティリングが指差す方を見やった。

黒塗りの馬車が一台、放牧場の端に停まっていた。そこから降りてきた数名の人物が、こちらへと歩んでくる。遠目にも、その中にシステイハルナとエクス隊長がいるのが見えた。

「また爆薬が仕掛けられているなんて、言うんじゃないだろうね？」
わたしから『レンゼルブ夫人』爆発の顛末を詳しく聞かされてい

るサンヌが、ぼやくように言う。

わたしはゴンドラから飛び降りると、システイハルナを出迎えに行った。

「おはようございます、殿下」

「おはようございます、大尉」

システイハルナが、ぺこりと頭を下げる。今日も、乗馬服のようなスタイルだ。

「大尉、お時間はありますか？　少し、お話したいことがあるのですが……」

遠慮がちに、システイハルナが訊く。

「もちろん構いません。ですがその前に、部下に指示を与えておきたいのですが」

「結構です。お待ちしています」

わたしは一礼すると、『紫の虎』へ駆け戻った。テイリングとサンヌに、宿舎に戻って待機しているように告げると、システイハルナのところに取って返す。

「お待たせいたしました、殿下」

「少し歩きましょうか」

わずかに微笑みながら、システイハルナがわたしの腕を取った。

わたしとシステイハルナは、ごくありきたりの世間話を交わしながら、しばらくの間放牧地を歩んだ。護衛の王室警護隊員はあちこちに散り、エクス隊長だけがわたしたちの会話がかすかに聞き取れるくらいの距離を置き、あとをついてくる。

朝露を纏った瑞々しい牧草は、かすかだが生臭い匂いを放っていた。どこかに巣があるのか、小さな蜜蜂が数少ない野の花を探して、あたりを飛び交っている。

「座りましょうか」

システイハルナが、牧草地を仕切る柵を指差した。

わたしは彼女の隣に腰を掛けた。

「もしよろしければ、あなたのことを話していただだけませんか？
経歴は読ませていただきましたが、もっとあなたのことを知りたい
のです」

わたしの顔を穏やかなまなざしで見つめながら、システイハルナ
が言う。

「わたしのこと……ですか。とくにお話するようなことはないと思
います……」

「それほど立ち入ったことをお尋ねするつもりはありません。でも、
航空軍団から送られてきたあなたに関する経歴には書かれていなか
ったことを、知りたいのです。たとえば、あなたの生まれた街はラ
フマンだと書いてありました。わたしはラフマン市のことを、地図
の上だけでしか知りません。どういう街だったのですか？ どん
な人が住んでいたのです？ どんな音が、どんな匂いがする街なの
ですか？」

相変わらず穏やかなまなざしで、システイハルナ。

わたしは戸惑っていた。これは、単なる知識欲の顕れなのだろう
か？ それとも、そのうちこの娘に『お友達になってください』と
でも言われるのだろうか？

いずれにしても、そこまで言われれば話さざるを得まい。わたし
は背後に突っ立っているであろうエクス隊長のことをちよっと気に
掛けながら、語り始めた。

わたしの生家は、その東半分がリンカム王国の飛び地となっ
ているエドレン半島の最も東に位置する港町ラフマンで、中規模な
宿屋を営んでいた。

ラフマンは小さいが賑やかな街であった。東大洋は豊かだが荒れ
やすい海であり、そこに差し伸べられた腕のようなエドレン半島の
突端にあるラフマンは、昔から避難港兼漁港兼風待ち港として栄え
たのだ。汽走船の一般化に伴い、風待ち港としての機能は低下した
が、それでも街の賑わいは衰えなかったし、宿も繁盛していた。

わたしには二人の姉と一人の兄がいた。すでに兄は宿屋の跡取り息子としての道を歩み始めていたし、姉二人はごく普通の若い娘として成長していた。わたしが成人してからのことだが、父が酔っ払って思わず漏らした言葉を信用するとすれば、『普通の女の子を育てるのに飽きた』らしい父は、三女であるわたしをちよつと毛色の変わった子供に育てようと試みたらしい。そういうわけで、わたしはかなり自由奔放な育て方をされたようだ。……少なくともおしとやかな娘でなかったことは、確かである。

そんな少女時代のわたしの心を捉えたのは、飛行船であった。ラフマン市港の南には軍用埠頭があり、東大洋を哨戒するリンカム海軍の戦隊が常駐していた。そこには海軍航空隊の飛行船中隊も併設されており、しょっちゅう哨戒任務や訓練のために飛び立っていたのだ。宿屋の屋根裏にあるわたしの部屋の窓からは、係留されている飛行船はもちろん、整備作業を行う兵士たちの姿までもがはっきりと見通せた。飛行船が飛ぶ天気の良い日には、自室にこもって飽かず係留場を眺め、飛ばない雨や霧の日には外に遊びに行くというのが、わたしの習慣であった。今思えば、かなり変な子供である。大陸のほとんどの国家が参戦した『大戦』が勃発したのは、わたしが十二歳の時であった。わがリンカム王国は、いわゆる『東部同盟』の盟主として、ヴィーカル連合王国やタガレー共和国、ドングル海沿岸協商諸国などを主力とする『西方条約』諸国と戦った。大陸で事実上最も戦線から遠い街であったラフマンは、一年半に及んだ大戦の間も平和そのものだったが、子供の眼を通して戦争の影はそれなりに感じられた。西方からの輸入品の不足、埠頭に入港する大型船舶の減少……海軍にかなりの船が徴用されたせいだ……、物価の上昇、そして、重度の障害を負って帰郷する軍を除隊した青年たち。むろん、死体となって帰ってきた者もいただろうが、なぜか戦死者の葬儀などに関する記憶はない。……たぶん、両親が見せないように気を使ってくれたのだろうが。

海軍飛行船中隊も、戦争中はラフマンを留守にしていた。そして、

戦争が終結してもしばらくの間帰ってこなかった。大戦はいわば引き分けに終わり、戦後も両陣営は大陸中部に戦力を集中させていたから、辺境の洋上哨戒に回せる飛行船戦力はなかったのだ。

わたしの飛行船への思いは、この時期さらに強くなっていた。遠距離恋愛の心理、とでも言えればいいのだろうか。飛行船の姿が見えないことによって、さらに恋慕の情が募っていたのだ。

すでに、わたしは両親と兄に対し、将来飛行船乗りになると宣言していた。狙っていたのは、民間籍輸送飛行船の操舵手であった。子供なりに、軍用飛行船は危険だと考えていたのだ。

だがその一方で、わたしはあまり粘り強くない人間であることも確かだった。民間籍輸送飛行船の操舵手になるためには、まずそれから飛行船を保有して運航する企業に入社し、そこでいわば下積みとも言うべき仕事をこなしてから、あらためて操舵手候補として名乗りをあげ、先輩操舵手の指導を受けつつ腕を磨かねばならない。そしてそれら飛行船の操舵手の大半は男性であり、女性の入り込む余地はあまりないことも事実であった。もちろん、自分で飛行船を手に入れば、役所の認可を受けるだけで操舵手となることは可能だが、そんな元手が十代の女の子にあるわけもない。当然のことながら、繁盛しているとはいえ平凡な宿屋にも、そのような蓄えはなかった。

幸い、大陸は平和な方向に向かいつつあった。わたしが中等教育を終わる前に両陣営は全面的和解にこぎつけた。『東部同盟』は解散し、『西方条約』は単なる通商条約に格下げされる。さらに幸運なことに、リンカンダムでは飛行船戦力の統合が発表された。陸軍航空師団と海軍航空隊が合併し、新たに第三の軍種として……陸軍や海軍と比すれば格下で、しかも呆れるくらいに小規模ではあったが……航空軍団が発足する運びとなったのである。その準備として、航空軍団隊員を養成するための各種学校が一足先に開校された。その中には、航空軍団士官学校の名もあった。

わたしは迷わず航空軍団士官学校に応募書類を送った。とりあえ

ずそこで飛行船操舵を習い、数年だけ軍務に就いてから除隊し、民間籍飛行船の操舵手に鞍替えすればいいと考えたのだ。

書類は受理され、わたしは試験を受けるために士官学校が開設された本土のヴェデルチ市行きの列車へと乗り込んだ。生まれて始めての一人旅であった。

試験の出来は上々だった。適性検査にも合格した。わたしは、晴れて航空軍団士官学校第一期生として入学を許可された。あてがわれた寮はあたりまえの話だがまだペンキの匂いが取れていないほど新しいもので、二人で一部屋を共用する造りになっていた。同室となる人物はくじ引きで決められた。わたしと相部屋になったのは、レスペラという聞いたこともないちっぽけな辺境藩王国からやってきた、フィーニア・クロイと言う名の笑顔を絶やさぬ明るい女の子だった。わたしはちよつと会話を交わしただけで、彼女のことを好きになった。まあ、当然だろう。二人とも、飛行船を死ぬほど愛していたからだ。

前途は順風に思えた。だが、逆風はすぐに吹き始めることになる。

最初の一ヶ月は、飛行船とは無縁の学課と実技が続いた。軍人としての基礎訓練と基本的な事項の学習である。

それが終わったところで、全員が適性検査を受けた。結果を聞いたわたしは愕然とした。操舵手としての適性に欠ける、と判断されてしまったのだ。ちなみに、フィーニアは適性ありと判断され、今後は操舵手課程を受けることになった。

わたしは悩んだ。航空軍団の軍人イコール操舵手、などというのは幻想だったことに、遅まきながら気付いたのだ。航空軍団士官学校は、あくまで航空軍団に勤務する士官を養成するためのものである。操舵手養成学校ではないのだ。航空軍団も軍隊である以上、様々な兵科や職掌がある。整備や主計、衛生や憲兵士官なども、同時に必要とされるのである。

落ち込んでいたわたしを救ってくれたのは、フィーニアのアドバ

イスだった。航空砲手課程に挑戦してみないか、と言ってくれたのだ。幸い、基礎訓練でのわたしの射撃の腕前は……それまでは玩具の銃さえ触ったこともなかったのに……優秀だった。

フィーニアのその時の言葉は、いまでも覚えている。『操舵手だけが飛行船乗りじゃない。砲手も立派な乗員よ。それに、あんたが砲手になれば、おんなじ艇に乗れるかも知れないじゃない』

彼女の言葉に励まされたわたしは、砲手課程を志願した。そして……適性を認められた。

わたしもフィーニアも、卒業の頃にはちょっとした有名人になっていた。彼女はすでに第一期生でもっとも腕がいい操舵手としての評判を勝ち取っていたし、わたしも砲手課程では成績上位五人の一角を占めていたのだ。しかも、その中で女性はわたしだけだった。

無事卒業し、晴れて新米少尉となったわたしとフィーニアだったが、同じ艇に乗り組むという夢はもちろんかなわなかった。フィーニアは首都近郊を守備範囲とする第一連隊に配属され、わたしは北西部国境を守る第二連隊に配属されたからだ。

それから会う機会もないまま、フィーニアは故郷のレスペラに呼び戻されてしまう。彼女は少尉のまま退役し、レスペラ警察軍で本格的な航空部隊の創設に携わることになる。

一方のわたしは、第二連隊で順調に昇進を続けた。航空軍団は拡張期にあり、士官の数自体が不足しており、ポストの数が余っている状態だったからだ。わずか半年で艇長の座を射止めたわたしは、中尉に昇進して小隊を、さらに大尉に昇進して中隊を率いることになる……。

「そう。失礼な言い方かも知れないけれど、かなり面白い人生を歩んでこられたみたいね」

くすりと笑いつつ、システィハルナ。

「否定は出来ませんね」

わたしはそう応じた。

「これからどうなさるおつもりですか？」

可愛らしく小首をかしげて、システィハルナが訊く。

「これから、と申しますと、将来のこと、という意味でしょうか」
「そうです」

「……とりあえず、軍人として生きるしかありませんね。唯一、他人よりも抜きん出ている才能が、飛行船から旋回砲を撃つ、という技術だけですから」

「少佐になって、中佐を目指し、ゆくゆくは将官を狙う、ってところね」

「はい」

「ご結婚とかは？ 子供が欲しいとか、家庭を持ちたいとか思ったことはないのですか？」

「……男は嫌いじゃありませんが……飛行船の方が好きですから」
わたしの正直な答えを聞いて、システィハルナがぷつと吹き出す。
「そんなに面白いことを言いましたか？」

「いえ、ずっと昔、クロイ少佐に……当時はまだ中尉だったと思うけど、同じような質問をしたことがあるの。その時の答えと、そっくり同じだったから」

「はあ」

「似たもの同士なのね。だから、仲がいいんだわ」
断定的に、システィハルナが言う。

システィハルナが、ぴよんと柵から飛び降りた。わたしも慌てて腰をあげた。

「大尉。とても興味深いお話、ありがとうございました。たいへん勉強になりましたわ」

「……わたしの人生など、参考になさらない方がよろしいと思います
すが……」

「とんでもない。人生の先輩の話は、とてもためになります」

システィハルナが、そう言いつつわたしにきゅっと抱きついた。

……幼い子供が、母親に抱きついたような感じだった。

「それに、どうやらあなたのことを好きになれそうですわ」

13 茶話

「おや、大尉。お久しぶりですね」

王城の通廊でばったり出くわしたのは、サリュシオン王子だった。「：：どうでしょう、お茶でもいかがですか？」

サリュシオンが、感じのいい笑顔で誘いの言葉を口にする。

別に急ぎの用事があるわけでもないし、マザコンとの噂があるとはいえ向こうはなかなかハンサムな王子である。ここは誘いを受けるのが女の常識というものだろう。うまくいけば玉の輿、などということはないだろうが、王族の一員を味方につけると言うのは悪くない。

「ありがとうございます、殿下。ご馳走になります」

侍女が注いでくれたお茶を、慎重にすすする。

「おいしいですわ」

わたしはちょっと媚びたような笑顔をサリュシオンに向けた。

「それで、今日は何の用事で王城に？」

「連隊への定期報告です。電信室を、お借りしました」

「そうですか。：：：どうです？ 今回の一件、いつごろ終結しそうですか？」

「難しいご質問ですね。ご存知のように、空賊側からいまだ金品の要求などは一切届いていないのが現状です。つまり、空賊の戦略目的が不明なわけです。レスペラへの襲撃という戦術行動を根本的に阻止するには、空賊側の戦略目的を知り、その戦略そのものを蹉跎させるような戦略をこちらが採用し、それに沿った戦術を展開しなければ：：」

「ちょっと待ってくれ」

サリュシオンが、苦笑しつつわたしの話を遮った。

「ぼくは軍事に関しては素人だ。というより、素人以下といっても

いい。戦術だ戦略だと言われても理解できないよ。もっと端的に、あと一ヶ月くらいで終わりそうだとか言って欲しいのだが……」

「正直申し上げまして、見当が付きません。申し訳ありませんが」
わたしはそう答えた。サリュシオンが嘆息する。

「そうか。ぼくの専門は経済だ。君も感じていると思うが、いまレスペラの経済情勢は悪化しつつある。レスペラ自体はもとも豊かな土地だ。農産物は豊富だし、石油も産出する。付近には、鉄鉱石や錫鉱石、銅鉱石の鉱脈もある。もっとも、域外に運び出す方法が空路しかないから、たとえここで精製したとしても、採算はあわないがね。……もちろん、すべての物資を自給できるわけではない。布地、機械部品、乾燥海産物、一部の農具、書籍、その他の豪奢品などは継続的に移入する必要がある。その対価として支払う紙幣を獲得するための唯一の手段が、ワインなど単価の高い生産物を域外へと販売するルートの確保だ。現在のところ、その空路は空賊によって閉ざされている」

サリュシオンがいったん言葉を切り、お茶をすすった。

「義勇軍に労働者を取られているために、労働力の不足も発生している。負傷者が職場を離れていることも痛い。このままの状態が半年も続いたら、国有財産の取り崩しを始めなければならない羽目に陥るだろう。……まあ、君に愚痴っても仕方ないがね」

「リンカンドム王国軍人として、努力します」

「別に君を責めているわけじゃないよ」

ぱたぱたと、やや子供っぽい仕草で、サリュシオンが手を振って否定する。

「ただ……本当に、わがレスペラは危機的状态を迎えつつあるのだ。それだけは、判っていて欲しい」

「はあ」

わたしは気まずい思いでお茶を味わった。

「それと……一番気になるのが、子供たちのことなのだ」

「子供……ですか」

「怯えているんだよ。空賊が来襲するたびに」

サリュシオンが、身を乗り出す。

「もともとレスペラの子供は明るいんだ。小さく平和で安全な地域社会だからね。今度の一件で、子供たちのほぼ全員が、身近な人物が負傷したり亡くなったりしている。親兄弟、親族、近所の住人、友人の親兄弟……。どれほど心に傷を負っていることか」

「ええ。よく判ります」

「頼む、大尉。君と君の部下が精一杯努力しているのは承知しているが、それでもあえて頼む。子供たちのために、空賊を撃退してくれ」

「はい。必ずや、警察軍と協力して空賊を駆逐してごらんにいれます」

サリュシオンの勢いに押され、わたしはなんともおぼつかぬ約束をしてしまった。

「子供想いのマザコンねえ」

サンヌが感想を述べる。

夕食は牛肉のシチューがメインだった。肉も野菜も大きな塊ごと入っているいかにも手作りといった料理で、味の方もなかなかのものだ。

「で、お茶飲んだだけで帰ってきたのかい？」

「あたりまえでしょ。言っときますけど、マザコン男を魅了できるほどの歳じゃないわよ」

言い返したわたしの台詞を聞いて、ティリング少尉がぷつと吹き出す。

「で、そちらの首尾は？」

「問題なしです。きれいなものでしたよ」

ティリングが、答えた。

わたしがこまごました用事をこなしている間に、ティリングとサンヌは『紫の虎』の発動機を予備の物に取り替え、外した方の野外

分解清掃を行ったのだ。五四式発動機はアマツバメ級以外の軍用飛行船にも採用されている優秀な発動機であり、民生用タイプも広く販売されている。しかしやはり機械である以上、定期的な点検と清掃は必須である。本来ならば、整備班の仕事ではあるが、いまだ到着していない以上、自前でやるしかない。

「空賊がたまにしか来ないから、助かってるけどね」

茹で野菜にフォークを伸ばしながら、サンヌ。

わたしはうなずいた。

一般的に機械というものは、その部品の数が多いほどデリケートである。そしてその故障しやすさは、可動部品の数に比例すると言っている。さらに、機械の整備に要する時間は、その機械がより過酷な使われ方をされればされるほど増大する。

戦場における軍用飛行船の発動機は、過酷な使用の見本例と言える。連続しての稼動。燃焼するガソリンの高温。出力の急激な増減。埃や雨滴の付着。さらに、乱暴な扱い。

これを支えるのが、整備班である。幸い、レスペラ側が提供してくれた地上作業員の中に発動機整備を行える者が複数いるから、一般的なメンテナンスは任せることが出来るが、野外分解清掃：：簡単に外せる部品を外して洗浄する作業：：となると、やはり五四式発動機に慣れた者でなければ行えない。そして稼働時間が長ければ長いほど、これら作業の回数も増やさざるを得ない。もし一日二回出撃があったとしたら、三日と持たずに予備の発動機まで動かなくなっただけに、ティリング少尉が過労でぶっ倒れてしまうだろう。さらに、本格的に行われる発動機解体整備と磨耗した可動部品の交換は、ティリングの手には負えない。いずれにせよ、テリアー曹長率いる整備班が近いうちにレスペラ入りしなければ、『紫の虎』は『格納庫の女王』と化すだろう。

「サリュシオンといい仲になったんだって？」

最初一杯が半ばまで減ったあたりで、フィーニアがそう訊いた。

わたしは啞然としてグラスを置いた。

「どこでそんなデマ聞きつけてきたの？」

「王城じゃ、誰でも知ってるわよ。二人っきりで、一時間ばかり過ぎたそうじゃないの」

「十分ばかりお茶を飲んだだけよ」

「やっぱりね」

フィーニアが、笑った。

「どう見ても、サリュシオンの好みじゃないものね、あんたは」

「……うるさい」

わたしは干したグラスをフィーニアに突きつけ、お代わりを要求した。

「で、捕虜にした空賊艇の乗員から、なにか有用な情報は得られたの？」

ブランデーを注ぐフィーニアに、わたしは尋ねた。

「……聞いていないわ。残念だけど」

几帳面に瓶に栓を施しながら、フィーニアが答える。

「警察軍で尋問してるんじゃないの？」

「まさか。捕虜を確保してるのは王室警護隊よ。システイハルナ王女直々の指揮だね。エクスをやつが締め上げているところだって、もっぱらの噂だわ」

そう言ったフィーニアが、急に声を潜めた。

「ねえ。システイハルナはいったい何を企んでいるの？ あんた、だいぶ殿下に気に入られたみたいだから、なにか聞いてるんじゃないの？」

「……聞いていないわ。残念だけど」

わたしは、先程フィーニアが言った台詞をそっくりそのまま彼女に返した。

「結構、ぎくしゃくし始めているのよね。殿下と警察軍の関係が」
胡瓜のピクルスにかぶりつきつつ、フィーニア。

「法制上は、システイハルナには何の権能も与えられてはいないの

よ。操舵手として、自発的に義勇軍に参加している、というだけだね。作戦会議に顔を出すのも、あくまで陛下の非公式な個人的助言役として認められているからに過ぎない。さすがに警察軍の方針に口を出すことはないけれど、様々な面で影響力を及ぼしていることは確かだね。問題は、王室警護隊よ。システイハルナは完全にエクス隊長を飼い馴らしているわ。口さがない警察軍士官の中には、王室警護隊はすでにシステイハルナの私兵と化しているとまで言う者がいるくらいよ」

「……否定はできないわね」

「その王室警護隊が、裏でこそそと動いているのよ。警察軍に何の相談もなしにね」

いまいましげに言ったフィーニアが、指についたピクルスの汁を舌で舐め取る。

「推測だけど、内通者を探してるんじゃないかしら」

わたしは、システイハルナと昼食をとにした時のことを手短かに話した。

「……はつきりとした返事はもらえなかったけど、おそらく殿下も内通者がいると考えているはずだわ。そうしなければ、辻褄が合わないもの」

「ふうん」

フィーニアが、不満げな相槌をうつ。

「……ここだけの話だけど、ぎくしゃくしているのはシステイハルナと警察軍の関係だけじゃないわ」

ややあって、フィーニアが続けた。

「実は、警察軍と陛下のあいだにも、不協和音が生じているのよ」
「……そうなの？」

「今回の空賊騒ぎで、明らかにフザロック陛下の威信は低下したわ。警察軍内部でもね」

「……クーデターでも起きるってんじゃないでしようね」

「まさか。そこまでは行かないわよ」

笑って、フィーニアが否定する。

「でも、対応が後手にまわったことや、システイハルナの越権行為ともとられかねない動きが、警察軍幹部の不満を増幅させていることは確かだね。今度の一件の結果と、中央政府の出方次第では、政変の可能性がないことはないわ」

「それって……フザロック陛下の退位とか？」

「ありえない話じゃないわ」

「じゃあ、継承権一位のシステイハルナが、藩王位につくわけ？」

「まだ若いから、おそらくはヤラム王子が後見役についてね」

「はあ……」

わたしは啞然としてグラスを置いた。あのあどけなささえ残る可愛らしい少女が、藩王とは。まあ、大陸中探せば十代の国王がいないうことはないし、彼女は年齢の割にはしっかりしていると思えるので、務まらないことはないと思うが……。

「ねえ。本当に、そんな事態になると思う？」

「判るわけじゃない。今回の一件、どんな形で決着がつくか見当もつかないし、リンカンドム中央政府がそれに対しどう動くかなんて、予測すらできないもの」

左肩だけをすくめるといふ器用な動作をしながら、フィーニア。

「まあいいや。飲もうよ」

彼女は破顔して、自分のグラスにブランデーをどぼどぼと注いだ。

13 茶話（後書き）

第十三話をお届けします。アクセス数が低空飛行中：：気囊に穴でも開いているのでしょうか（笑） 用語解説 格納庫の女王／故障しやすい、あるいは他の機体に比べて整備に手間がかかるなどの理由で、常に格納庫の奥に鎮座している航空機を揶揄した表現

14 密談

システィハルナの呼び出しがあったのは、翌日の朝食後のことであつた。

かしこまった席ではない、とのことなので、わたしは通常軍装のままて迎えの馬車に乗り込んだ。王城に着くと、ハヴィラン・エクス隊長が出迎えてくれた。案内されるままに歩く途中で、エクスがわたしの耳もとに口を近づけ、一昨日の戦果を小声で誉めてくれた。：：：どうやらこの男、礼や誉め言葉をおおっぴらに口にするのが苦手らしい。

「こちらへ」

エクスが最終的に連れて行ってくれたのは、石造りの急な螺旋階段の下であつた。どうやら、例の無用の長物と化している塔の基部らしい。

「最上部で、殿下がお待ちです」

エクスが告げ、螺旋階段の下で立哨の態勢に入った。わたしはちよつとだけためらってから：：：百段近くあるのではないだろうか：：：右回りの階段を上り始めた。随所に分厚いガラスをはめ込んだ明かり取りが設けられていたものの、そこは薄暗く、埃臭かった。：夜中には絶対に登りたくない階段である。

わたしは、段数を数えるのを五十で諦めた。代わりに足を止め、一息入れる。もちろん一気に登り切るだけの体力はあるが、上で待っているシスティハルナの前に荒い息遣いで現われたくはない。：：ちよつとした、プライドの問題である。

登攀再開から三十段前後登ったところで、戸口が見えた。扉のない、素っ気ない木枠だけのものだ。わたしは最後の一段を残したところで足を止め、内部に声を掛けた。

「殿下、フォリーオです。お招きにより参上いたしました」

「どうぞ、入ってください」

システイハルナの返答が聞こえる。わたしは最終段を踏みしめ、戸口をくぐった。

塔の最上部は、なんと『紫の虎』のゴンドラなみに狭かった。四方には大きな長方形の開口部があり、そこから光が差し込むので戸外とほとんど変わらぬ明るさだ。床は板張りで、天井はなく、円錐形の屋根を支える梁が剥き出しのまま複雑に交差している。四隅には、壁に造り付けの狭い木製ベンチ。

今日のシステイハルナの装いは、簡素な白いドレスだった。スカート丈は足首がはつきりと見える程度。おそらくは、彼女にとっての普段着と言うところだろう。履物は、凝った造りの革のサンダルだ。

「今日はいいいお天気ですけど、明日は雨になりますわよ」

開口部から外を眺めながら、システイハルナが言った。わたしは進み出て、彼女の隣に並んだ。

「明日は雨ですか……」

わたしは内心首を傾げた。一応、飛行船砲手教育課程には気象学の講座もある。いささか雲が多い……雲量三というところか……が、現在の天候は晴れだ。その雲も、白っぽい中層の雲ばかりで、天候の悪化を予感させるようなものではない。

「あそこ、ご覧になって」

システイハルナが指差す先、手前の低い山並みの向こう側には、ひととき目立つ鋭角的な孤立峰があった。慎ましい裸婦像がシートで腰部を隠すような感じで、中腹のあたりに真っ白な雲をまとりつかせている。

「あの山に雲が掛かっているときは、たとえ晴れていても明日は雨になるのです。今の季節だと、一日中降り続くことはありませんね。日暮れまでには、止むでしょう」

「左様ですか」

わたしは気のない返答をした。……天候の話をするために、わざわざ呼び出したのではあるまい。

「ここに初めて登ったひとは、たいいてい景色の見事さを口にするのだけれど……飛行船乗りには珍しくもないわね」

システイハルナが、微笑む。やや寂しげな笑みだ。

「美しいことは確かですが……」

「座りましょうか」

システイハルナが言い、ベンチに腰を下ろした。傍らの背板を叩き、横に座るように勧める。わたしは一礼すると、そこに座った。

「ここは王城の中で唯一安全な場所です。階段の下はハヴィランが固めているし、壁面をよじ登るのも無理。盗み聴きされる心配はありません」

やや声を潜めて、システイハルナ。

……では、内密の相談というわけか。

「ここ三日ばかりのあなたの言動と、昨日の朝のお話を聞いて、あなたは信頼できる人物だと判断しました。単刀直入に申し上げますが、ぜひともレスペラのために、わたくしとともに戦っていただきたい」

「もちろんです、姫様」

「そうではないのです」

システイハルナが、眉根を寄せる。

「いまのあなたのお返事は、リンカンダム王国軍人としての返答でしょう。そうではなく、エルダ・フォリーオ個人として、わたくしに協力していただきたいのです」

……政争にでも巻き込まれるというのか？

わたしの怪訝な表情を見て、システイハルナがふっと小さくため息をついた。妙に色気のある仕草だった。

「最初から詳しくお話しましょう。今回の一件の裏事情を……」

空賊の目的はシステイハルナの殺害にある。そう、彼女は考えていた。

二回目の襲撃は明らかに罠であった。誘いを掛ければ、操舵の腕

に覚えのあるシステイハルナが自ら出撃すると踏んだのだ。僚艇の捨て身の行動でシステイハルナは窮地を脱するが、運が悪ければ山中に屍を晒していたことは間違いない。

市民の動揺を避けるために公表されていないが、その直後にシステイハルナの乗る飛行船に爆薬が仕掛けられたことがあった。予備のガソリン缶を動かすと爆発する仕掛けになっており、空中で起爆すれば乗員全員即死は免れない。幸いこれも、事前に乗員に見えられ、事なきを得た。これ以後、システイハルナはすべての飛行船の警備を強化した。

さらに五日前には、再び空中で罠が仕掛けられた。現われた空賊艇があっさりと遁走、追尾したレスペラ艇の前に新手が出現する。だが、罠であることを予期していたシステイハルナはすぐに離脱し、空賊側の思惑は頓挫した。

「言っておきますが、単なる被害妄想ではありません」

きっぱりと、システイハルナ。

「単にレスペラの航空戦力を潰したいのであれば、連日大量出撃を続けてこちらを消耗させればいいだけのこと。それだけの戦力はあるはずなのにね。にもかかわらず、ちまちまと罠を仕掛けてくる。これはもう、わたくしを暗殺ではない形：：事故死か、戦死として亡き者にしようとしているとしか思えません」

「暗殺ではない形：：」

「自慢ではありませんが、ハヴィラン率いる王室警護隊は優秀です。有能な刺客を送り込めば、わたくしの暗殺は不可能ではないでしょう。しかし、実行犯はまず間違いなく捕らえられます。そうなれば、暗殺を命じた者は確実にあぶり出されるでしょう。誰がわたくしの死を望んでいるかは知りませんが、その正体を絶対に明かしたくはないのでしょね」

「でも、何のために殿下のお命を：：」

「判りませんわ。でも、こう見えても藩王位継承権第一位ですからね。殺すだけの価値はあるのかも知れない」

システイハルナの冷笑は、それはそれでかなり美しかった。

「それって……まさか」

「叔父上や叔母上を疑っているわけではありません。まあ、完全に潔白とは言い切れないけど」

やや寂しげに、システイハルナ。

レスペラの藩王位継承権は、男女問わず直系が優先される。その次に来るのが弟か妹、そしてその直系だ。したがって、第一位は現国王フザロックの娘システイハルナ、第二位が妹のセレスタ、第三位が末の弟のヤラムとなる。第四位はセレスタの息子サリュシオン。第五位と六位が、ヤラムの双子の娘。七位がまだ赤ん坊の息子。直系が優先されるから、将来システイハルナが子をなせば、その子が第二位となる。

「いずれにしても、いまだ空賊から金品の要求はありません。となれば、彼らの目的はこのレスペラそのものなのかも知れない。そう考えると、お父様やわたくしの存在は邪魔でしょう。殺害を狙ってもおかしくはない」

「それはそうですが……」

レスペラ藩王国には乗っ取るだけの価値があるのだろうか。確かに豊かな国である。自給に充分なだけの農産物。鉄鉱石を始めとする鉱物も豊富だ。石油すら出る。しかし、陸路が通じていないためにそれら産物を他の地域へ運び出すことが困難だ。商業的価値は薄い。

独立国家とするか。中央山岳地帯の奥深い場所という隔絶の地ゆえに、リンカンダムがレスペラの独立宣言に対ししたる反応を示さない可能性はある。それならば、乗っ取る価値はあろう。王族を殺害し、あるいはそのうちの誰かと結託し、警察軍を解散させ、市民を屈服させる。

どこかの追放貴族か革命家が自前の国家を求めているのだろうか。そういえば、以前に西方洋の島嶼が犯罪者集団に乗っ取られたことがあった。独立国家を名乗り、各国で手配されている犯罪者を金銭

と引き換えに亡命させるといふ商売を始めたが、結局多国籍で編成された派遣艦隊の前にあっさりと降伏させられた。今回の一件は、その山岳地帯バージョンなのか？

わたしは考え込んだ。いずれにせよ、情報が少なすぎる。

：：：まてよ。情報といえは：：：。

「姫様、一昨日の捕虜からなにか情報は得られていないのですか？」
「捕虜ね」

くすくすと、システィハルナが笑う。

「根っからの軍人なのね。まあ、いいでしょう。尋問によれば、いくつか興味深い情報が得られたわ。三人ともタガレーの元陸軍軍人で、なかでも操舵手は大戦の頃からタガレー陸軍飛行船隊にいたらしいの。お金で雇われているだけの連中ね。空賊を指揮しているのは、ワフ・パトローという名の元タガレー陸軍飛行船隊の中佐。彼らによれば、パトロー元中佐もお金で雇われただけ。指令と資金がどこから出ているかまでは、知らないそうよ」

「タガレーのどこかの軍閥でしょうか？」

「たぶんね」

：：：もしタガレーの軍閥のひとつがレスペラを狙っているとしたら：：：。

窮地に陥った軍閥が、避難先としてレスペラを乗っ取ろうとしているのか。いや、そんな弱小軍閥が何艇も飛行船を運用し、遠くレスペラに攻撃を掛けてくるというのも理屈にあわない話である。あるいはわざとリンカンダム王国とのあいだに紛争を引き起こそうというのだろうか。どこか：：：リンカンダムと国境を接する非友好国の差し金で。ひょっとすると、ヴィーカル連合王国やドングル海沿岸協商諸国の中の一国が裏で糸を引いているのだろうか。平和になったとはいえ、いまだわがリンカンダム王国には敵が多い。

大陸のほぼ中央にある小さな藩王国。このレスペラに、何らかの特殊な利用価値を見出した勢力が、乗っ取りを企んでいるのだろうか。空路で運び出しても儲けの出る産物：：：金や宝石の鉱脈でも見

つかったのであればありえるが、そのような事柄をシステイハルナが隠しているとも思えない。

「ではそろそろ、本題に入りましょうか」

システイハルナが、わずかに居住まいをただし、わたしの眼をまっすぐに見た。

「レスペラ内の内通者はかなり高位の人物だとわたくしは見ています。あなた方がいらした時も、その出発時刻は極秘だったのにもかかわらず、絶好の位置で待ち伏せを受けた。警察軍幹部か、政府の上層部に誰か内通者がいるはずです。どこかに無線電信機を隠し、密かに空賊側と連絡を取り合っているはずですよ」

「では、いったい誰が……」

「容疑者が多すぎます。リストから外しているのは、お父様とハヴイランくらいね。あとの人は……ヤラム叔父様から警察軍の尉官クラスまで全員が怪しいと見なければなりません」

システイハルナが、肩をすくめる。

「そこで相談なのですが……わたくしに協力していただけません？ リンカンダム軍の軍人であり、よそ者であるあなたとその部下ならば、空賊に内通している可能性はない。無条件で、信頼できるでしょう」

「それは……構いませんが」

わたしはちよつとためらった。指揮系統はどうなるのだろうか？

あとあと法的に問題を生じないだろうか？

「で、具体的に何を……」

「例の……捕虜から、空賊の出撃中継地点の位置に関する情報を得ました。そこを、襲撃したいのです」

「もうすでに引き払ったではありませんか？」

内通者が有能ならば、空賊が捕虜になったことはとくに連絡されているはずだ。となれば、もう撤退が始まっているだろう。

「そこを逆手に取るのです。すでに、わたくしを含めた一隊が、明後日出撃中継地点を襲撃するという作戦を立案しました。内通者を

通じて空賊がそれを知れば、罠に掛ける絶好の機会と捉えるはずです。おそらく、空賊はその出撃中継地点に戦力を集中させるでしょう。わたしたちは裏をかいて、明日の夜襲撃するのです」

「夜ですか？」

「出発は日没後に、夜間行動訓練と称して行います。三艇すべてを投入。レスペラから充分離れた地点で、兵士を同乗させます。目標の至近で着陸。徒歩で接近、夜襲を仕掛けます」

「敵情が充分につかめない状況での夜襲は危険です」

「捕虜によれば、通常は地上要員六名がいるのみだそうです。火器は歩兵銃程度。ガソリンと灯油の備蓄がかなりの量。無線電信はなし。うまくいけば、複数の飛行船を地上で破壊できるかも知れません」

「徒歩での接近にも賛成しかねます。下手をすれば、迷ってしまいますわ」

わたしはそう指摘した。事前偵察なしの少人数による夜襲など、正規の精鋭奇襲部隊にとってさえ困難な任務である。

「地理は判っています。案内人もいますから」

システィハルナが、自信ありげに言い放つ。

「実はこの場所は、あの辺りでは珍しく平らな処で、良い水場もあるのでわたくし自身何度か着陸したことがあるのです。空賊のいる場所から死角になる位置に好適な着陸場所がありますし、そこから尾根伝いに歩けば迷う心配ありません」

「……えーと、あと法的な問題が残っています。わたしの所属はあくまで第二連隊にあり……」

「正式な要請があればよろしいのでしょうか？」

システィハルナが、勝ち誇ったような笑みを見せると、懐から折り畳まれた二枚の紙を引っ張り出した。

「こちらが、陛下がハヴィラン宛に出した、本作戦に対する命令書。建前上、彼が指揮官となります。そしてこれが、レスペラ派遣群に対する作戦参加要請書。警察軍は藩王に隷属する組織です。お父様

のサインと国璽があれば、怖いものなしですわ」

「はあ」

いずれにしろ、他に選択の余地はなかった。わたしは参加を確約すると、螺旋階段を下りた。……罨に嵌められたような気がしたが、このまま来襲する空賊を追い払っているだけでは埒があかないのも事実である。賭け事は苦手だが、この作戦はやってみる価値はあるだろう。……たぶん。

15 夜襲

「大漁の予感、ってとこね」

やや湿っている芝草の上に腹ばいになって双眼鏡を覗きながら、わたしはそうつぶやいた。

「大漁？」

傍らのエクス隊長が、訝しげに訊く。

「港町生まれの言い回しよ。気にしないで」

「言いたいことは判る」

システィハルナの天候予測はきわめて正確だった。朝方からしとしと降っていた雨は、午後も半ばには霧雨となり、夕方には日没が拝めるほど回復した。今はすっかり晴れ渡り、満月に近い月が、あたりを照らしている。

月明かりだけでは、集光率の高い軍用双眼鏡を使用しても、空賊の出撃中継地点となっている山間の平地の細部を見極めるのは無理であった。だが、係留してある四艇の飛行船のシルエットは、はっきりと確認できた。

「一艇に四人として、十六人。もとの人員が六人。しめて二十二人次」

「攻撃ルートは見つかったかしら？」

「俺の部下を信用しろ。……そろそろ行こうか」

エクスが身を起こす。わたしも、双眼鏡を丁寧にケースにしまうと、彼のあとに続いた。藪の中を掻き分け、三分ほどで本隊と合流する。

エクスが、偵察結果をシスティハルナに報告する。

「よろしい。では皆さん、襲撃の刻限まで休息とします。ハヴィラン、念のために出撃中継地点とのあいだに警戒線を」

システィハルナが、きびきびと命ずる。いつもの飛行服姿だが、今日は腰の左右に一丁ずつ拳銃を吊っている。

作戦の前半は滞りなく終了していた。三艇ともトラブルなく発進、あらかじめ指定した場所に着陸し、事前に徒歩で密かに集結していたエクス隊長とその部下たちを乗せ、再び舞い上がった。夜間にも関わらず、天測と地文とコンパスを利用した航法も順調で、システイハルナが指示する場所に着陸、無事に係留も終え、そして今事前偵察も成功裏に終わった。

わたしは一本の広葉樹……海育ちなので、山地の植物には詳しくない……の根元に居場所を定めた。サンヌが、傍らに座り込む。

「うまいこと行くなね？」

「たぶんね……って、心配している割に、やる気満々じゃないの」「まあね」

照れたように、サンヌが笑う。彼女はさながら歩く戦列艦だった。王室警護隊の武器庫から借り出した歩兵銃と銃剣、航空軍団の官給拳銃、愛用のナイフ。加えてゴンドラ内備品の手斧まで腰に挿している。

夜襲に参加するのは、システイハルナ、エクス隊長とその子飼いの部下八名、古めかしい鳥撃ち銃を持参したりリュレア、それにわたしとサンヌの合計十二名。ティリング少尉とレスペラ艇の乗員二名は、飛行船の係留場所待機する手筈だ。

わたしは歩兵銃を点検した。原理的には、旋回銃も歩兵銃も構造は同一である。弾薬筒を薬室に入れて閉鎖し、雷管キャップを点火口に填めて撃鉄を起こし、引き金を引く。撃鉄が雷管キャップを叩き、発火させる。次弾を放つには、薬室を開き、新たな弾薬筒を挿入して閉鎖、撃発した雷管キャップを新しいものに取り替えてから撃鉄を起こす、といった一連の作業が必要となる。

航空軍団の制式兵器にも、当然歩兵銃は採用されている。飛行船搭乗員も訓練は受けているし、わたしも射撃は上手い方だ。細部まで点検し満足したわたしは、少しでも休息を取ろうとくつろいだ姿勢になった。

『夜襲は戦術的奇襲の一形態に過ぎない』……士官学校で学んだ教科書には、確かそう書いてあった。

わたしとサンヌに与えられた任務は、飛行船の確保であった。エクス率いる本隊が、出撃中継地点の東の端にあるテント群を制圧、システイハルナとリュレア、それに兵士一名からなる援護部隊が、絶好の狙撃位置である崖の上で待機。その間、わたしとサンヌは係留場へと走り、飛行船に空賊を近づけないようにする。旋回砲は、対人用としては不向きである……発射速度が遅く、威力がありすぎる……が、抑えておくに越したことはない。

「行けっ」

エクスの号令で、兵士たちが走り出す。わたしとサンヌも、着剣した歩兵銃を手に走り出した。係留場に見張りはいない……はずだった。

「おい、何してる！」

走り寄るわたしたちに向け、誰何すいかの声が掛かった。一艇のゴンドラの中からだ。そこで寝ていたのか、あるいは見張りだったのか。わたしたちの背後から、ぱんぱんと小火器の発砲音が聞こえる。

エクスたちが発砲しているのだ。暗闇に慣れていた眼に辛うじて見えていた人影が、ずっとゴンドラの中に引っ込んだ。わたしとサンヌはほぼ同時に立ち止まり、歩兵銃を構えた。相次いで発砲する。

ゴンドラはいわば籐製の巨大な編み籠である。防弾性能など、まったく言っていないほど備えていない。

男の悲鳴。

わたしとサンヌは手早く次弾を装填した。周囲に気を配りながら、ゴンドラに接近する。気配は、ない。

わたしはサンヌに援護するように合図すると、歩兵銃を顔の前に構えて内部をひよいと覗き込んだ。空賊は、ゴンドラの床に突っ伏していた。銃剣の先で、突いてみる。……絶命しているようだ。

「そっちを願ひ」

空賊が死んだことを身振りで伝えたわたしは、サンヌにテント群

の方角を警戒するように命じた。エクスらが捉え損ねた空賊がいれば、こちらへと逃げてくる可能性が高い。

わたしは歩兵銃を構えなおすと、飛行船を一艇ずつチェックした。まだどこかに空賊が隠れているかもしれない。

前方に、気配。

わたしは足を止めた。歩兵銃を構え、慎重に闇の中を透かし見ようとする。

と、突然その闇の中から人が躍り出てきた。わたしは慌てて引き金を引いた。

命中の手ごたえはあった。だが、人影はわたしに向かい突進してきた。……大男だった。手には、刃渡りの長い曲刀が握られている。わたしは大声でサンヌを呼ばわった。斬りつけてくる男の右手を注視し、銃剣をその手首めがけて叩きつける。狙いはわずかに逸れ、銃剣は曲刀の刀身を叩いた。男の手から、刃物が弾き飛ばされる。

だが、男の突進までは止めることが出来なかった。

男の巨体が、わたしの身体に接触する。すさまじい衝撃だった。

さしずめ、全速力で走りながら壁にぶち当たったかのような。

足が二本とも中に浮いた。次の瞬間、背中に衝撃が来た。地面に押し倒されたのだ。次いで、男の身体がわたしの上にのしかかってきた。……肋骨が一本残らず折れたのではないか、というくらいの衝撃が、わたしの上半身を襲った。

ろくに息もできぬまま、わたしはもがいた。歩兵銃はどこかに飛ばされていた。

訓練された歩兵ならば、ここで冷静に腰に帯びた拳銃を抜くのであろう。だが、わたしが近接格闘の訓練を受けたのは遠い昔のことであり、おまけにその成績はお世辞にも良好とはいえないものだ。半ばパニックに陥っていたわたしは、ただ闇雲に男の身体の下から抜け出そうと暴れた。

「大尉！」

「こっち！」

サンヌの声に、わたしは悲鳴にも似た声で応えた。

「退きやがれ、このでかぶつ！」

サンヌの声が、すぐ間近で聞こえる。

「早く！ 撃って！」

わたしはなおもがいた。努力の甲斐あって、上半身が少しだけ自由になる。

「大尉？」

やけに冷静な質問口調で、サンヌが訊く。

「早く！ 撃ちなさい！」

「なにを撃ちゃいいんだい、大尉？」

さらに冷静な口調で、サンヌ。

わたしもそこではっと気付いた。……大男が、一向にわたしを攻撃してこないことに。

「……死んでるの、こいつ？」

「おそろくね。ぴくりとも動いてないよ」

わたしは、サンヌの手を借りて男の身体の下から這い出した。男は絶命していた。……わたしが放った銃弾が、運良く急所に命中したのだろう。おそらくその時点で即死していたに違いない。あとは惰性でわたしにぶつかり、押し倒したのだ。

「怪我は？」

「ない、と思う。たぶん」

「少尉には、黙っというてやるよ」

闇の中でも、サンヌが爆笑寸前である気配は、充分に伝わってきた。

「ありがとう」

……またひとつ、サンヌに弱みを握られてしまった。

戦闘は、いともあっけなく終わった。エクスの下下は精鋭であり、容赦がなかった。抵抗の気配を見せた空賊は、たとえ丸腰であっても射殺された。捕虜になったのは、無抵抗を貫いた三名だけであっ

た。こちらに出た負傷者は僅かに二名。……うち一人は言うまでもなく、軽い打撲傷を負ったわたしである。もう一人は、空賊が盲射した一弾に上腕を撃ち抜かれていた。出血はひどかったが、骨は逸れていたし、命に別状もない。

わたしたちはいくつもの篝火^{かがりび}を焚くと、戦利品を集め始めた。書類の類、発動機部品、旋回砲の弾薬の一部などが、分捕ることを決めた飛行船の中に運び込まれる。本当ならばすべての飛行船を鹵獲したいところだが、レスペラまで飛行させるだけの乗員がいなかったし、仮に移動させたとしても、操舵手自体が不足しているのだから戦力にはならない。残る武器は、すべて貯えられているガソリン缶のところに運ばれた。

わたしとサンヌ、システィハルナは、残る空賊艇三艇の旋回砲と発動機をすべて外した。連絡を受けて待機場所から飛来した『紫の虎』とレスペラ艇に、それらを積み込む。

捕虜を乗せるだけの余裕がなかったので、簡単に尋問し、捕虜宣誓の真似事をさせた上で、備蓄してあった食糧を持てるだけ持たせて解放した。水は得られるし、いずれ仲間が来て救出されるだろう。帰還の準備を終えたわれわれの四艇は、離陸した。充分に離れたところで、乱雑に並べたガソリン缶めがけて、リュレアが旋回砲を放つ。

すべてが燃え上がった。オレンジ色の火柱を置き土産に、われわれはレスペラへの帰途についた。

15 夜襲（後書き）

用語解説 捕虜宣誓／戦時捕虜に対し、解放する代償として一定期間軍務に復帰しないなどの条件を誓わせること、ないしはその宣言。

16 暗号

『正義は必ず勝つ。なぜなら、敗者に正義を名乗る資格は与えられないから』

：どこかで読んだそんな皮肉な警句を、わたしは思い起こしていた。

今回の秘密出撃に関し、指揮系統を無視し除け者にされた警察軍側は当然反発を見せたが、大戦果とフザロックの出した命令書の前には沈黙するしかなかった。：藩王に事実上の全権が集中している小国ならではである。もし同様の作戦がリンカンドムで行われたとすれば、最低でも二人くらいの大臣の首が飛ぶはめになるだろう。下手をすれば、野党による国王弾劾動議や内閣総辞職の上解散総選挙、という事態にもなりかねない。

フィーニアにもかなり怒られた。なにしろ、連絡将校としての面子を潰されたのだから。だがこちらも、高級ブランデー一本でなんとか収めてもらった。造り酒屋の親父に領収書はきっちり書いてもらったから、いずれ連隊の主計士官にねじ込んで経費で落としてもらうつもりだが。

わたしとティリング少尉、それにサンヌの三人は、ちょっとしたご褒美として、システイハルナに昼食に招かれていた。三人とも、今日は第一種礼装を着用に及んでいる。

食堂は前回と同じ小食堂であり、メニューも、前回とたいして変わりなかった。ただし主菜は鶏で、すばらしく美味なパテと一緒に出てきた。

ティリング少尉はかわいそうなくらい緊張していたし、さすがのサンヌもかなり固くなっていたが、柔らかな口調で積極的に話し掛けてくれたシステイハルナのおかげで、ふたりともデザートが出るころにはかなりリラックスしていた。サンヌは彼女のストックの中ではかなり上品な方のジョークをふたつばかり披露してシステイハ

ルナを笑わせたし、テイリング少尉もシステイハルナの巧みな話術に乗せられ、かなりおしゃべりな女性へと変貌を遂げていた。おかげでわたしは、少尉が実はこっそりと詩を書き溜めていることを知った。：：あとでサンヌにからかわれなければいいが。

デザートに、わたしは前回食べ損ねたパイを頼んだ。システイハルナは果物。すっかり王女のファンになったらしいテイリングも、果物を選んだ。サンヌの選択はケーキ。お茶と冷えたレモン水が注がれ、わたしたちはゆっくりと味わい始めた。

パイは想像通りの美味さだった。焼けた生地と堅果の香ばしさと、フルーツの香り。使われている砂糖は控えめで、ベリー類や乾燥果実の甘味を活かしている。

頃合を見て、わたしはシステイハルナに質問を放った。

「殿下。これからどうされるおつもりですか？」

「：：正直、判りませんわね」

レモン水を一口すすってから、システイハルナ。

「空賊に大打撃を与えたことは確かです。でもそれは、戦術的勝利にしか過ぎない。相手の戦略目的が明確でない以上、その戦略を挫くのは難しいですわ」

「では、もうひとつ戦術的勝利を挙げるといえるのはいかがでしょう？」

「方策があるのですか？」

「内通者を炙り出すことは可能だと思います」

わたしの一言に、システイハルナがフォークを置いた。灰色の瞳が、わたしを見つめる。

「聞きましょう」

「まずは、彼女を天才に仕立て上げます」

わたしは、傍らでおとなしく会話に耳を傾けていたテイリング少尉の肩をぽんと叩いた。突然のことに、少尉が驚いてわたしをまじまじと見る。ぷっと、サンヌが吹き出したが、わたしは構わずに続けた。

「幸い、彼女については警察軍幹部を含め、詳細を知るものはいません。そこで、彼女に経歴の詐称その他を行わせませう」

「……よく判りませんが」

「殿下、空賊出撃中継地点より昨夜押収した書類から、なにかめばしい情報は得られましたか？」

「いいえ。個人的な覚書、整備や補給の記録、消耗品の目録程度ですね。空賊の黒幕を示唆するようなものは皆無だという報告を受けました」

「やはりそうですか。では、その中に実は暗号で書かれた書類があったという噂をリークしていただきたいのです」

「暗号……」

ぽかんとした表情が、消えかけた蝋燭にふっと息を吹きかけた時のように、ぱっと輝く。

「なるほど！ ティリング少尉を、暗号解読の天才に仕立て上げようというのですね！」

「左様です、殿下」

わたしの作戦はこうだ。まず、空賊の出撃中継地点から押収した書類の中に暗号で書かれた物があるという噂を流す。次いで、どうやら暗号の中に空賊側の組織内容を詳細に記したものが含まれていること、これを解読すれば、レスペラにいる内通者の正体が判る可能性が高いこと、だが警察軍は解読に失敗したことをほのめかす。

そこでティリング少尉の出番である。航空軍団士官学校を首席（嘘である）で卒業し、リンカダム王国陸軍情報部に出向し（これも嘘である）、そこで暗号解読の権威であるバリエント大佐（架空の人物。ちなみに、バリエントというのはサンヌの最初の夫の姓である）に師事したこともある（むろん、架空の人物に教えを乞うことなどではしない）天才暗号解読者（当然嘘である）、ミラーユ・ティリング少尉が、フザロック藩王直々の要請を受けて（もちろんこれも嘘だ）、暗号解読に乗り出したとリークするのである。

内通者はおそらく、空賊側の現状に関し詳しい情報は得ていない。

無線電信はあくまで指令の伝達と報告に使われているだけだろうし、空賊のテントにどんな書類があるかなどの細かいことは教えられてはいないはずだ。だから、暗号書類の押収という嘘は信憑性があるとなれば、これら一連の噂を流すことにより、内通者は保身のためになんらかの行動に出るはずだ。暗号の解読阻止か、逃亡か、あるいは証拠の隠滅か。

監視を強化すれば、彼ら：あるいは彼女らが、網に掛かる可能性は高い。内通者が慎重を期して空賊側に暗号書類の有無を確かめる無線電信を送れば、罫を見破ってしまう可能性もあるが：：そのくらいのリスクは仕方ないだろう。

「いい案です、大尉」

システィハルナが、笑顔でわたしの手を取った。

「さっそく取り掛かりましょう。よろしいですね、ティリング殿」

王女に握手を求められたティリングが、頬を染めて手を握り返す。

「はい、殿下。光栄であります」

「：：まったく。めんどくさいねえ」

生肉を吟味しながら、サンヌがこぼす。

レスペラで唯一の常設市場は閑散としていた。夕食前の買い物にはいささか早い時間だし、もともとそれほど込み合う市場でもない。規模も小さく、まともな商売をしているのは細長い広場の両側に並んだ十数軒の露天くらいだ。広場の隅や近くの路地には石畳に敷物を広げただけの店もいくつかあったが、たいていは暇を持て余している老人が片手間に商売しているだけで、売り物も出来の悪い泥つき野菜、自家製の乾物やジャム、庭先で摘んできたような安っぽい花束、それに中古の食器や古本程度であり、店主は売ることよりも隣のおしゃべりや昼寝の方に力を注いでいるようだった。都市部の市場にありがちな、殺気立ったような雰囲気とは無縁の、広場そのものが気だるげに日向ぼっこしているような、なんとものかな市場である。わたしは、故郷の魚市場を思い起こした。『戦場』と

まで形容されるくらいの、活気溢れる……溢れすぎて、半年に一回は喧嘩で死人が出るという……市場を。

「じゃあ、この肉をこれで買えるだけ」

サンヌが、紙幣を差し出す。恰幅のいい店主は、重さを量りもせず豚肉の塊に熊でも殺せそうなかいかい包丁を入れた。たつぷりとおまけしたと言いい添えながら、赤身の肉を蓋付き皿に入れてくれる。

「これがメインディッシュね。何を作ってくれるの？」

「カツレツでもしようかと思ってね」

歩み出しながら、サンヌ。

『テイリング少尉暗号解読作戦』開始以来、わたしたちは自炊を始めていた。むろん、食事に毒を盛られるのを警戒してのことだ。システイハルナの読み通り警察軍幹部や政府官僚に内通者がいれば、近所の主婦が作るわたしたちの食事になにかを混入することなどた易い。なにしろ、鍵はテイリング少尉が握っているのだ。殺害してしまえば、問題は解決する。

システイハルナの握手に舞い上がって、自分が暗号解読の天才を演じることを快諾したテイリングだったが、食事を終えて王城を辞するころには、もうその役どころの危険性に気付いていた。あとでさんざん嫌味を言われたが、わたしは聞き流した。サンヌではいささか役不足だし、わたしの詳しい経歴は連隊が提供した資料を通じて警察軍に知られている。ここはやはり、ミラーユ・テイリング少尉に主役を張ってもらうしかなかった。

「よし。帰ろうか」

最後に安物のワインを一瓶買って、わたしたちは帰路についた。

「尾行はいないでしょうね？」

「ああ。いないよ」

わたしの問いに、サンヌが応える。

テイリングが狙われる可能性がある以上、その上官たるわたしも狙われる可能性があると考え、最近わたしはひとりで出歩くことをやめた。たいていはサンヌと一緒に……これほど頼もしい相棒はい

ない……、彼女の都合が悪い時には義勇軍の兵士に同道を頼んでいる。いまのところ、狙われているような気配はないが、用心に越したことはない。むろんわたしもサンヌも、拳銃で武装している。雷管キャップも詰められており、撃鉄さえ起こせばすぐに発射できる状況だ。

その音が聞こえたのは、宿舎まであと二分ほどのところだった。遠くで臼砲弾が炸裂したような、ぼんというくぐもった音。

「宿舎だ！」

耳も鋭いサンヌが、叫ぶ。

わたしたちは買い込んだばかりの荷物を放り出すと、街路を走り出した。宿舎に通じる路地に駆け込んだあたりで、わたしは拳銃を抜いた。さすがに、足は長い分だけわたしのほうが速い。宿舎の門にたどり着いたときには、わたしはサンヌに十数歩先行していた。

門には誰もいなかった。本来ならば、義勇軍兵士が警備についているはずなのだが。

わたしは拳銃を構えたまま、門の中を覗き込んだ。一階の、台所の窓が派手に割れ、そこから薄い煙がたなびいていた。先程の爆発音は、どうやらここでしたらしい。

「援護して！」

いつの間にか追いついていたサンヌが、そう言い置いて門をくぐる。わたしは慌てて拳銃を構えなおした。

テイリングを天才に仕立て上げてから、宿舎の警備は大幅に増員されていた。門と玄関、それに裏口と離れに義勇兵が一人ずつ、二階にあるテイリングの部屋の隣にエクス隊長の部下が二人。むろん、テイリング自身も常時武装している。

「大尉」

宿舎の外壁にへばりついたサンヌが、拳銃で庭の一角を指し示した。

義勇軍の少年が仰向けに倒れていた。……切り裂かれた喉からあふれ出たおびただしい血液が、栄養不良の芝草を赤茶色に染め上げ

ている。わたしはそちらをなるべく見ないようにしながら、玄関脇へと走り寄った。サンヌが援護できる位置に移動したことを確認してから、内部に声を掛ける。

「少尉！」

ばしん。

返答は、一発の銃弾だった。扉をやすやすと貫き、細かな木片を散らす。

……まずい。

待っていれば、いずれ警察軍か王室警護隊が駆けつけてくれるだろう。しかし、その前にテイリングが殺されてしまったはどうしようもない。わたしは覚悟を決めた。

「飛び込むわよ。右側をお願い」

「短い人生だったねえ」

サンヌが冗談めかして応じる。

わたしは指でカウントした。三から始め、一本ずつ指を折ってゆく。握りこぶしを作ったと同時に、サンヌが飛び出した。わたしも一瞬送れて、続く。

わたしは拳銃を突き出して、玄関ホールの左側を素早く眼で探った。人の姿は、ない。

「右、障害なし！」

サンヌが叫ぶ。

くぐもった銃声。音源は、二階だ。

二階にはテイリングがいるはずである。わたしは瞬時迷ったが、思い切って階段へと突進した。一階で誰かが待ち伏せしている可能性もあるが、一部屋ずつ掃討している暇はない。

わたしは無事に階段の下にたどりついた。拳銃を突き出しつつ、階段の上に視線を走らせる。人影はなかった。だが、生じる物音から複数の者が二階にいることは予測できた。

「一気に行くよ！」

わたしは階段を駆け上がった。サンヌが、どたどたと続く。

階段を上り切る前、あと四段ほど残したところで、わたしは身体を前に投げ出した。わきの下から上だけを廊下に突き出す。誰もいない。

サンヌが、わたしの身体を飛び越えるようにして前に出た。壁に張り付き、拳銃を構える。

「テイリング！ 少尉！」

わたしは呼ばわった。

「二人！ 警察軍の制服！」

テイリングの声が、奥の方から響く。良かった。まだ生きている。いきなり、誰も使っていないはずの部屋の扉が開いた。そこから、人が飛び出す。わたしは反射的に引き金を引いた。

銃弾は、その胴体に正確に命中した。だが、その人物は敵ではなかった。灰色の、王室警護隊の制服をまとった若い男だった。……警護に派遣された者の一人だ。

……嵌められた。

古典的な罠だった。死体をさも生きているかのように廊下に投げ出し、こちらに無駄弾を撃たせ、装填中に狙い撃ちする。

わたしは慌てて装弾を始めた。戸口からは、すでに拳銃を握った腕と顔が突き出されていた。浅黒い容貌の、まだ若い男だ。その眼に、驚きの色が浮かんでいた。

そう。彼の罠は失敗だった。サンヌは引っ掛からなかったのだ。

サンヌが引き金を引いた。放たれた銃弾は、男の顔面にめり込んだ。男が、廊下によるめき出て倒れる。振動で、床板が震えた。テイリングの言った通り、警察軍の制服をまとっている。

「一人倒したわ。テイリング、大丈夫？」

装弾を終えたわたしは、呼ばわった。

「正面の部屋にもう一人いるはずです」

テイリングの声。ややかすれているのは、緊張のためか、あるいは恐怖か。

わたしはサンヌが装弾し終わるのを待ってから、そろそろと前進

した。サンヌは、抜け目なく射殺した男の拳銃を拾った。

「出てきなさい。もう、逃げられないわよ」

敵が潜んでいるとおぼしき部屋の前で、わたしはそう呼びかけた。返答の代わりに、銃声が聞こえた。銃弾は向かい側のテイリングの部屋に飛び込む。なにか金属に当たったのか、ぎんといういやな音がした。

わたしはサンヌに合図した。敵の武器が一丁だけならば、捕虜にするチャンスである。

わたしとサンヌは同時に戸口から銃口を突き入れた。警察軍の制服をまとった男は、装弾の真っ最中だった。

「捨てなさい！」

室内に踏み込みながら、わたしは叫んだ。だが、男は装弾を止めなかった。必死の形相で、作業を続けている。薬室が閉じられ、雷管キヤップが詰め込まれた。

もはや止める手立てはひとつしかなかった。わたしは右胸の上部あたりを狙って撃った。わたしは歩兵銃の射撃には自信があるが、拳銃の腕は人並みである。右肘を撃ち抜くなどという芸当は不可能だ。殺さずに利き腕を封じるには、そのあたりを狙うしかない。

狙いはわずかに逸れて、男の右脇の下あたりを貫通した。だが、男は発射準備を止めなかった。拳銃を左手に持ち替え、歯を使って撃鉄を起こそうとする。

サンヌの拳銃が二挺とも火を噴いた。二発の弾丸は、同時に男の胸を貫いた。

「派手にやったものね」

フィーニアが、呆れて首を振った。

宿舎は惨憺たる状況だった。死体は運び出されたが、壁や床にべっとりと付着した血液はそのままであり、乾き始めたいまでも鮮烈な臭いを放っている。三人がまとめて爆死させられた台所は、見るも無残なありさまだ。床には割れたガラスや食器、木片等が散乱し、

壁や天井には擲弾の破片が幾つも食い込んでいる。

「俺の部下がいたにもかかわらずこんなことになって、済まん」
例によって小声で、エクス隊長が謝る。

「いえ、お礼を言うべきはこちらです。彼らがいなかったら、ティリング少尉は生きてはいなかったでしょう」

襲撃の様子は、すでにティリングの口から推測交じりで語られていた。警察軍の制服を着た二人の暗殺者は、堂々と正面から乗り込んで、立哨していた義勇軍の少年を殺害、その後屋内に侵入して離れの外にいた義勇軍兵士を射殺、ほぼ同時に台所に擲弾を投げ込んで、二人の義勇軍兵士と王室警護隊員一人を爆殺した。

二階にいたティリングと残る王室警護隊員は階段を上がってきた暗殺者と撃ち合いとなる。しかし装弾の隙を衝かれて王室警護隊員が死亡。自室にティリングが立てこもったところで、わたしとサンヌが駆けつけたというわけだ。

「それで、捕虜にした暗殺者は？」
フィーニアが、訊く。

「二階へ」

わたしは、エクスとフィーニアに階段を上らせた。廊下のあちこちにある血溜まりを避けながら歩む。部屋の前に立哨していたサンヌが、重々しくうなずいてから弾痕のある扉を開けた。

捕虜は、手足を縛られることもなく椅子に腰掛けていた。その背後のティリング少尉も、厳しい表情ではあったがまったく警戒の色も見せずに突っ立っている。

「これが捕虜？」

どう見ても死んでいる男を前に、フィーニアが小首を傾げる。エクスも、眉を吊り上げた。

「エクス隊長。システイハルナ王女殿下と相談して、こいつが生きていることにして欲しいの」

わたしは提案した。

「どう考えても、こいつらは下っ端よ。内通者じゃないわ。でも、

生きて捕まえて尋問中だと発表すれば、こいつらを送り出した親玉は多少は慌てるはずよ」

「なるほど。それはいい考えた。さっそく、ここに人員を送り込もう。いや、王城に連行したほうがもっともらしいな。負傷しているということにして、医者付き添わせて運び出そう。手配してくる」にやりと笑ったエクスが、きびすを返す。

「ねえ、どういうことなの？」

フィーニアが、わたしにずいと詰め寄った。

「まあ、システィハルナ王女殿下の要請で、例によっていろいろと複雑なことをやってるのよ」

わたしは曖昧な返答をした。システィハルナの推理によれば、警察軍の士官の中に内通者がいる可能性は高い。そして、そのリストの中には、フィーニア・クロイ少佐も一応は含まれているのだ。そういうわけで、彼女には『テイリング少尉暗号解読作戦』の詳細は知らせていない。

「警察軍の連絡将校たるわたしにも言えないことをやってるわけ？」

「そういうことになるわね」

「まあ：：仕方ないわね」

フィーニアが、ため息をついた。

「状況から考えれば、警察軍内部に裏切り者がいると考えざるを得ないものね」

「ごめんね」

わたしは本心から謝った。フィーニアが、寂しげに微笑む。

「じゃあ、わたしも裏切り者リストに入っているのね？」

「：：まあね。盲人の国で絵画が盗まれたら、盲人以外のすべての人が疑われるものよ」

「ところで、テイリング少尉。例の暗号解読は進んでるの？」

フィーニアが、訊いた。問われたテイリングが、一瞬ためらいを見せる。

「ええ、まあ、順調ですが」

「そう。がんばってね」

フィーニアが、テイリングの肩を激励するかのようにぽんと叩く。浮かべた微笑みは、なぜだかぎこちなかった。

17 脱出

「お久しぶりです、フォリーオ大尉」

現われたのは、フレンス・オウラだった。大きな肩掛け鞆を下げている。

「何の御用でしょう」

わたしは事務的に応じた。

「やだなあ。怖い顔しないで下さい。ティリング少尉のお手伝いができないかと思って、訪ねて来ただけですから」

へらへらとした笑いを浮かべながら、オウラ。

ティリングに対する襲撃から、ほぼ丸一日経過していた。わたしたちは新しい宿舎……整備班の下士官用に借り上げられた家……に移り、警備もさらに強化されている。

『死亡した暗殺者生存偽装作戦』のお膳立ては驚くほどうまくいった。医師に付き添われ、担架で王城に担ぎこまれた『捕虜』は、無事に弾丸摘出手術を受け、今朝からさっそく尋問を受けている……という噂が、すでにレスペラ全土に広まっている。ただし、今のところ内通者が浮き足立って動いている気配はない。

ちなみに、暗殺者二人の身元は、あっさりと判明した。二人とも、レスペラ東部の新たな村の住人だった。入植したのは、いずれも一年ばかり前のことだ。おそらくは、最初から内通者の手足となるべく送り込まれた者だろう。

「部外者の、しかも民間人のお手伝いなど結構です」

わたしはオウラの暗号解読への助力を断った。

「それでも翻訳者ですからね。それに数学の素養もある。ヴォーデ大学文学博士にして、数学士なんですよ、わたしは」

「結構です」

「仕方ありませんね。それじゃ、これをティリング少尉に渡してくれませんか」

オウラが、懷を探る。取り出したのは、撃鉄を起こした拳銃だった。

「お静かに。ティリング少尉の所へ参りましょう」

小声で、オウラ。

銃口は、わたしの腹にぴったりとくつつけられている。引き金は、すでにわずかだが絞られていた。：：下手に抵抗すれば、命がない。わたしはおとなしく従う事にした。ティリングには悪いが、少なくともオウラが殺そうと思っている人物はわたしではあるまい。

「えーと、オウラさんと二階へあがります。一階の警備は、任せましたよ」

わたしは、オウラを刺激しないようにゆっくりとした口調で、王室警護隊の警備責任者に声を掛けた。警備責任者は明らかに不信感を覚えたようだったが、二階への階段を上るわたしとオウラを止めはしなかった。

「まさかとは思うけど、あなたが内通者なの？」

階段を上りながら、わたしはそう訊いてみた。銃口は、今度はわたしの背中に押し付けられている。

「まあ、そういうことだね」

：：：おかしい。

わたしはそう感じていた。オウラは藩王国政府関係者とはいえ、あくまで囑託である。警察軍の動きに関する詳しい情報など、そう簡単には手に入れられないだろう。とすると、彼もまた、昨日の暗殺者同様、下っ端ということか。

ティリングの部屋の前には、王室警護隊員二人が立哨していた。オウラが、わたしに拳銃を突きつけているところを見せつける。

「騒ぐな。抵抗すると、大尉が死ぬぞ」

慌てて拳銃を抜こうとした王室警護隊員の手が、止まる。

「彼の言う通りにして」

オウラがわたしを撃てば、当然警備の者によって射殺される。し

かし、わたしの命もないだろう。いずれにせよ、彼はひとりである。時間を稼げば、いずれ取り押さえるチャンスが訪れるに違いない。焦る必要はなかった。

「全員、部屋に入れ」

オウラが命じた。王室警護隊員が、しぶしぶ扉を開け、部屋に入る。わたしに拳銃を突きつけたまま、オウラが視線で警護隊員を制しつつ、慎重に入室した。

「なにがあつたんです？」

驚きに眼を見開いたティリングが、問う。

異変を察知したサンヌは、いち早く拳銃を抜いていた。だが、人質にとられているわたしを見て、銃口を下げる。

「全員、おとなしくしている。この鞆の中には、擲弾が七発詰まっている。これを見る」

オウラが、左手で鞆の中から掌にすっぽりと収まってしまう程度の奇妙な道具を引っ張り出した。太く黒い線が尻尾のようにくっついており、それは鞆の中へと続いていた。

「これは発条仕掛けで、雷管キャップを叩けるように作ってある。

この線は、導爆薬線だ。すべての擲弾に繋がっている。つまりだ」

その奇妙な道具を、オウラが掌に軽く握り込んだ。

「これ以後、俺が掌を開いたら、発条が作動して雷管キャップを叩き、すべての擲弾が起爆する。この部屋にいるものは、全員死亡するというわけだ。だから、抵抗するな。銃や刃物を持っている者は、今すぐ捨てろ」

真っ先に、サンヌが手にしていた拳銃を床に置いた。ちよつとためらってから、ティリングも倣う。わたしの強い視線を受けて、二人の王室警護隊員も、拳銃を置いた。

「ねえ、ひょっとして、『レンゼルブ夫人』を爆破したり、システihalナ王女の飛行船に爆薬を仕掛けたりしたのも、あなた？」

ふと思いついたわたしは、訊いてみた。

「そうだ。数学士というのは嘘だね。実は、理学士だ。大学で学ん

だのは、言語学と化学なんだ」

微笑んで、オウラ。

「警護隊と軍曹は、隅に寄れ」

オウラが命ずる。三人が退いたのを確認してから、彼はわたしも隅へと押しやった。：：：擲弾の詰まった鞆を持っている以上、手の届くところに人質を置いておく必要がなくなったのだ。拳銃の銃口は、今度はティリングに向けられた。

「さて、少尉。例の暗号の原本と写し、いままでに得られた解読結果、その他それに関するメモの類を洗いざらい出してもらおうか」

「えーと、それなんですけど：：：」

ティリングが、答えに窮する。わたしは口だけで割り込んだ。

「悪いけど、暗号うんぬんの話は、すべてでっち上げだったの」

「：：：なんだと？」

「内通者を炙り出すための罠よ。押収した書類に暗号は使われていなかったし、もちろん内通者の存在を指し示すようなものもなかったわ」

「それにまんまと引っかったというわけか、俺は！」

オウラが、ひずんだ笑みを見せる。

「昨日大事な部下を二人とも死なせてしまい、意を決して自ら乗り込んでみれば、結局嘘に踊らされていただけとはな。：：：システイハルナの策謀か？」

「そうよ」

わたしはそう答えた。自分のアイデアだと言えばオウラに何をされるか判らないと危惧しての偽りだ。：：：これくらいの嘘、システイハルナは許してくれるだろう。

「まあいい。どうせレスペラでの俺の仕事は終わりだ。いずれにせよ、あんたを殺すのと、脱出することが目的だったからな」

オウラが、銃口をティリングに向かって振りたてる。

「待って。暗号がでっち上げだとわかった以上、彼女を殺す意味合いはないわ」

「判ってるさ。無駄な殺しはしない主義でね。代わりと言ってはなんだが、脱出を手伝ってもらおう」

「脱出？」

「飛行船で逃げるのさ。大尉は、その警護隊員を縛り上げる。少尉、あんたは軍曹を縛れ。それが済んだら、大尉を縛るんだ」

「ち、ちよっと待って。あなた、飛行船を扱えるの？」

わたしは慌てて訊いた。

「いいや。彼女が操舵するんだ」

オウラが、銃口でティリングを指した。

「素人だね。一人じゃ、飛行船は動かないよ」

サンヌが、口を挟んだ。

「……操舵にひとり。ボイラー係りがひとり。最低でも、二人は必要だ」

「逃げるってことは、遠くまで行くんでしょ」

わたしも言っちゃった。

「……だったら、航法にもひとり必要だわ。あなたが大学で天測や地文航法について学んだのなら、別ですけどね。中央山岳地帯でロスト・ポジションに陥ったら、命がないわよ」

オウラが、しばし沈黙した。

「いいだろう。大尉と軍曹、警護隊員を縛ったら一緒に来い。ただし、鞆の中身のことを忘れるなよ」

警備責任者は、あきらかに異変に気付いていたが、わたしは目顔で介入しないように命じた。擲弾の話ははったりではあるまい。今までの言動からすれば、オウラはかなり用意周到な人物である。彼がその気になれば、みんな命はない。

係留塔に陣取る『紫の虎』は、空賊襲撃に備えてすでに離陸準備を整えていた。わたしはわざと離陸前点検に時間をかけ、オウラの間隙を覗いたが、制圧するチャンスは訪れなかった。彼があの道具を手放すまえに導爆薬線を引きちぎることができれば、おそらく起爆

することは無いと思うが、彼もそれは承知しているようで、こちらが手の届く範囲には入ってこなかった。

ひとつ確実に言える事は、オウラが飛行船に関して無知であるらしいということだった。わたしは気囊加熱中にわざと必要のない作業をやって見せたが、彼は文句ひとつつかなかったのだ。また、追加のガソリンや灯油の積み込みも指示しなかった。現在積み込んでいるガソリンは戦闘定量の二分の一、灯油はわずか三分の一である。これでは、一番近いタガレー国内の入植地へさえたどり着けない。

わたしは作戦を立てた。途中で、燃料が足りなくなったといつて引き返せばいい。オウラはおそらく自殺するタイプではない。山中に不時着して朽ち果てるよりは、別の脱出方法を探さだろう。もうすでに、地上作業員たちはわたしたちがオウラの人質となっていることに気付いていた。引き返してくるころには、システイハルナがなんらかの手を打ってくれていることであろう。

「離陸するわよ」

わたしの言葉に、オウラがうなずきで承認を与える。

『紫の虎』はしずしずと上昇した。テイリング少尉が発動機に火を入れる。

「西へ向かえ！」

オウラが命じた。

「おい。あれは何だ！」

オウラが叫んだのは、離陸して一時間ばかり経過した頃だった。彼が銃口で指し示す先には、小さな艇影があった。方角は東だ。わたしは双眼鏡を取り上げた。詳しく見るまでもなかった。

「追っ手ね！ おそらくレスペラ艇だわ！」

システイハルナだろうか。ともかく、味方である。

「少尉、もっと速度をあげろ！」

「これ以上出力を上げたら、燃料を無駄遣いすることになりますよ！」

テイリングが、言い返す。

「かまわん！」

「だめよ！」

わたしは一枚目の切り札を出すことにした。

「ガソリンはもう半分近く使っちゃったのよ！ どこへ逃げたいのか知らないけれど、そこへたどり着けるだけのガソリンはないわ！ レスペラへ引き返した方が、身のためよ！」

意に反し、返ってきたのは不敵な笑みだった。

「燃料が少ないのは計算済みだ！」

拳銃をいったん手放したオウラが、懷から一枚の紙を取り出す。

「ここに向かえ！」

紙は手書きの地図であった。ほぼ中心に、赤い点が打たれてある。わたしは官給品の地図を取り出すと、地形を照合した。そう遠くない場所だ。ガソリンが切れるずっと前に、たどり着ける。

「空賊が設けた緊急の補給地点だ！ ガソリンも灯油も貯えてある！ そこで給油して、さらに西へ飛ぶ！」

「用意のいいことで！」

皮肉な口調で、サンヌ。

「結局どこまで逃げるの？ タガレー国内に仲間がいるの？」

「答える必要はない！」

「答えてもらわなきゃ！ わたしたちは人質なんですからね！ 安全を保障してくれない限り、これ以上の協力はできないわ！」

わたしは腕を組んでそう言い放った。

「：：道理だな！ いいだろう！ 俺の受けた命令は、暗号解読の阻止だけだ！ すべてが偽装だと判った以上、任務は果たしたと考えていいだろう！ その後、自己判断でレスペラを去れとの指示だ！ タガレーのある場所に赴けば、礼金と新しい身分が待っているはずだ！」

「わたしたちはどうなるの？」

「たぶん、どこかの軍閥に頼めば、リンカンドムへ送還してくれる

だろうな！ ひどい眼にあうことはないだろう！ 軍閥だって、リンカンダム軍人を虐待したりすれば、様々な方法で報復されることくらい承知しているからな！」

オウラがそう答えた。わたしはしばし考えてから、質問を放った。「あなた、誰に雇われていたの？」

「詳しくは知らんよ！ 俺はいわば連絡役でね！ 結局のところ、金で雇われた使い走りさ！」

「レスペラに、まだあなたの仲間がいるのね？」

「ああ！ 命令は、そいつから受けていたんだ！」

「誰なの、それは？」

「聞きたいか？」

オウラが、楽しい表情でわずかに身を乗り出す。

「もちろん！」

「聞いたら、生きて返すわけには行かなくなるが……それでも聞きたいか？」

「……やめとく！」

レスペラ艇は、相変わらずわれわれを追尾してきていたが、十二分に距離を保っており、ちよっかいを出してくることはなかった。

やがて、『紫の虎』は、手書き地図に記されていた地点上空に到達した。険しい山の中腹に、ちよっとした平地がある。わたしは階段の踊り場を連想した。

「よし。降りろ！」

オウラが命ずる。

ここしか逃げる機会はない、とわたしは判断していた。オウラはずっと隙を見せていない。もし首尾よく導爆薬線を引きちぎったとしても、誰かひとり拳銃の弾丸を喰らうことだろう。わたしはむしろ死にたくなかったし、テイリングやサンヌを失うわけにも行かなかった。

給油作業中に逃げることも出来そうになかった。身を隠せるよう

なところはどこにもなかったし、無理に逃亡を図っても、崖をよじ登ったりにじり降りているところを狙い撃ちされるのがおちである。わたしはわざと尋常でない着陸手順を踏んだ。サンヌとティリングに、脱出の意図を伝えるためだ。察したサンヌが、理解したというようにうなずいてみせる。ティリングも判ったらしく、ウインクしてくれた。

着地寸前に、わたしはこう命じた。

「ティリング少尉。合図したら係留索を持って飛び降りて。サンヌはそれを手伝うように」

「了解」

二人が声を合わせる。

「妙なことを考えるなよ」

一応、オウラが釘を刺してくる。だがしかし、こちらの意図に気付いたような様子は見えなかった。

「着地の衝撃に備えて。かなり揺れますからね。驚いて掌を開いたり、引き金を引いたりしないでよ」

わたしはオウラに対しそう告げつつ、ゴンドラの縁と索の一本を手でつかんだ。この一言で、貴重な数分の一秒が稼げるかもしれない。

どしん、とゴンドラが揺れ、着地する。

「係留索！」

叫ぶと同時に、わたしは腕の力だけでぐいっと身体を持ち上げ、両足をゴンドラの縁に掛けた。そのままぴょんと、ゴンドラの外へと飛び出す。地面に降り立ったわたしは、急いで横にステップを踏みつつ……拳銃の狙いを逸らすためだ……振り返った。

サンヌもティリングも、すでに地面に降り立っていた。

着地したはずのゴンドラの姿は、地面の上にはなかった。三人分の体重を失った『紫の虎』は、重力との戦いに打ち勝ち、急速に高度を上げていた。ゴンドラの見かけの大きさが、みるみる縮まってゆく。

「ははは。寸前に、最大火力にしてやったからね」

サンヌが自慢げに言う。

『紫の虎』は、なおも上昇を続けていった。ゴンドラの見た目は、すでにビスケット一枚と変わらぬ大きさだ。と、それがいきなり爆発した。

オウラが慌てて例の装置を手放してしまったのか。あるいは、別の原因があったのだろうか。ともかくも、『紫の虎』のゴンドラが青黒い煙に包まれる。次の瞬間、火球が生じた。すでに残り少なくなっていたガソリンに引火したのだろう。どおん、という音が、わたしたちの耳を打った。

『紫の虎』は失われた。わたしたちの、艇が。

「あーあ、もったいない」

テイリングが、しみじみと言う。

細かい破片が、ばらばらと降ってきた。発動機かボイラーの残骸らしい大きな塊は、炎をあげながら山の斜面に落下し、もろくなっていた岩を盛大に削り取りながら、転がり落ちていった。

「さて、問題は」

サンヌが、急速に近付いてくるレスペラ艇を指差した。

「あの艇に三人も便乗できるかどうかだね」

18 酒宴2

『緋色の間』は、前回の会議の時よりも混雑していた。警察軍の佐官全員と、藩王国政府の主要な文官も、臨席していたからだ。システイハルナの横には、サリュシオン王子の姿も見える。佐官全員だから、当然フィーニアも顔を見せていた。

「ではまず、エルダ・フォーリオ大尉から、フレンス・オウラの一件に関する報告を」

ヤラム王子が、わたしを指名した。立ち上がったわたしは、オウラが宿舎を訪れたところから話し始めた。『紫の虎』が爆発したところで、どよめきが生じる。

次いで、システイハルナがヤラムの指名を受けずに立ち上がり、『ティリング少尉暗号解読作戦』の詳細を説明した。驚きと困惑が、緋色の間に広がる。捕虜にしたと発表した暗殺者の一人が、実は死んでいたというくだりでは、多くの出席者が一様に驚きの表情を見せた。

「フォーリオ大尉とその部下の方々を危険な目にあわせてしまいました。結果的には作戦は成功し、フレンス・オウラという内通者を炙り出すことができました」

やや淡々とした口調で、システイハルナが続ける。

「：しかし、いくつかの問題が生じました。ひとつは、さらなる内通者の存在です。オウラは、さらに高位の、あるいは警察軍に近い存在の内通者を示唆しています。彼が逃亡成功寸前だったことを考え合わせれば、その言葉の信憑性は高いと看做さざるを得ません」

緋色の間が、わずかにざわめく。システイハルナの今の発言は、この中に裏切り者がいる、と宣言したと同じだからである。

「オウラの二人の部下という人命を犠牲にし、また貴重な情報源であるオウラという存在を失ってまで守りたかった内通者である、と

いう事実にも注目して欲しい」

ヤラムが、重々しく口を挟んだ。

緋色の間が、さらにざわめく。落ち着きのない人は、内通者を探すかのように周囲を見回している。暑くもないのに汗をぬぐう人の姿も多い。

「もうひとつの問題は、空賊側の大量出撃の可能性についてです」
システィハルナが、話を再開した。

「エクス隊長率いる一隊の出撃中継地点襲撃で、空賊側は大打撃をこうむりました。そして昨日、フレンス・オウラという貴重な情報源を失った。おそらく、空賊側の選択肢はふたつしかないでしょう。下世話な比喻ですが、残ったチップをすべて現金に換えてすごすごと家へ帰るか、あるいはすべてのチップを賭けて最後の大勝負に出るか」

システィハルナが、とんと拳でテーブルを叩いた。小さな音だったが、彼女らしくない仕草におもわず一同が動きを止め、沈黙する。「ということだ。警察軍は、近日中に空賊の全力出撃があるものと想定して、迎撃準備を整える。では、ジューゼル中佐」

ヤラムが指名する。

わたしはジューゼル中佐の防衛体制に関する報告を聞き流した。それらはすでに、頭の中に入っている。出動できる飛行船は三艇。わたしたちは、空賊から分捕った一艇……ヴィーカル製の『シロイルカ級』を借りることになった。ただし、発動機はティリングが使い慣れた五四式発動機に換装してある。旋回砲は、これもヴィーカル製の『No. 24』というタイプだ。慣れていないのでやや使いにくい、七型旋回砲よりは弾道性能が良い。

地上の対空砲勢力は、鹵獲火器を加えたおかげでやや戦力を増した。『火龍式』四門のうち一門は故障してしまったが、『No. 24』一門と『No. 21』二門がかなりの量の弾薬とともに配備されている。これら部隊を指揮するのは、もちろんフィーニア・クロイ少佐である。

これらとは別に、わたしは秘策をシステイハルナに提案してあった。いや、秘策というよりは奇策であろう。先だって撃墜した空賊艇の気嚢を修理して利用する策だが……さて、空賊相手に通用するものか？

「今日は深酒できないわよ」

ブランデーの大壺を手に現われたフィーニアに、わたしはきつちりと釘を刺した。

「じゃあ、こっち」

持参した手提げ籠の中から、フィーニアがワインの壺を引っ張り出す。

「それならよろしい」

わたしは自分用にワイングラスを、フィーニア用にゴブレットを取り出した。

「本当に、空賊の全力出撃があると思う？」

片手だけで器用にワインの栓を抜きながら、フィーニアが問う。

「たぶんね」

わたしは雑多なつまみの類をテーブルに出した。サンヌお手製の牛肉煮込みの残り、市場で買った瓶詰めピクルス、紙袋に半分残っている乾燥果実、フィーニアが大好きな乾燥肉、炒った堅果……。

「それで……」

ちよつとした雑談ののち、フィーニアが深刻そうな表情で、訊いた。

「高位の内通者は絞り込めたの？」

「……システイハルナは、かなり絞り込んだみたいね」

「わたしもそのひとりかな？」

「いいえ。あなたは外れたわ。オウラという貴重な立場の情報提供者を犠牲にしてまで、守るほど大物じゃないもの」

「……喜ぶべきか、悲しむべきか迷うわね」

フィーニアが、おおげさに肩をすくめて見せる。右手がうまく動

かないために、その動きは彼女の意思に反し、かなりこっけいな仕事に見えた。

「おそらくは、警察軍大佐か中佐クラス。あるいは、官僚のトップクラス。それに……」

「王族ね」

フィーニアが、わたしの言葉を引き取る。わたしはうなずいた。

「全部で十数人、ってとこね。大佐が二人、中佐が三人、官僚が七人から八人、王族が、ヤラム王子とサリュシオン王子」

「セレスタ様の目はない、と」

「システイハルナによれば、ね。もしかかわっているとしても、サリュシオンと込みで考えるべきだわ」

「そのうちの一人と考えているの？ 複数の可能性はないかしら。たとえば、ヤラムと軍人の一人と、そうね、ルシューム大佐あたりが組んでいるとか」

ピクルスをつまみながら、フィーニアが言う。

「あなた、ルシューム大佐も嫌ってるの？」

「嫌いじゃないわ。ただ、ハッチンス大佐よりは悪人顔じゃない？」

「確かにそうね」

わたしは吹き出した。

「いえ、システイハルナは一人だけだと見ているわ。もし何人かで共謀しているとすれば、頻繁に連絡を取っているでしょう。そうなれば、目立つはずよ。いまのところ、その気配はないもの」

「ふうん」

フィーニアが、ぐっとゴブレットを呷る。

「誰だと思う？」

「判らないわ、正直なところ。だいたい、レスペラの高級官僚なんて顔も知らないもの。むしろ、それはわたしの質問だわ。誰だと思う？」

問い返されて、フィーニアが考え込んだ。ゴブレットを置き、乾燥肉に手を伸ばす。それをゆっくりと噛みしめながら、視線を宙に

さまよわせる。

「王族は関わっていない、と思う。ヤラムが実兄のフザロック陛下を裏切るとも思えないし、サリュシオンもそれほどの野心家じゃないわ。賭けると言われたら、二人の大佐に掛け金を等分するわね。自信はないけど」

ややあつて、フィーニア。わたしはうなずいた。

「ともかくシスティハルナは、容疑者とおぼしき全員に対する監視を強めているわ。うまくいけば、いずれ尻尾をつかめるでしょう」

「その前に空賊の全力出撃を撃退する必要があるわね。勝てそう？」

「まあね。ヴィーカル製の旋回砲にはとりあえず慣れたし、何とかなるでしょう。そっちはどうなの？ 壊れた『火龍式』は直った？」

「だめね。もう寿命だわ。もともと耐用年数が切れかかっていたところへ、この騒動でしょ。砲身が持つわけないわ。あとの三門も、じきにいかれちゃうわね。まあ、どうせ撃つても当たらないけど」

わたしは相槌をうたなかった。実際、フィーニア率いる防空部隊の戦績は芳しくなかった。口の悪い市民から、『警察軍お抱え花火師集団』とのあだ名まで頂戴しているほどだ。

「ともかく、来襲するであろう空賊を撃退し、高位の内通者を捕らえれば、この件はそれなりに片付くわ」

わたしは牛肉煮込みに手を伸ばした。玉葱や人参、セロリなどとともに丁寧に煮込まれており、ごくあっさりとした味付けながら実に旨い。

「それなりに、か。まだ空賊の目的が不明なものね」

「そう。オウラも知らされていなかったらしい、空賊を操っている連中の目的」

「もしどちらかの大佐が真の内通者だとしたら……クーデターかしら」

フィーニアが、自分のゴブレットにどぼどぼとワインを注ぎ足す。「推理を聞かせて」

「……レスペラの王族はいずれも市民に人気があるわ。まあ、フザ

ロック陛下のやり方に反発を持っている警察軍士官はけっこういるし、今回の一件で信望を失いつつあるのは事実よ。中央政府に対する心証も、相当低下しているはず。ヤラム王子の人望も、たいしたことないし。でも、セレスタ王女は無条件に市民に好かれているし、システイハルナは幹部はともかく一般の兵士には大人気よ。現状で、警察軍の一部がクーデターを起こしても、大半の警察軍兵士は王族側につくでしょうね。失敗は目に見えてるわ」

「そこで空賊を使った、と？」

「空賊の襲撃でフザロック陛下に揺さぶりをかける。頃合を見て、一気に政権奪取に掛かる。……うーん、これじゃあうまくいかないわね。もう一工夫ないと、クーデターは無理だわ」

フィーニアが、首を振る。わたしは思わず笑って言った。

「しかし……冷静に考えてみると、ずいぶん物騒な話をしてるわね、わたしたち」

「まあ、深く考えないことにしようよ」

フィーニアも、笑った。

「もし仮にルシウム大佐がレスペラを乗っ取ろうと画策していたとしましょう。だとしたら、空賊はなぜ彼に協力するわけ？ 大佐は彼らに何を与えたの？ あるいは、何を与えるつもりなの？」

わたしは半ば自分に問うように言った。

「人が欲しがるものは……金と権力と名誉。……レスペラは豊かだけれど国庫は貧しいし、藩王の権力だったことない。まあ、リンカンダムの地方都市の市長よりは幾分かまし、といった程度ね。名誉も同様。判らないわ」

首を振ったフィーニアが、くすくすと笑って付け加える。

「ほら、あの噂。システイハルナを嫁に所望した軍閥の長ってやつ。真相は、意外とあれなのかもよ」

「空賊の頭領が殿下にほれ込んで、襲ってるっていうの？ それなら、『システイハルナ王女を渡さないと、街を焼き払うぞ』とでも脅さなきゃ」

わたしはグラスを干した。瓶に手を伸ばしたフィーニアを目顔で制し、自分でお代わりを注ぐ。

「そんな三流芝居みたいな話じゃないよ、きっと。ルシウムがクーデターに成功したら、陛下を追放して、空賊の頭領がステイハルナを娶るんだ。形の上ではステイハルナが藩女王。それを操るのが、ルシウムと空賊の頭領なのよ」

げらげらと笑いながら、フィーニア。

わたしもつられて笑い出した。脳裏には、はっきりと映像が浮かんでいた。ウェディングドレスを纏い、顔をしかめているステイハルナ。その腕をつかみ、得意満面の笑みを浮かべている大柄な空賊の頭領……顔はなぜだかエクス隊長に似ている。その後ろで、緊張の面持ちで介添え役を務めているルシウム大佐。

人間、酔うと節操がなくなるものである。気が付いた時には、フィーニアは持参したブランデーの栓を抜いていた。話題が、徐々に昔話に変わってゆく。最後に寮の部屋を二人で掃除したときのこと。初飛行の前の緊張。士官学校の講堂で、初めて顔を合わせたときの印象。お互いのことを知る由もなかった、子供時代。

うるさくて眠れない、とサンヌが文句を言いに来るまで、酒宴は続いた。

19 陥穽

高度五百。

わたしは双眼鏡を覗き込んだ。愛用の品はオウラとともに飛び散ったので、これはフィーニアを通じて借りた奴だ。鏡筒の動かし方のコツがいまひとつつかめていないので、使い辛い。

「五艇確認！」

一足先に双眼鏡を覗いていたサンヌが、叫ぶ。

わたしも艇影を慎重に数えた。：：やはり、五つだ。

「こちら五艇確認！ サンヌ、継続監視！ 装弾はやります！」

「了解！」

仮称『紫の虎二号』は、レスペラ艇二艇を左に見る形で、レスペラ上空にあった。

予測通りの全力出撃と思われた。当初予想された空賊側航空戦力は七ないし八艇。レスペラ市街地上空でわたしが一艇落とし、出撃中継地点襲撃で三艇を破壊、一艇を捕獲した：：言うまでもなく、その艇がこの『紫の虎二号』である：：。今現在、見えているのが五艇。ということは、最低でも空賊側戦力は十艇だったということになる。

「王女艇、信号です！」

ティリングが叫ぶ。

わたしは双眼鏡を置き、肉眼でシステihalナが乗り組むレスペラ艇を注視した。小さな白い旗が振られている。事前計画通り実行せよ、の合図だ。

「計画通りやります！ ティリング少尉、王女艇に追従！」

「了解！」

わたしの提案を容れてシステihalナが立てた作戦で要となるのは、わたしとリュレアだった。囹となるレスペラ艇と『切り札』によって、空賊艇を特定地域に誘い込み、わたしとリュレアの『卓越

した射撃技術』（システイハルナ談）により、一艇でも多くの空賊艇を葬り、しかる後に機動戦に持ち込み完全勝利を目指す、というものである。

うまく引つかかってくれるといいが……。

まず、四艇が前に出た。王女艇は誘うように別な方向に進路を変え、わが艇もそれに追隨する。

空賊側は分散した。二艇が四艇に喰らいつき、三艇はこちらを追尾してくる。

王女艇が、速度と高度を減ずる。わたしは、空賊艇に対し射距離五百で初弾を放った。罠に嵌めるためにはある程度近接していなければならぬが、こちらが被弾しては元も子もない。近づけさせないための牽制射撃だった。敵も、撃ち返してくる。

「テイリング、準備はいい？」

「準備よし！」

威勢のいい返事が返ってくる。

罠が仕掛けられたのは、市街地西方の小さな森であった。そこにはすでに百人を越える警察軍兵士と義勇兵、それに武装した市民有志が隠れている。

王女艇が、森の上空を通過した。わが艇も、続く。

先頭の空賊艇が、森上空に差し掛かった。

と、いきなり森の東側から飛行船が急上昇した。

それは、奇妙な飛行船だった。ゴンドラの代わりに、気囊の下に木箱のようなものがくくりつけてある。さらに、気囊からは数十本におよぶ様々な太さの索が、地上まで垂れ下がっていた。それはさながら、ある種の海月のようにも見えた。

次いで、木箱の中から二筋の白煙が噴き出す。その反動で、木箱は水平面でくると回り始めた。白煙が流れ、渦巻きを作り出す。市街地で撃墜した空賊船の気囊を回収して修理し、作り上げられた切り札だった。

切り札を見た空賊艇の行き足が止まった。罠と悟り、慌てて進路

を変えようとする。

眼下の森から、一斉に薄い煙の柱が垂直に上がった。その数、実に二十本。

火箭である。しかも、空賊艇を狙って放たれたものではない。だが、いきなりの『攻撃』に空賊艇がさらに慌てた。なんとか森上空から離脱しようと機動を始める。

その頃にはもう、わが艇と王女艇は森の南側に回りこみ、超低速状態まで急減速を終えていた。わたしはすでに観測を終え、照準器を覗き込んでいた。

火箭は風と空賊艇の動きを読むためのものであった。等間隔で打ち上げられた火箭が作り上げた煙の柱は、空賊艇までの射距離と、その周囲の気流状態を詳しくわたしとリュレアに教えてくれたのだ。いわば、巨大な方眼紙の上に立ち尽くす人物を狙撃するようなものである。

射距離は二百以下。

先にリュレアが放った。わたしも一瞬送れて引き金を引く。

二弾とも、命中した。二艇の空賊艇の気囊に、穴が開く。

発動機を全開にして、空賊艇が離脱を図る。だが、東側には謎の飛行船がいる。南側にはわれわれ二艇。逃げ場は北か西しかない。

無傷の空賊艇がわれわれに向け発砲する。距離が近いから至近弾となった。

「発砲後装弾中回避！」

わたしはティリングに命じた。ほぼ同時に、サンヌの手が左肩を叩く。

わたしは傷ついた空賊艇に発砲した。すでに離脱にかかっていたものの、これも命中する。

即座に、ティリングが回避行動を開始した。無傷の空賊艇が離脱しつつ発砲するが、これは外れる。

リュレアの二発目は外れたようだった。王女艇を狙った空賊の射弾も、外れる。

わたしは三発目の狙いを、逃げてゆく無傷の空賊艇に向けた。二発喰らわせた空賊艇は高度と速度を大きく減じ、森に隠れていた兵士や市民有志に下から歩兵銃や猟銃を撃ちまくられている。

ティリングが、回避行動をやめる。

わたしは撃った。射距離は三百。

当たった。

まぐれとまではいかないが、かなり幸運な一弾と言えた。

サンヌが装弾するあいだに、わたしはさっと周囲を見渡した。

わたしが二発喰らわせた艇は、すでに地上からの射撃で気囊をずたずたに引き裂かれ、地面まであとわずかという処を情けなく漂っていた。リュレアは三発目を当てたらしく、王女艇の獲物も高度を減じ、フィーニアの部下の餌食となりつつある。

「回避しつつ距離を詰めて！ 残ったあいつも仕留めるわよ！」

「了解！」

捕虜とした男の一人は、ワフ・パトロー元中佐と名乗った。……いつぞや捕虜にした空賊の証言にあった、元タガレー共和国軍人である。容貌も、証言と一致した。まず間違いなく、本人であろう。

完勝であった。四艇は、なんとか被弾せずに逃げ切った。『紫の虎二号』も、王女艇も無傷。空賊五艇のうち二艇は逃がしてしまったが……まあ、二艇だけではそれほどの脅威にはなるまい。

フザロック直々の命令で、パトローは真っ先に王城に連行された。空賊の親玉ならば、内通者に関する情報を持っている可能性が高い。そう判断されたからである。当然、他の捕虜とも隔離された上で、拘禁される。

尋問にはわたしも立ち会った。狭い部屋の中で椅子に縛り付けられた上に屈強な王室警護隊員二人に押さえつけられたパトロー。床に脚を固定された小さなテーブル……尋問室に固定されていない家具を置くのは非常識というものである……を挟んで、腰掛けたシスティハルナ。彼女の後ろには、当然ながら守護天使のごとくエクス

隊長が控えている。

システイハルナの名乗りを聞き、パトローがわずかに笑みを見せた。

「噂どおり、お美しい方ですな」

「レスペラ藩王国藩王フザロックの代理として、わたくしが尋問を行います」

誉め言葉にも動じず、澄ました顔でシステイハルナが言い放つ。

「書記がないようですがね。たしかリンカンダムの法律では、書記による同時記録なしの尋問は、違法行為じゃありませんでしたっけ？」

パトローが、不敵な笑みを湛えたまま突っ込む。

「これは、犯罪者に対する尋問ではありません」

辛抱強く、システイハルナが答えた。

「状況証拠を総合すれば、あなたのことを外国の侵略軍の一員と見なすことも可能なのです。お分かりですか？ その服は、どうみても軍用の飛行服ですよ？」

言われたパトローが、自分の格好を見下ろした。主要部に革を縫い付けた濃い緑色の、よく見かけるタイプの簡易な飛行服姿だ。左袖は大きく破けており、わずかだが血痕が付着している。

「武装飛行船にその服装で乗り組み、わが領土に侵入し、警察軍を相手に戦闘を行った。これは認めざるを得ないでしょう。そして：」

システイハルナが言葉を切り、歯を見せて微笑んだ。

「あなたのその服には、国籍標識も所属部隊の徽章も階級章も一切付いていない。もちろん、飛行船にも同様の徽章は付いていない。となれば、空賊の可能性もありますが、いまのところわがレスペラは金品の要求も脅迫も受けてはおりません。したがって、あなたは空賊とすら認められないのです」

ほんのちよつとだけ、パトローの顔に動揺が走った。

「交戦国の軍人ではないから捕虜ではない。空賊とも認められない

から通常の犯罪者でもない。ちなみに、レスペラ藩王国内は今のところ、リンカンドム中央政府によって交戦地域との宣言がなされています。公的にね。つまり、あなたは交戦地域で侵略行為を行ったにも関わらず、交戦資格のない人物となるわけです。国際法上の傭兵にも該当しませんね。……要するに、戦時捕虜の扱いも国際法の保護もリンカンドムの民法も……すべての法律法規の保護を受けられない身分なのです」

「なにを馬鹿な！ わたしは地方政府の正規軍に所属している。徽章の不備は作戦上の必要によるものだ。戦時捕虜の待遇を要求する」
「だったら、それをこの場で証明してみせるんだな」

エクスが、絶妙のタイミングでぼそりと口を挟んだ。

「よかろう」

ワフ・パトロ―元中佐の供述は実に一時間に及んだ。

彼が所属していたのは、タガレー共和国の中堅軍閥（彼に言わせれば、地方政府だそうだが）のセンコ自治共和国。元タガレー飛行船戦隊大隊長の経歴を買われて、ヴィーカル製中古飛行船十五艇を与えられ、飛行船部隊の編成を命じられたのが、一年前のこと。資金は充分に供与する。ただし、軍閥軍とは完全に指揮統制を分離した独立部隊とすること、という条件がついていた。

元部下を集め、さらにあちこちから新兵を募り、なんとかものになる部隊が出来上がったのが、約三ヶ月前。目的がレスペラ攻撃と知らされ、それから二ヶ月ちよつとの時間を費やし、パトロ―は各所に物資集積場や出撃中継地点を作り上げた。そして……。

「では、レスペラ攻撃の目的は？」

システイハルナが、ずばりと訊く。

「それは教えてもらっていない。とにかく定期的に攻撃し、打撃を与えろと言われていた」

「特になにか命じられてはいませんでしたか？ 特定のレスペラ艇を撃墜するようにとか？」

システィハルナが続けて質問する。声は、いつもよりほんの少し高かった。

「そういう命令はあった。二回目の出撃の時だったな。とにかく、迎撃してきた艇は全部叩き落せと命じられた。なんとか罫にかけたんだが、すばしっこい艇がいて、逃げられたよ」

「では、肝心なことを訊きましょう。あなたは誰に雇われていたの？」

「まあ、直属の上官は自治共和国軍司令官のカカン将軍だ。命令は、すべてそこから来た」

「カカン将軍の上官は？」

「ルマトール首相さ。あんたらに言わせれば、軍閥の頭領だが」

「あなたのところに、レスペラの防衛戦略やその他の軍事情報が流れてきたはずですが？」

「ああ。来たよ。カカン将軍の副官が不定期に持ってきてくれた。簡単なメモだったな」

「どんな内容でした？」

パトローは尋問に協力的だった。彼の供述によれば、メモの内容は多岐に渡っていた。飛行船や対空火器の現状、人員の錬度や士官人事、主要な飛行船の出発時刻、弾薬備蓄について、など。

：：：どう見ても、フレンス・オウラに探り出せる内容ではない。いささか詳細に過ぎる。

「情報の出所について知っていることを、全部話してください」

「知らん。おそらく、レスペラに間諜を潜り込ませてあるのだと思っただがね。メモは簡潔なものだったし、情報も常に新しかったから、無線電信で送られてきたものだと思はつた。ただし：：：」

「続けなさい」

言い淀んだパトローを、システィハルナが鋭い口調で促す。

「：：：妙な指示があった。航空軍団の艇との交戦はなるべく避けるように、メモに書いてあったんだ。とりあえず指示には従ったがね。理由が判らないから、不審には思ったが」

システイハルナはさらに尋問を続けたが、内通者の特定に至るような情報は聞き出せなかった。

「いいでしょう。今日はこれで終わりにします」

すっかり疲れた表情で、システイハルナが立ち上がった。

「俺はどうなるんだ、王女様？」

「処置は中央政府に任せます。レスペラは、国際問題を背負い込むわけには行きませんか」

「じゃあ、このお嬢さんに預けられるのかな？」

パトローが、尋問のあいだ黙って突っ立っていたわたしを見上げた。

「あんた、リンカンダムの軍人だろ？ 徽章からすると、航空軍団の大尉だな。そうか、あのけったいな罍を考えついたのも、あんただろう？」

「一応はね」

「何だったんだ、あの索をたくさんぶら下げた飛行船は？ あれが噂に訊く空中機雷ってやつか？ それとも無人飛行船か？ 地上から、電氣的に発動機の方を変えて動くっていう？ リンカンダム軍は、いつの間にあんな兵器を開発したんだ？」

「実はね……」

わたしは許可を求めるかのようにシステイハルナを見た。彼女がかすかにうなずくのを確認してから、わたしは続けた。

「あれ、ただの気囊だったのよ。地上で熱気を充分に注ぎ込んでから、タイミングを見計らって飛ばしただけ。索や煙ははったりよ。とにかく、あの森の上空で、あんた方の艇の速度を落としたかっただけ。ただ、それだけのものだったのよ」

「……縛られてなきゃ、殴ってやるところだ。あんなものに、四人も殺されちゃったのか！」

パトローが吐き捨てる。

システイハルナが、目顔でわたしを呼んだ。わたしは彼女のあとについて部屋を出た。背後で、エクスが静かに扉を閉めた。

「真の内通者が誰かを絞り込むことはできませんでしたが……だいたぶ裏事情が判明しましたね」

眉間に皺を寄せつつ、システイハルナが小声で言った。

「そうですね」

わたしはうなずいた。パトローに与えられた準備期間の長さ、部隊創設に関わる諸費用の大きさから推定すると、黒幕はまず確実にどこかの国家であろう。レスペラに打撃を与え、システイハルナを殺害することが戦略目標だったことは間違いあるまい。となれば、空賊の作戦目的はやはりレスペラ藩王国の体制に対する揺さぶりであろう。システイハルナが死亡し、フザロック藩王に無能の烙印が押されることになれば……。

「真の内通者が、あのお方である可能性が高まりましたな」

エクスが、ぼそりと言う。

「ええ。残念ですが」

システイハルナが、嘆息した。

20 会食

「おやおや。ぼくはシステイハルナに招待してもらったはずだけだね」

王城の小食堂のテーブルについているわたしを見て、サリュシオン王子がおどけたように肩をすくめた。

「申し訳ございません、殿下」

立ち上がったわたしは、深々と頭を下げた。

「王女殿下は、どうしてもご都合が悪く、朝食を欠席なさるとのことです。僭越ながらこのわたしが、殿下の朝食のお相手を務めさせていただきます」

「システイハルナが朝食に誘ってくれるとは珍しいと思っていたが……どうということだね？ 正直に行こうじゃないか、大尉。今現在、システイハルナはどこで何をしているんだ？」

「殿下のご自宅を搜索する一隊を率いておられます」

わたしの一言に、サリュシオンの笑みが凍った。

「……また、なぜ」

「殿下がご自宅に無線電信機をお持ちではないか、と王女殿下は考えておられました」

「たしか、無線電信機の所持を禁じた法律は、リンカンダムにもレスペラにもないはずだが……」

軽い口調で、サリュシオン。だが、表情は強張っている。

「通信内容が問題なのです」

わたしは音高く指を鳴らした。第一種礼装に身を包み、これ見よがしに腰に拳銃を吊ったサンヌが、銀色に光るトレイを持って現われた。わたしはトレイの中の厚紙を取り上げ、テーブルの中央に置いた。

厚紙には、いくつもの細片に分かれた紙が、糊で貼り付けてあった。……破り捨てられた紙を、丁寧に復元したものだ。

「軍では、機密事項を記載した用紙は決して破り捨ててはいけなくと教育します。焼却したうえで、灰をすり潰すのが最良の方法です。燃やすことが不可能ならば、できうる限り細片に千切り複数の個所で野外に撒き散らすか、河川や海に流すようにします」

いったん言葉を切ったわたしは、人差し指を厚紙に突きつけた。

「そしてこの紙は、殿下のご自宅のゴミから回収したものです。はつきりと読めます。十七日現在、『火龍式』一門故障。『No. 24』一門、『No. 21』二門は稼動中……。推測するに、無線電信を送るためのメモでしょう。いったい、どなた宛に発信されたのですか？」

サリュシオンは答えなかった。眼は、厚紙を凝視している。やがてそこから視線を逸らしたサリュシオンは、すっと大きく息を吸い込むと、穏やかな表情でわたしを見た。

「……座ってもいいかね？」

「もちろんです」

サリュシオンが座るのを待って、わたしも席についた。

「朝食を召し上がりますか？」

「もらおうか」

わたしはうなずいた。控えていたティリングが、大きなトレイを持って現われ、テーブルの上に手際よく皿やカップを並べていく。

ティリング少尉は今回の役どころを存分に楽しんでた。体格の似ている給仕から服を借りて着込んでいたのだ。スタイルが良いせいか、エプロンドレス姿は、妙に似合っていた。

「さて」

お茶を一口味わったわたしは、サリュシオンの灰色の眼を覗き込んだ。

「システihalナ王女殿下は、殿下こそもっとも重要な空賊への内通者であった、とお考えです。否定なさいますか？」

「否定はせんよ。この字は、ぼくのものだしね」

サリュシオンが、いまだテーブルに置かれている厚紙を見やる。

「しかし、ゴミまで漁られていたとはね。なぜ判った？」

「システィハルナ王女殿下とエクス隊長らの、地道な捜査の結果、ほとんどの官僚と警察軍幹部の疑いが晴れたのです。残る怪しい人物は、王族方のみ。当然真っ先に疑われたのは、殿下です。数日前から、殿下のあらゆる行動は、こちらの監視下にありました」

「ご苦労なことだ」

サリュシオンが、鼻で笑う。

「だが、君に言い訳するつもりはない。システィハルナを呼んでくれ。彼女なら、ぼくの立場が判るはずだ」

「残念ですが、王女殿下は殿下にお会いになるつもりはないそうです。王女殿下からのわたしへの指示はこうです。『サリュシオン王子から事の次第を聞き出し、亡命させよ』……。よろしいですか、この場にわたしとわたしの部下しかおらず、レスペラ関係者がいないのは、この一件をなるべく穏便に処理しようとする王女殿下のお気持ちの表われなのです。真相はわたしの口から直接王女殿下にご報告申し上げるだけ。ご自宅の家宅搜索も、表向きは公金横領の疑いということになっています。サリュシオン殿下は、公金の私的流用の責任を痛感し、公職を辞し、王族籍を離脱、外国に亡命した、というかたちで幕を引きたいのですよ」

「横領だと。ばかばかしい」

サリュシオンが、吐き捨てる。

「いいだろう。教えてやる。だが、食べながら話させてもらうぞ」
「ご存分に」

サリュシオンに対し最初に接触してきたのは、ヴィーカル連合王国の外交官だった。

リンカンドムの王都オルテンにフザロックの名代として赴いたのは、一年半ほど前のこと。そこで訪ねて来たヴィーカルの外交官が、甘言をささやいたのだ。『正式な独立国家たるレスペラ王国の国王になりませんか』と。

もちろんサリュシオンは拒否した。フザロックの治世に不満がないわけでもないし、野心と無縁なわけでもない。しかし、それなりに藩王に対する忠誠心は持ち合わせている。だが、外交官の語る壮大なビジョンを前にして、まだ若いサリュシオンの心は揺れ動いた。ヴィーカルの飛行船技術を持つてすれば、近い将来レスペラは大陸の交通の要衝になりうる、と外交官は説いたのだ。

ヴィーカル連合王国が、国家的プロジェクトとして進めているガス式飛行船の開発……。その究極の目標は、大陸を無着陸で横断できる巨大ガス式飛行船の建造と就航であった。しかし、そのプランはすでに設計段階で非現実的なものと見なされていた。そこまでの長距離性能を求めるとパイロードの極端な減少を招き、とてもコスト的に割の合わないものになる可能性が高かったのだ。飛行船のライバルはやはり鉄道である。いったん線路を敷設してしまえば比較的低コストで運用できる鉄道と、人員輸送や郵便貨物部門でまともに競争しようとするならば、経済性の維持は最重要課題であった。開発陣は設計案をいくつもひねり出したが、運用要求やコストのバランスを考えると、その航続距離は長くても大陸横断距離の二分の一程度が現実的な数字といえた。したがって、将来ヴィーカル連合王国が、その卓越した技術力で大陸の飛行船交通網を独占的に構築するためには、どこかに大規模な中継地点を設ける必要があった。大陸の中心部にあり、ガソリンや灯油の供給に事欠かない場所が。唯一の適地が、レスペラだった。位置はほぼ大陸の真ん中。石油は豊富に産出する。地積も充分にある。鉄鉱石の鉱脈があることも、水素の供給には好都合と言えた。

だが、レスペラ藩王国はいまのところヴィーカルの仇敵、リンカンドム王国に属している。鉄道技術先進国であり、大陸環状鉄道建設計画の主導的国家であり、鉄道による交通ネットワーク造りに邁進するリンカンドムが、そうやすやすとヴィーカルの進める飛行船交通網構築に協力するわけがない。

レスペラを独立させるしか方法はない。そう、ヴィーカル連合王

国は考えた。むろん、ガス式長距離飛行船が実用化されるのはずっと後……早くても、二十年後と予想されている。だが、リンカム王国がレスペラの真の価値に気付く前に、これを抑えておくべきである。

現在のフザロック藩王は、独立の障害になると思われた。前藩王のこともあり、リンカム中央政府には頭があがるまい。その娘システィハルナも、父の意向には従うだろう。弟ヤラムも頑迷な人物で、独立など夢想だにしないはずだ。

白羽の矢が立ったのが、サリュシオン王子だった。フザロックとシスティハルナがいなくなれば、藩王位はセレスタ王女のものになる。病弱な王女に代わり、息子サリュシオンが名代としてレスペラを取り仕切るようになるのは時間の問題だろう。そしてもちろん、セレスタが死ねば、藩王位はサリュシオンのものとなる。

ヴィーカルの外交官は、熱心に説いた。二十年後の、そして三十年後のレスペラの繁栄ぶりを。空を行き交う巨大ガス式飛行船。国際都市と化したレスペラの街を歩む各国の人々。飛び交ういくつもの言語。立ち並ぶ高級ホテルと、郊外の巨大精油施設。そして、それらを統治するサリュシオンの姿を。

若き王子は苦悩し……そして決断した。

「君も飛行船乗りだ。判るだろう」

サリュシオンの食欲は旺盛だった。しゃべり続けながら、食物が次々と口の中へと消えてゆく。

「原油はまだまだ出る。ちょっと谷間へ入れば、染み出しているところがいくらでもあるからな。土地も余っている。よい水も得られる。その外交官が教えてくれたが、数年前に効率のいい水素製造方法が発明されたそうだ。原理はぼくには理解できないが、高温に熱した鉄の細片に水蒸気を当てると、酸を使う方法よりも数倍も効率的に水素を得られるらしい。君らが思っているよりも、ガス式飛行船の実用化は早いのだよ。……いいか、ガス式長距離飛行船が開発

されれば、レスペラを介して大陸のすべての主要都市が四日行程で結ばれるのだ。朝飛行船に乗り込めば、翌日の日没前にレスペラに到着する。ここで一泊して、また朝に飛行船に乗り込めば、通算四日目の夕方前に目的地に着く。四日だぞ、四日。シュミッドーレスペラーフアーリンデンだろうが、ゴベンーレスペラータビークだろうが、オルテンーレスペラーウィッテルクだろうが、四日で旅することができるのだ。これはまさに交通の革命なのだよ」

たしかに、壮大なビジョンだった。だが、わたしは軍人として別の側面にも気付いていた。どうやら、サリュシオンには判っていないようだったが。

「いいか、レスペラは単なる中継地点じゃないぞ。政治的に重要な都市にも発展できる。各国の首都から二日でやってくるのが可能なのだ。国際会議の場に最適ではないかね？ 有線電信で朝に連絡を取れば、主要各国の外務大臣が翌日の夕食のテーブルを囲むことができるのだ、このレスペラで！ 前大戦の開戦原因のひとつが、主要各国間のコミュニケーション不足にあったことは知っているな。電信では、人と人との繋がりは保てんのだ。丁寧な信号のやり取りよりも、顔をつき合わせての怒鳴りあいの方が、はるかに人間関係を深める。レスペラの発展は、大陸の平和にも寄与することだろう！」

言葉の勢いそのままに、サリュシオンがフォークを焼きソーセージに突き立てた。

「他に、その外交官はレスペラの未来について語っていませんでしたか？」

「まだある。大学の設立だ。各国の主要大学や研究施設とも、二日行程で結ばれるのだ。それら叡智を結実させる施設としての大学建設場所として、レスペラより適した場所があるだろうか？ レスペラは、小さいながらも大陸中の政治と文化の中心地として、平和と文明の発展に寄与するのだ」

……やはり気付いていない。そうわたしは確信した。

「それで？ 具体的に、どういう方策をとったのです？」

「詳しい計画は、向こうが勝手に作った。連絡員として送り込まれてきたのが、フレンス・オウラだ。タガレーの軍閥に金と飛行船を渡して空賊を組織させ、レスペラを襲わせる。出撃したシステイハルナを罠に掛けて殺してしまう。空賊の被害が増大すれば、リンカンドム中央政府はフザロックを無能だと判断して追放するだろう。……前藩王と同様にね。そうすれば母上が藩王となる。そこで空賊の役目は終わりだ。ぼくは母上を助け、独立の機会が訪れるのを待つ。そういう段取りだった」

サリュシオンが、小さなチーズの塊を千切ったパンの一片とともに、口に放り込む。

「システイハルナ王女殿下を亡き者にすることに関し、良心の呵責はなかったのですか？」

「あつたさ。彼女は好きだ。だが、ぼくの説得に耳を貸すとは思えん。それどころか、あつさりとぼくを告発したろうな。無理だよ、彼女とは組めない」

サリュシオンの前の皿は、ほぼ空に近付いていた。テイリングが静かに近付き、王子とわたしのカップにお茶を注ぎ足す。

「だが、計画はうまくいかなかった。システイハルナは罠を逃げ延びた。航空軍団から増援が送られるのは覚悟していたが、こんなにも優秀な奴らが来るとは思わなかった。オウラに爆薬を仕掛けさせて始末させようと考えたが、隙がなく、民間籍輸送船を爆破したにとどまった。あとは見ての通りだ。空賊は撃退されてしまった」

「空賊に軍事情報を流していたのは、殿下だったのですね？」

「そうだ。詳しい情報は、オウラが集めてくれた。ぼくはそれを暗号化して、発信するだけだった。受信先がどこかなど、詳細までは知らない。向こうから電信が来たときも、オウラに伝達しただけだ。たいていは、暗号のままね」

卵の最後の一片が、フォークで掬い去られ、サリュシオンの口の中へと消えてゆく。

「どうするおつもりだったのです、これから？」

「しばらく大人しくして様子を見るつもりだった。ヴィーカルは計画を諦めていないからね。こちらから働きかければ、またなんらかの策を考えてくれたはずだ。だが、もうぼくは諦めたよ。素直に負けを認めよう。亡命でも何でも、システihalナの言う通りにするよ」

「恐縮です」

わたしは肩の力を抜いた。お茶のカップを持ち上げ、一口すする。一仕事終えたあとだけに、絶妙な味であった。

「殿下。デザートはいかがいたしましょう」

すっかり給仕になりきっているティリングが、訊ねる。

「いや、結構。ぼくのデザートは、これだから」

サリュシオンが言って、懷に手を突っ込んだ。つかみ出された物を見て、わたしは思わずカップを取り落とした。

小ぶりの、決闘用拳銃だった。すでに雷管キャップも詰められている。

控えていたサンヌが慌てて自分の拳銃を抜いた。

「殿下！」

叫んだティリングが、身をすくませる。手にした銀盆が、天窓から差し込む陽光を一瞬反射させ、わたしの眼を射た。

サリュシオンが、素早く撃鉄を起こした。

「不名誉な生き方は、ごめんだ」

銃口が、口の中に突っ込まれる。

わたしは動けなかった。魅入られたように、どんよりと濁った灰色の眼を見つめるだけだった。

サンヌが駆け寄る。だが、間に合わなかった。

サリュシオン王子の後頭部が、轟音とともに吹き飛んだ。

サリュシオン王子の死は、そのまま自殺と公表された。でっち上げシナリオの最後の部分が、亡命から自害へと切り替わっただけだ。

「申し訳ございません、姫様」

「謝る必要はありません。むしろ、謝らなければならないのはわたくしの方です。レスペラの、いや、王族内の問題の解決に、あなた方部外者を巻き込んでしまったのですから」

システィハルナが、言う。声は明らかに湿っていた。

「とりあえず、これで空賊の襲撃もなくなるでしょう。ヴィーカルが裏にいたことが、証拠はないものはっきりしたのですから。陛下が中央政府に詳しい報告を提出すれば、善処してくれるはずです」

「だいいいのですが……」

「なにか腑に落ちないことがおありのようね」

システィハルナが、上目使いにわたしを見る。

「はい。サリュシオン殿下と……オウラの証言を組み合わせると、少しばかり引っかかることがあるのです」

わたしはシスティハルナを見つめた。

「姫様。ひとつだけ、お願いがあるのですが……」

システィハルナは、わたしの願いを快諾してくれた。

20 会食（後書き）

第二十話をお届けします。本作は次々回の第二十二話が最終話となります。しかしながら同話はエピソード的内容であり、分量も少なく、構成上も実質的最終話である第二十一話と連続して読んでいただくべきと判断いたしましたので、次回は第二十一、二十二話を同日連続投稿し、本作を完結させたいと思います。

21 親友

「呼び出しといて遅れるとはね」

「ごめん、ごめん」

渋面のフィーニアに対し、わたしは素直に謝った。急いで階段を上がってきたので、まだ息が荒い。

久しぶりの曇天だった。空は一面に薄灰色の雲に覆われ、時折雨がぱらつく。この尖塔の最上階も、いつもより薄暗く、湿り気もあり、陰気臭い空気を漂わせていた。

「で、何の用事なの？ わざわざここに呼び出したということは、内密の話があるんでしょ？」

「まあまあ慌てないで。まず、サリュシオン王子の死の真相から話させて」

わたしは、王子が自殺した日の様子を、事細かに語って聞かせた。一応自殺との発表はなされたが、当然その詳細は市民に対し伏せられている。

「……そういうことだったの」

「で、気付いた？」

「なにを？」

フィーニアが、当惑げに訊く。

「ヴィーカル連合王国の本当の狙い。軍事に無知なサリュシオンは気付かなかったけど、軍人ならば誰でも気付くはずよ」

「……レスペラの軍事的価値？」

「ご名答」

ある意味、レスペラは無敵の要塞である。これだけ山奥にあると、地上軍の投入は事実上不可能である。陸路での攻撃を強行しようとするならば、まず街道の建設から始めなければならず、遠征費用は大国の国家予算の大半を食いつぶすほどのレベルとなってしまいうだろうし、行軍時間も年単位で測らねばなるまい。ありえるのは飛行

船による攻撃だけだが、これも充分な数の迎撃飛行船と対空砲火を集積させれば、容易に撃退できてしまうはずだ。

ここに、いずれ開発されるであろう充分なペイロードを積み込んで大陸の端まで往復できるような、高性能ガス式飛行船の戦隊を駐留させるとどうなるか……。そう。卓越した飛行船技術を持つ勢力が、レスペラを制した場合、大陸の主要都市すべてを意のままに襲撃できる可能性があるのだ。各国は飛来する飛行船を迎撃することはできても、策源地たるレスペラを叩くことはできない。拳銃だけで、狙撃用施条銃と撃ち合うようなものである。あるいは、長大な海岸線を持つものの海軍を保有しない国家が、優秀な艦隊と陸戦隊を有する国家と戦うようなものか。

「ヴィーカルの真の狙いは、それだと思うわ。サリュシオンは、騙されていたのよ、結局」

「でしようね」

フィーニアが、うなづく。

「それと……どうやら、内通者はサリュシオンだけじゃなかったみたいなの」

「……ほう」

「サリュシオンは言ったわ。空賊に流す軍事情報を取りまとめたのは、フレンス・オウラだって。彼は藩王国政府の囑託に過ぎない。警察軍の情報を、そうやすやすと手に入れることはできなかったはずよ。誰か、オウラに情報を流していた奴がいるのよ。おそらく、ヴィーカル側はオウラを媒介にして、もう一人の内通者を警察軍内部に抱えていたんじゃないかしら。それなら、辻褄は合うし、そして多分、本命は軍人のほうだったはずよ。サリュシオンはおいしいことを吹き込まれて、操られていたに過ぎない」

「心当たりは、あるの？」

「あるわ」

わたしは断言した。

「フレンス・オウラが、わたしを人質に取ったときに、口を滑らせ

たのよ。『昨日、大事な部下を二人とも死なせてしまい……』ってね。そのときは聞き逃しちゃったけど、あとから思い起こせば、これは内通している軍人を特定する決定的な証拠だったのよ」

フィーニアは、わたしの推理を黙って聞いていた。

「オウラの言う大事な部下っていうのは、ティリング少尉殺害を試みた二人だというのは間違いないわ。そしてこの時点では、そのうち一人が生きていると発表されているのも事実。それが偽装で、実はすでに死んでいることを知っている人物は、ごく少数よ。つまり、オウラはその少数の誰かから、生きたまま捕らえられたとされる部下が実はすでに死んでいることを知らされたのよ。だから、二人とも死なせたと言ったし、ティリングを殺害しようとした。常識的に考えれば、解読できるかどうか判らない暗号を始末するよりも、尋問されている部下の口を封じる方が先でしょう」

「……まあ、納得できる推論ね」

「暗殺者が実は死んでいることを知っていたのは、システイハルナとエクス隊長、その信頼の置ける部下数名、呼び寄せた医者、わたしとその部下二名、つまりティリング少尉とアダム軍曹。それと……」

わたしはいちいち指を折りながら、容疑者を並べ立てた。

「わたしね。たしかに、その場にいたわ」

フィーニアが、かすかにうなずく。

「そしてもうひとつ。オウラはティリング少尉暗号解読作戦が偽装だということを知らなかった。だから、このリストから、システイハルナ、エクス隊長、わたしとその部下は除外できるわ。となると……」

わたしはフィーニアを見やった。彼女は、無言でわたしを見つめ返した。

「……レスペラ唯一の軍事航空の専門家。もし本当に、ヴィーカルが目的がレスペラの航空要塞化にあるとするならば……絶対に抱き込んでおきたい人物よね、あなたは」

尖塔の最上階に静けさが訪れた。遠くで鳥が甲高くさえざり始めたが、すぐに沈黙してしまふ。

「ここまであけすけに喋るってことは、もうすでにこの話はシステイハルナの耳に入ってるってことよね？」

視線を逸らしたフィーニアが、訊く。

「いいえ。まだ殿下は確信を抱いてはいないわ。わたしが頼み込んで、捜査着手を延期してもらったの。だから、逃げるのならいまのうちよ。明日、レスペラ派遣群の艇番207が、民間籍飛行船を伴って到着するわ。あなたが望むなら、帰還する便に密かに押し込んであげる。亡命なさい」

「ありがたい申し出ね」

フィーニアが、鼻で笑う。

「なぜ？　なんでヴィーカルに協力したりしたの？」

「とても断りきれない好条件を出されたからよ」

「お金？」

「まさか。わたしが金銭に執着しないタイプだってことは、知っているでしょ」

「：：ひよつとして、空？」

「正解。すべてうまくいけば、飛行船隊を率いる提督にしてやると言われたのよ」

フィーニアが、右腕を挙げる。わずかに震える指先を、わたしに突きつけるかのように。

「ガス式飛行船ならば、ペイロードに余裕があるから、片腕の女にも乗り込む余地があるの。再び、飛べるのよ」

「そんな。王都オルテンを襲撃しかねない艇に乗り込むというの？」

「まあ、そんなことにならないことを祈るけどね」

フィーニアが、皮肉な笑みを浮かべつつ、右腕を下した。

「リンカンドムを裏切る気？」

「わたしはレスペラ人よ。それに、これには実利的な面もあるのよ。」

サリュシオンだけじゃ、仮に独立した場合、完全にヴィーカルの傀儡になってしまったでしょう。わたしが軍の実権を握っていれば、少なくとも傀儡にはさせない」

「言い訳になってないわね。もしわたしが空賊に喰われて死んだら、どうするつもりだったの？」

「あなたが簡単にくたばるわけじゃないじゃない」

フィーニアが、冷笑する。

「部下の腕もいいし。それに、手加減するように空賊には指示してたしね。まあ、サリュシオンとオウラの暴走は、防げなかったけど。それに関しては、申し訳なく思ってるわ」

「ともかく、その夢は諦めることね」

わたしは肩をすくめつつ告げた。

「砲手であるあなたには、判らないでしょうね。わたしは操舵手だったのよ。しかも、とびきり腕のいい」

フィーニアが、思うように動かぬ右手に左手を重ねた。いたわることのように、そっと握る。

「……飛べない操舵手がどんなに辛い存在か。飛べない鳥。いえ、飛べなくても気高く生きている鳥は数多いから、さしずめ飛べなくなった蝶ね。美しい翅はねがあるのに、飛べない。なまじ華麗に舞った記憶があるだけに、よけいにみじめだわね。もはや重荷でしかない翅を背に、這いつくばって生きていかなばならぬのだから」

……飛べない蝶の記憶。

フィーニアが、窓外に眼を転じた。まるで、そこに蝶が舞っているかのように、視線をさまよわせる。

「悪いけど、亡命する気はないわ」

ややあって言い放ったフィーニアが、するりと腰の拳銃を抜いた。「やめてよ。ここどころ、何度もそんな目にあってるんだから。

それとも、あなたまでサリュシオン王子に倣って、後頭部を吹き飛ばすつもり？」

「残念ながら、自殺する勇氣はないわ。後ろを向いて」

わたしは素直に後ろを向いた。フィーニアに撃たれるとは思っていなかった。わたしにフィーニアが撃てないと同様、彼女にもわたしを撃てるはずがない。

細い紐が、わたしの手首を固縛する。足首も、同様に縛られる。

「じゃあね、エルダ。もう一回だけ、一緒に飲みたかったわ」

そう言い置いて、フィーニアの姿が戸口に消える。螺旋階段を駆け下りる音が、小さくなってゆく。

「フィーニア！」

フィーニアの縛り方はゆるかった。……まるで、追いかけてもらうのを期待していたかのように。

螺旋階段を駆け下りる。血相変えて王城の正門へ駆けつけたわたしの前に、一台の馬車が近付いてきた。なんと、御者台にはサンヌの姿がある。なんとというタイミングの良さだろうか。

「サンヌ！ クロイ少佐を見なかった？」

「見たものにも、少佐が命じたから馬車を用意していたんじゃないか」

「何ですって？」

「走ってきた少佐が、すぐにフォリーオ大尉が使うから馬車を用意しておくようにと言ったんです」

馬車の窓から首を突き出したテイリング少尉が、説明する。

「わたしたちも飛行準備して待機してくれて。何があったんですか？」

「クロイ少佐はどこへ？」

「馬を駆って、城外へ出てったよ」

事態に気付いていないサンヌが、のんびりとした口調で答える。

わたしは馬車に乗り込んだ。

「どこへやろうか？」

「……係留場へ」

おそらく、フィーニアはそこだ。

フィーニアの時間的見積もりは、見事なものだった。

サンヌの操る馬車が係留場へと滑り込んだ時には、すでにフィーニアが単独で乗り込んだレスペラ飛行船は宙に浮かんでいた。わたしは『紫の虎二号』に駆け寄ると、啞然としてフィーニア艇を見上げている作業員に緊急離陸準備を命じた。

「なんで離陸させたの？」

わたしは、警備にしていた義勇軍兵士に詰め寄った。

「拳銃突きつけられたんですよ。擲弾も持ってたし、作業員の命を守るには、あれしか方法がなかったんです」

「どうせどこへも行けませんよ。ガソリンも灯油も少ししか積んでいないし、たった一人じゃないですか」

作業員の一人が、言う。

「あれでも、彼女の目的地までは充分なのよ」

わたしは、气囊が膨らむのをじりじりしながら待った。サンヌとテイリングは、すでにゴンドラに乗り込んで、各種離陸準備に掛かっている。

そのうち、一台の無蓋車両が係留場に走りこんできた。ドレス姿のシスティハルナが、転がるように降りてくる。例によってエクス隊長が、続く。

「申し訳ありません、姫様」

わたしは、事の次第を手早く物語った。すべてを言い終わらないうちに、事情を察したらしいシスティハルナが、哀しげな顔で遮った。

「飛行船はお貸しします。クロイ少佐を追いかけ、彼女が望むような結末を与えてやりなさい」

「ありがとうございます」

フィーニアの艇は、ほとんど発動機を使わずに、低い灰色の雲の下をゆったりと漂っていた。

『紫の虎二号』は、ティリングの巧みな操舵により、急速にその距離を詰めていった。眼下は峨々たる山が連なっている。レスペラは南の方角だが、すで見えない。

わたしは双眼鏡を覗いた。フィーニアは、ゴンドラから身を乗り出してなにやら作業していた。わたしは眼を凝らし……フィーニアの意図を理解した。

彼女はゴンドラ脇にあるレスペラの徽章を外していたのだ。解放された鮮やかな色彩の布切れは、雨粒交じりの風に乗ってひらひらと流されていた。

次いで、彼女は旋回砲に取り付いた。砲口をキャップでふさいだまま、わたしたちの方へと向ける。フィーニアの顔に、いたずらっぽい笑顔が浮かんでいるように思えた。

「空賊を気取るつもりかい？」

サンヌが、呆れたように叫ぶ。

やがて、フィーニアは索に信号旗を結びつけた。『われに続け』を意味する旗だ。

「なにが言いたいのでしょうか？」

ティリングが訊ねてきたが、わたしはそれに答えられなかった。すでに、フィーニアの意図に気付いていたからだ。

今度は、フィーニアが拳銃を取り出した。まっすぐこちらへ向けて、発砲する。むろん、弾丸の届く距離ではない。ぱんという、間の抜けた音が、かすかに聞こえる。

「撃ってやんなよ、大尉！」

耳打ちするように、サンヌ。

そう。フィーニアは、わたしに撃ち墜としてもらいたいのだ。所属徽章を捨てて武装を誇示し、進路を強制し、あまつさえ発砲して見せた。法的には、撃墜しても構わない状況といえる。

空で死にたいのか。

「……卑怯者」

わたしは旋回砲に取り付いた。サンヌが、そそくさと装弾する。

外す距離ではなかった。わたしは長いあいだためらってから、一発だけで墜落することはありえないからと自分に言い聞かせ、引き金を引いた。

砲弾が、気嚢を貫く。

フィーニアが、もうひとつ信号旗を出した。『謝意』を示す旗だ。

「大尉！ 発動機停止の許可を！」

ティリングの言葉に、わたしは手信号で承認を与えた。このままでは、行き過ぎてしまう。

発動機の唸りが止まった。行き足のついていた『紫の虎二号』は、フィーニア艇の横をゆっくりと通り過ぎてゆく。

サンヌが、わたしの左肩をぽんと叩いた。おもわず振り向いてしまう。

「死なせておやりよ。親友なんだろう？」

「……親友なもんですか」

わたしは旋回砲をフィーニア艇に向け、ろくに狙いも付けずに引き金を引いた。まるでフィーニアに呼び込まれたかのように、砲弾は気嚢に命中してしまう。

「フィーニアの阿呆！ 自殺する勇気がないからって、わたしにあなたを殺させる気！ 卑怯者！ 意気地なし！」

フィーニア艇の気嚢から、浮力が徐々に失われてゆく。高度も下がってゆく。

「あのままじゃ、不時着しちまうよ。あの娘も、飢え死にしたくはないだろうさ」

装弾を終えたサンヌが、わたしの肩を叩く。

わたしは照準器を覗き込んだ。視界は涙でぼやけていた。狙いを下向きにし、ゴンドラを見る。なんとか、フィーニアの姿を見分けることができた。おそらくは、避け得ない死を目前にしても、泰然としているであろうその姿を。

わたしは無力だった。そして無能だった。飛行船から他の飛行船を射撃するしか能のない、愚かな女だ。……夢を追い続け、窮地に

立たされた親友の死を目前にして、それを早めてやることしか出来ぬ、役立たずな人間。

「フイーニアの阿呆！」

ぐいと気囊に照準を戻し、わたしは引き金を引いた。

「サンヌ！ 次弾！」

三発目を喰らったフイーニア艇は、みるみる高度を落としていった。わたしは旋回砲の砲口をさらに下げ、四発目を放った。当たったかどうかは、判らない。

疲れ果て、わたしはゴンドラの床に崩れ折れた。ティリングが、帰投しますと言ったことだけは、かすかに覚えている。

22 追悼

フィーニア・クロイ中佐（死後特進）の死は空賊との戦闘による戦死と発表された。……警察軍とその長たるヤラム王子の面子を守るためだ。

彼女の死の翌日、わたしはテイリング少尉とサンヌとともに、飛行装備で係留場に突っ立っていた。

暖かな天候だった。昨日の曇天が嘘のように晴れ渡り、まぶしい日差しが降り注いでいる。『紫の虎二号』は、ようやく離陸準備に取り掛かったところだ。ボイラーに火が点じられ、气囊に熱気が注ぎ込まれてゆく。どこから迷い込んだのか、一匹の黒猫がその様子を熱心に見守っていた。

「来ました。時間通りですね」

テイリングが指差す。

艇番207と、新たに契約した民間籍輸送船が、その姿をレスペラ上空に見せていた。あの『レンゼルブ夫人』と同じクラスの輸送船は、地上からの指示に従って丁寧な着陸を行った。わたしはすぐに駆け寄り、船長と手早く打ち合わせた。積荷を降ろし次第、この船はダルムド市へとトンぼ返りするのだ。『紫の虎二号』は、その護衛任務につく。往復とも、最低一艇は護衛をつけるのが、契約条件のひとつであった。

「お久しぶりです、大尉殿」

テリアー曹長以下、整備班の面々もゴンドラから降りてくる。彼らはさっそく、積荷降ろしを手伝い始めた。

わたしは艇番207へと向かった。副長のデリグ中尉が、満面の笑みで出迎えてくれる。

「遅ればせながら参りました。ご活躍は、聞き及んでおります」
「ありがとう」

わたしも微笑みで応じた。他の乗員からも、握手攻めにあう。

「そうそう。大尉の手荷物、最優先で持ってきましたよ」

デリグ中尉が、ゴンドラからふたつの荷物を引っ張り出した。小さなトランクと、嚴重に梱包された包みだ。

「こっちが目録番号四、私物トランク。こっちが目録番号五、易損品」

「今ここで渡されても……」

言いかけたわたしは、目録番号五の中身を思い出し、硬直した。

「どうかしましたか、大尉？」

デリグ中尉が、わたしの顔を心配げに覗き込む。

「……済まないけど、トランクだけ宿舎へ運んでおいて。そっちの包みは、預かるわ」

包みを受け取ったわたしは、野次馬の中から見知った顔を見つけ出すと、紙幣を渡して二点の買い物を依頼した。

わたしが花束とふたつの包みを手にゴンドラに乗り込んだ瞬間から、サンヌとティリング少尉はこちらの意図を察したようだった。

「大尉！　どうやら発動機の調子が良くないようです！」

離陸してまもなく、あさっての方を向きながら、ティリングがそう報告した。

「向こうにも不調を教えてやったほうが良さそうだね！」

わたしの承認も得ずに、サンヌが信号旗をいくつか索に結び付け始める。

民間籍飛行船に、『了解』の信号旗があがった。

「あらあら！　気流の影響か、艇が北に向かっていますね！」

好調に唸っている発動機の向きを変えながら、ティリング。

わたしは二人の部下に無言のまま深々と頭を下げた。

やがて、『紫の虎二号』は、フィーニアが墜死した場所へと『流れ着い』た。

ティリングが発動機を止める。わずかな風の音だけが、わたしを包む。

わたしはゴンドラの縁に手をかけ、下を覗き込んだ。険しい谷間の底に、飛行船の残骸が散らばっていた。遺骸の回収は、ほぼ不可能な場所であった。地上からたどり着くすべはないし、飛行船が着陸する地積もない。滞空している艇から長いロープでも垂らせば、人ひとり降りられないことはないが、裏切り者のためにそこまで危険を冒す奇特な人物はいない。

わたしは飛行帽を取った。ちらりと後ろを振り返る。ティリングとサンヌも飛行帽を取り、頭を垂れていた。

わたしは花束をつかんだ。あの活気に乏しい市場で手に入れたであろう、しおれかけた色とりどりの花。

：：飛べない蝶への手向けには、ふさわしい。

花束を投げる。谷風に翻弄されつつ、くるくると回転した花は、わずかに花弁を撒き散らしながら残骸からやや外れたところに落ちた。

小さいが重い包みを取り上げる。包装を、乱暴に解く。自らの手で嚴重に梱包したその包みの中身を、わたしはすべて谷間にぶちまけた。ガラス瓶、金属缶、陶器の小瓶、紙箱。：：：フィーニアに頼まれていた、化粧品の数々。約束の、品々。

わたしはもうひとつの包みを開けた。

「これは、あなた方も付き合いなさいよ」

ブランドーの大瓶の栓を抜き、サンヌに差し出す。サンヌはためらわずに、大きく一口呷った。満足げに唸りつつ、ティリングに手渡す。

わたしに向けて軽くうなずいて見せたティリングが、控えめにブランドーを口に含んだ。眉根を寄せつつ、飲み下す。わずかにあえぎながら、彼女は瓶をわたしに返した。

わたしは思いつきり呷った。熱い液体が、喉と内臓を焼く。

瓶を投げる。琥珀色の液体が、谷間に飛び散ってゆく。蝶に墓標はない。ましてや、飛べない蝶には。

涙は出なかった。ただ、虚しさだけが、重くのしかかっていた。

「行きますよう」

22 追悼（後書き）

最終話をお届けします。暗い話に最後までお付き合いいただきありがとうございます。見ての通りの、バッドエンドです。では、後書きめいたものを書かせていただきます。本作を書くきっかけは、『目先が変わった空戦ものを書きたい』と考えたことにあります。

色々と考えた末に、たどり着いたのが、『飛行船同士の戦い』でありました。もうひとつやりたかったことは、『親友の裏切り』でした。両者を組み合わせて設定とストーリーを作り、書き上げたのが本作となります。で……お読みいただいた皆様、この結末および、あらすじから散々煽ってきた『陰謀』の内容に関して、納得されただけでしょうか？ イエスカノーかでもよろしいので、教えていただければ幸いです。続きまして次回作の宣伝を。……すみません、新作はぜんぜん進んでおりません（汗） アクセス数を伸ばそうと中高生向けの作品……主役は高校生の男の子……を二作ばかり書き始めたのですが、これがいつこうに前に進まない。現在は若い女性を主役とした異世界物に取り掛かっていますが……これもどうなることやら。新作連載開始しました。生物学的SF風味の異世界空戦もの、『グリーン・シールド』 すみません、また空戦ものです。こちらもどうぞご贖目に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1561g/>

蝶の記憶

2011年1月12日00時55分発行